女鑑

明治三十一年三月五日發兌

第百五十一號

東京國光社

女鑑第百五拾二號目録

源爲義の妻



盗人と成らぬやうに注意せよ

斯く云ひ出でなば、誰れも〳〵能く知りたる事を、今更にこと〴〵しく言ひ立てんとする記者の迂遠さよと、必ずや、世の人は笑はむずらむ。誰れか、他人の物を盗み取るを善しと思へる者あるべき、誰れか他人の寶を盗み取る盗賊に成らむと志す者あるべき、知れたる事を殊更に大書して、盗賊とならぬやうに注意せよとは、記者の老婆心の愚さよと、必ずや大かたの人は、ふき出でて笑はむずらむ。然り、若し他人の財寶を盗む者のみを、世に盗賊といふべき者とせむには、誠に斯く今更に教へんとする記者は、極めたる愚なるべし、記者の言葉は、誠に迂遠の限りなるべし。されど、記者がこゝに盗賊なりと云はむとする者は、他人の財寶を盗むが如き、さる知れたる盗賊をのみいふにあらず。他の情を盗み、恩を盗

み、名を盜み、位を盜み、役を盜み、義務を盜むが如き、未だ世の人の、これと知らざる盜賊あれば、さる類に成らぬやうに注意せよといはむとするなり。

親の子となりて、其の親を敬せず孝養を盡くさざる者は、やがて、親の愛情を盜み親の養育の恩を盜む者なり。君の臣下と成りて、君を尊ばず忠誠を盡くさざる者は、やがて、君の恩、君の惠を盜む者といふべし。良人と成りて、其の妻を愛せざる者は、其の妻の愛情を盜める者にて、妻と成りて、やさしく其の良人に仕へざるは、其の良人の愛情を盜める者のみ。さては、兄弟と成りて、其の兄弟を愛せざる者は、即、其の兄弟の愛情を盜める者にして、朋友と成りて、信を守らず義を盡くさざる者は、やがて、朋友の信義を盜む者ならずやは。總じて、此の世に人と生れて、人の人たる道を行はざる者は、畢竟、人たる身分を盜みたる盜賊にて、此の國の人と成りて、此の國の爲めに務めざるは、やがて、此の國の國民たる分を盜みたりといふべきのみ。

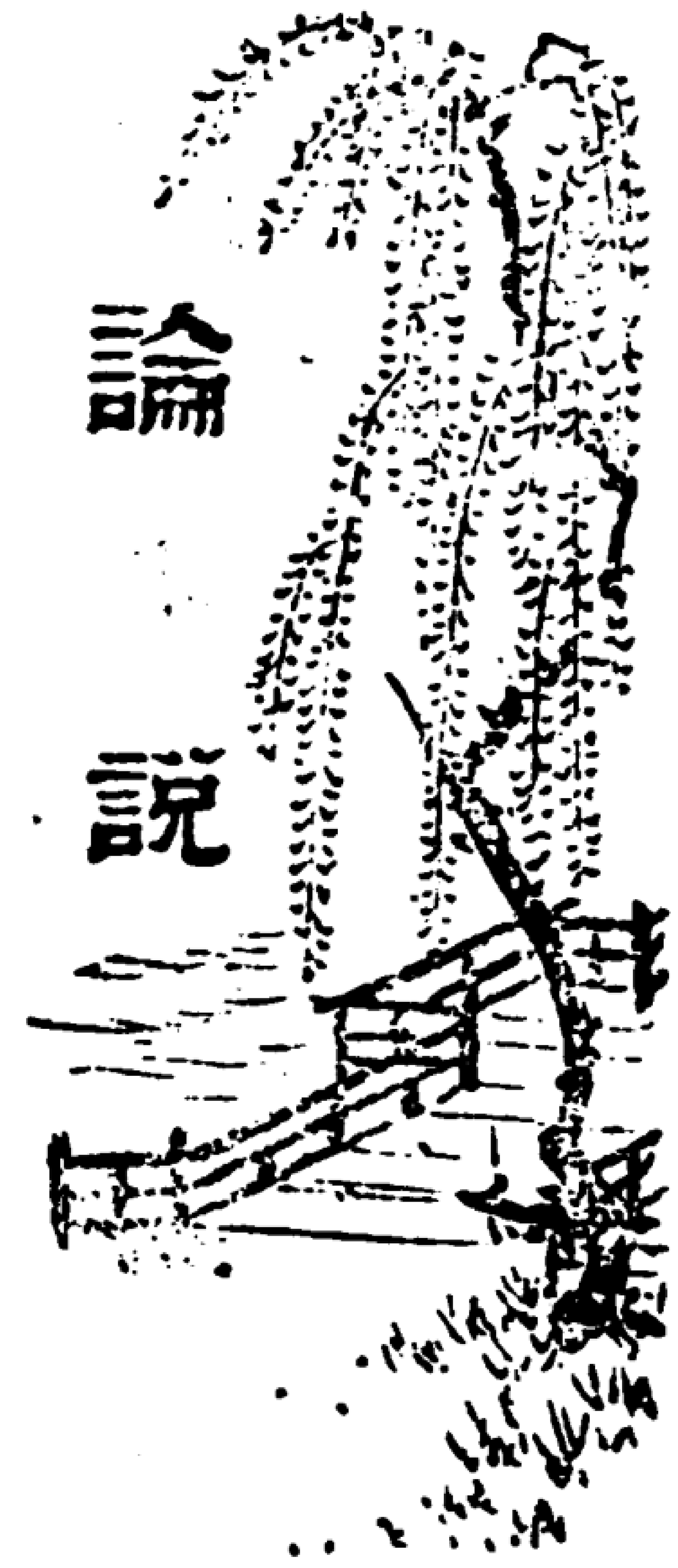
或は、大臣となりて、大臣たる德なき者は、大臣たる地位を盜みたる者。大將と

成りて大將たる量なき者は、大將たる地位を盜みたる者にして、これより下さま、其の官に居り其の祿を食みながらに、能く其の官に盡くす力なからむ者は、皆、其の官を盜み其の祿を盜む者なり。或は國民中に尊ばれ重んぜらるゝ華族の名地に立ちながらに、其の德なく其の行なき者は、上は國家の恩惠を盜み、下は國民の名望を望む者にして、また、名譽なる博士學者と成りて、其の實なき者より、すべて、社會に重んぜらるべき地位に在りて、其のはたらきなからむ者は、皆、其の名を盜むなり。

斯からむ類は、他人の財寶を盜む者にあらねど、然れども、情を盜み、恩を盜み、名を盜み、信を盜み、義務を盜む者にして、同じく盜賊のみ、ぬすむ人のみ。否、むしろ財寶を盜む者よりは、一層嫉むべく賤しむべき盜賊なり。

なは、女子の爲めに一言せば、女子たる者は、必ず人の妻女と成りて、其の良人を助け、其の一家を守り、其の家庭を守りて、兒童を養ひ育て、兒童を敎へ導きて、善良なる國民たる子孫を作るが、日本の女子たる者の義務なり、責任なり。

然るに、其の身體は、かゝる責任義務ある女子と生れながらにして、人の妻女となりて、善良なる妻女と成る能はず、善良なる家婦と成る能はず、一家の母と成りて善良なる母と成る能はざる女子は、これ、やがて、女子たり妻たり母たる名を盗む女子にして、即ち、日本女子たる分を盗みたる女子なり。日本女子と成りて、日本女子たる務めを盡くすを得ざればなり。吾人が盗人と稱する者は、斯の如し。すべて、其の地に立ち其の分を擔ひて、其の地に盡くさず、其の分に務めざらむ者を、皆、吾人は、盗人といはんとす。されば、この類の盗賊たらぬやうに心がけたらむには、誠の國民たるを得べし。故に、盗賊と成らぬやうに注意せよとはいへるなり。



論説

所謂婦人の内助

鹿山

日本國民、日本國民、日本國民なる題目は、能く公私百般の事物に使用せらる。然れども、方今使用せらるゝ日本國民の意義を解剖するときは、專ら日本國民中の男子を意味し、女子なる觀念は甚だ冷薄なるに似たり。女子は有れども無きが如く、我が邦人口の殆ど半數を占むる二千幾百萬の女子や、宛かも木偶石佛と言ふべき奇怪なる境遇に在るなり。吾人は素より男女の同質を認めず、隨つて其同權を眞理と信ずる能はずと雖も、之を以て女子を國民以外の者と擯斥することを得ず。男子と其性を異にし其務を分つは、是れ則ち女子の女子たる所以、女子の天下國家に闕ぐべからざる所以にして、國家富强の原因は實に男女各其盡す所を盡し、其守る所を守り、彼我相侵さず、克く其特性を涵養し、天の賦せる自然の能力を發揮するに在り。之を稱して女子の本分と云ひ、婦人の任務と云ふ。

女子は其天性に於て男子と異なる者あり、其權利を男子と等うせんと欲するも豈得べけんや、然れども女子天授の特質を發達し、保護し、活用し、以て男子の弱點を補ひ、不完全なる社會を改良する點に於ては、啻に男子と同等なるべからざるのみならず、寧ろ男子以上に立て男子と戰ひ、男子を征服するの覺悟なかるべからず、即ち女子の能力を以て匡救すべき男子の闕點は、其大事たると小事たるとを問はず、自ら進て裁斷回救の衝に當り、其特性職分を害せざる限りに於て、男子の協議者たるべし。監督者たるべし、指導者たるべし。柔順靜淑は女子の美德なり。然れども男子が現に惡戯非擧を演ずるを目撃し、若くは之を演せんとする意志あるを知りながら、默然之に從ひ、徒に叩頭長縮し、若くは其禍害を助長するが如きは、是れ決して柔順靜淑と稱すべからざるなり。女子にして離群索居、夫婦を求めず、社會に接せず、國家の事業を全く忘却するも可なりとせむ、消極的柔順或は恕すべし、然れども、我邦今日の賢良なる女子は、之を以て甘すべからざる重大任務を擔ふ者也。

今や臨時總選擧の期近づき、各府縣に於ける選擧競爭は頗る激烈なり、又頗る卑劣なり。悲むべく怖るべき幾多の惡弊は、頻々として日々の新聞紙上に報せらる、之を一讀するときは、實に我邦代議士の面目を汚損し、又選擧人の無識を證明し、國家議政

の大務に當る正人識者を選擧する所以の目的と全然相反する惡現象の多きに驚くのみ。是れ豈我姉妹諸子の拱手して默過すべき事ならんや。柔順と稱して屈伏し、靜淑を德として玉石混淆の弊を致すを知らずんば、是れ其精神に於て惡意なきも、事局の結果より觀れば、蓋し彼の惡意を助長し、其共謀者たるの譏を免るゝ能はざるべし。我が姉妹諸子の父たり、夫たり、子たり、孫たり、兄たり、弟たり、若くは朋友たり、師傅たり、親戚たり、同鄕人たり、一國民たる三百の議員は、國政を議定する至重の任務に當る者にして、其一言一行、國民の利害休戚に關するもの尠なからず。故に諸子は權利に於て選擧に容喙すべからざるも、子とし、妻とし、母とし、祖母とし、姉とし、妹とし、若くは朋友とし、師傅とし、親戚とし、同鄕人とし、一國民としての女子的義務をば、誠意以て之を盡さずんばあるべからず。

諸子は敢て東西に狂奔するを要せず、演說集會を催すを要せず。然れども夙興神淸き時、若くは靜夜人定るの際、諸子の父、夫、子、孫、兄、弟等に對し、愛國の至誠より、人倫の大義より、一家の榮辱より、一鄕の得失より、師友の交誼より、諄々として其理非損益を說き、赤心を推し、明識を啓らかんか、縱令如何なる愚物惡漢と雖も亦翻然として悔悟する所あらん。況んや代議士の候補者たる底の人物に於てをや、彼

等は一時名譽、利益の爲めに其本心を晦らますも、諸子が正義の太陽一朝燦然として其頭上に輝かむ、群魔忽ち形を失て眞心茲に蘇生せん。婦人內助の任務乃ち此に至て盡せりと謂ふべし。

知らざるは愚なり、知て言はざるは不忠なり、而かも言て行はずんば事功收むべからず。國を愛ふる女子、家を愛する婦人、諸子は臨時選擧に際し、其父、夫、子、孫、兄、弟等をして、惡魔の奴隷たらしむるなかれ、今や帝國の四圍は禍機鬱勃たり、議政者の其人を得ると否らざるとは國運の起伏に關するや極めて切なるを見る。茲に一言する事此の如し。

女德のしをり（一）

三輪田眞佐子

第一章　總論

おのれ既に老木に身にして、固より麗しき言の葉の出づるべきにもあらざれども、若木の暢達をねがひて、霜露の害あらしめじと思へばこそ、曩に、女子の本分、女子處世論、及び、女子教育要言をものしけれ。さればにや、讀者もおのれを親しみけん、四季の折につけて、樂しき消息を贈るのみかは、身の上の幸不幸、あるは越しかたの

歎き、行末の定めなどにつき、文もて相謀りけるものいと多し。そは、おのれ、いまだ見知らぬ人と言ひながら、舊知のごとく嬉しく思ひぬ。この頃、亦、をちこちの讀者より、更に、女子の敎草となるべきことをものしてよとの心を傳ふるもの少からず。あはれ、一樹の陰に息ひ、一河の流を汲むすら、その情互に疎からず、況して、おのれは、讀者と相親しみし日淺からざれど、などか感奮もて筆をとらでやはあるべき。女子のため最も尊ぶべきものは、才智にあらず、亦美相にあらず、將た身体の健康さへ、それに比ぶれど、物の數にもならざるものは、女德にこそあれ。されど、女德とは如何ぞやとの問題ばかり肝要なるはなし。然るに、未だ、女德につきて、大概だにものしゝ書冊もなきは遺憾ならずや、從ひて、女の道に踏み迷ふもののあるも知るべからず。由りて、これより女德のしをりをものせむ。

ふみ分けし人のしをりを志るべにて古にし道もまよはざりけり

そも〱人は、五尺の短身と言ひながら、宏大なる天地を解釋し、五十の壽命といふものゝ、過去未來を追想し、あるは推理し、恒に理の善惡を辨へ、曲直を知り、あるは醜を醜となし、美を美となし、あるは、恩を感じ、愛に順ひ、あるは物のあはれを見ては武き丈夫の袖も露けく覺え、事の變に當りては、死も鴻毛より輕からしむるなど、

神妙なる精氣の宿りに外ならずかし。古人の、人は萬物の靈と言ひけるも、由なきにあらざりけり。近來進化論流行して、人は猿猴の進化せしものなれど、さまで高尚なるものにはあらず。と誤了するものあれど、天地には眞理充塞して、その中に萬物を含むものなれば、何物か靈妙ならざらん。猿猴も既に然り。わきて人は、靈妙の最も著しきものなれば、などか自ら我身を思ひ棄つべき。昔より、人の天性につきて、兎角論ふものあれど、おのれは、善こそ人の性なれと信ずるものなり。荀子は、人の惡くに流れ易きを見て、以て、性は惡なりと言ひ。楊子は、世の善人もあり惡人もあるを見て、性は善惡の混ずるものなりと説きけり。されど、此等は皆皮相の觀察に過ぎざるべし。如何となれば、天地は存在するものなり、その中に包まるゝものも、亦、悉く存在せざるものなし。既に存在する以上は、その存在する所以の道なかるべからず。さればにや、草木の枝を繁らし、花を着くる如きも、その生を營み、類を殖すためならざるはなし。これと同じき道理にて、人類も、亦、一身を保ち、同胞を榮ゑしむるこそ、生存の目的なれ。然るに、惡は一身を苦しめ、同胞を害すべきを以て、天地存在の原則に背反し、亦、人生の目的に矛盾するものなれば、決して天性と言ふべからず。

まことや、善は物を生育する所以のものなれば、萬有存在の本源にして、亦、人類必然の性なり。人誰か春秋の花紅葉を見て、あはれを覺えざらん。これ、我に美を知り、眞を知る心あればこそ。亦、人は、仰きて天に辱ぢず、俯して地に耻ぢざる行あるばかり快き思はなきと同時に、自ら省みて、内に疚しきことあれば、必ず怏々として樂しむ能はざるものならん。天性に善根なる良心ありて然るならんかし。果して、人の性惡ならんには、物の醜を歡び、心の邪を誇るべきに、絶えてさることなきは、各疑はざるところなるべし。



史談

女御貞子

山本正周

仁明天皇の女御藤原貞子は、右大臣三守の女なり。資性婉順にして、女德をそなへ、一擧一動も禮法にかなはぬといふことなければ、貞子が宮中に入りてより後は、後宮の女房達、いづれも其の德を仰がぬものなく、後宮の風儀もとみに一變しければ、

天皇の御覺もいとめでたかりき。かくて、天皇は、寶齡四十一にてかくれさせ給ひけるが、貞子は殆ど飲食を癈し、姿もやつるゝまでに哀慟して御枕邊を去らず、側に見る者之に動かされて、誰しも袖をしぼらぬものはなかりしといふ。

山邊皇女　仝

大津皇子の妃山邊皇女は、天智天皇の皇女にましまして、皇子の許に歸ぎ給ひし後は、御伉儷いと睦しかりき。しかるに、大津皇子は、ゆくりなくも罪によりて、はかなく失せたまひければ、妃は此の事を聞し召して、髮もをどろに御沓さへも穿ちたまはず、跣足のまゝにて皇子の御亡骸の處へかけつけたまひ、遂に殉死せられければ、見る者誰とて其の貞節を感ぜぬものはなかりしといふ。

源爲義の妻　鹽井ふく子

抑國亂の元は、多く女嬖にありとか。むかし　鳥羽法皇、藤原長實の女美福門院を寵し給ひ、そが生みの御子、體仁親王を立てまくればしめし、崇德天皇の皇太弟となし、天皇をして、强ひて讓位を行はしめ給ひぬ。之れ即ち近衛天皇と聞えまつる。されど幸あらせ給はず、早く崩れさせ給ひぬ。崇德上皇乃ち巳が長子重仁親王

の即位を欲し給ひしかど、美福門院、天皇のかくれさせ給ひしは、上皇の呪詛ならんとて、法皇にすゝめ奉りて、上皇の御弟雅仁親王を立てられけれど、上皇の御意は平ならずおはせしに、保元元年、法皇かくれまして、上皇喪に赴き給ひしに、門を閉ぢて入れ奉らず、よりて、上皇、いたく怒らせ給ひ、にはかに兵を起して自立せんとおぼしたち給ひ、謀を頼長に告げ給ひけるに、頼長賛成し奉り、白河殿によりて、源爲義を召し給ひぬ。爲義、よりて、其の子八人を率ゐて、白河殿にまゐりたり。ひとり、長子義朝のみは内裏に赴きたり。

此處に頼長、諸將と戰を議せしに、爲義の子爲朝驍勇にして謀あり、策を建てゝ曰ふやう、凡そ寡を以て衆を討つは、夜戰に利あり、今夜直ちに皇居を襲はゞ、天明を待たずして事定まるべしと、されど、頼長きかず、南都の僧兵の至るを待ちて戰はんとする程に、朝廷にては早く義朝の策を用ゐ、其の夜天明に、一千七百余の兵を遣はして、白河殿を襲はしめたり。爲朝等防戰甚だつとめ、一度は退けたりしかど、たま〳〵義朝火を上風に放ち、烟焔天に漲りしかど、上皇の軍遂に大敗し、上皇は薙髪して仁和寺に幸し、後に讃岐に移され給ひ、頼長は流矢にあたりて薨じ、爲義以下是非なく降りぬ。之を保元の戰と云ひて、世にも名高き國亂なり。

此處に爲義の後の妻女、內紀大夫行遠が女なるは、かくと聞くより、いたく悲しみ、如何にもして、夫及び子たちが命の助かりなん事をいのりのため、石淸水へ參ゐり、ひたすらにだのみをかけしかど、神はくませ給はでや、朝廷、義朝に命じて、爲義父子を切らせしに、義朝是非なく父と弟とを皆切り捨てぬ。あはれ如何に殺生は武門の習ひなりとて、生みの父親をうち、兄弟を殺ろすとは、古今未曾有の事どもなり。折りふし、爲義の妻は、かへるさ、すでにかくなんと聞き、なげきは云はん方なく、天も神もあらぬものかとばかりなきあこがれ、はては、夫も子もなき世に、生きてまた何をか待つ事あらんやとて、所しも赤井河原のほとりなりしに、こしより走り下りて、身をなげんとしけるに、相ぐしたるもの共にへだてられ、思ひ果さず。さらば、せめて、判官殿のうしなはれ給ひつる所へとて、それよりすぐに七條朱雀へこしをむけて行きけれど、切られし人のはや影もなく、たゞすさまじき風、袂を吹きかへすばかりなり。妻女はそゞろ悲しう、それより、また、子供の切られたると聞く船岡山へとて、桂川をのぼりに行きけるが、五條の末のほとりにて、こしをたてさせ、泣く〳〵下りて、なき人たちがために、塔をくみをりしが、子を思ふ淚に前後もわかず、そゞろにかきくれ、はては小石を袂に拾ひ入れ、川岸よりおち入りて、やみ路へとまよひ

入りしに、めのとの女房も、こを見るより、おくれぬものをとて、つゞきて沈みけるを、人々あわてまどひて尋ぬるほどに、はるかの下より、やう〳〵あげにけれど、はやこときれて、せん方なく、その夜、とりべ山にて煙りとなしにけるこそ果敢なかりしか。あはれ源氏のみなかみしもをして、この妻女の如く人情あらしめ、血脈を思はしめむ、源の枯るゝ事もなからましを。



家政

折形

有住齊

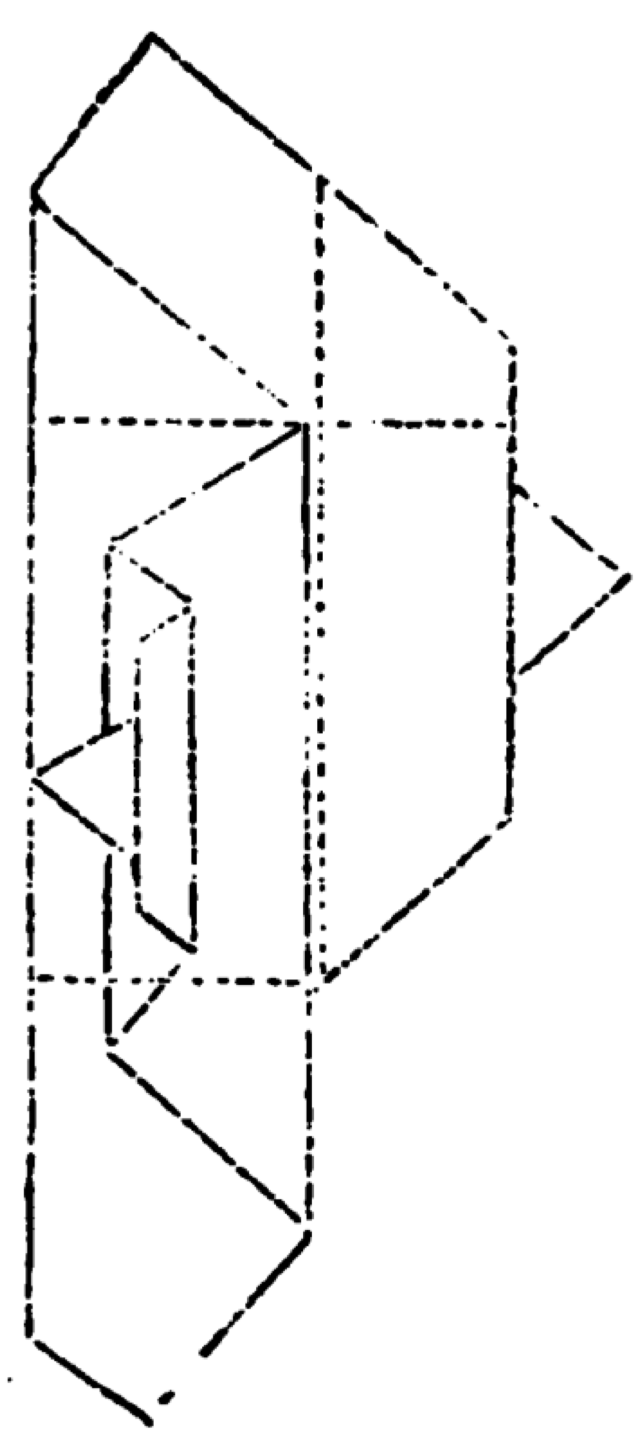
おしろい包



下包あり。上畳あるべし。



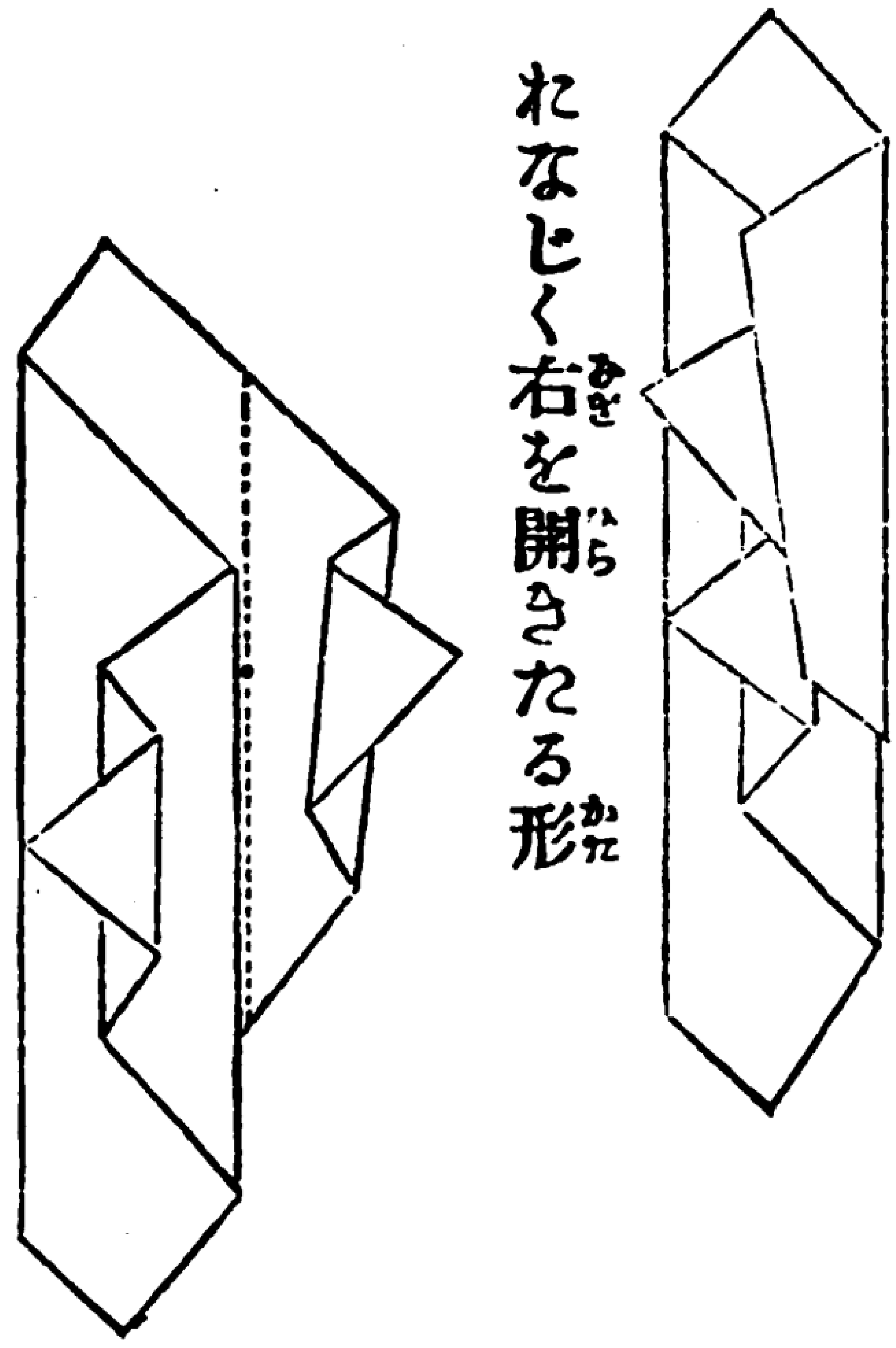
おじく上下を開きたる形



おなじく右を開きたる形

わたし金包

下包なし。上書あるべし。



れなピく右を開きたる形

茶の湯

孤峯菴不羨
閼葦雄

本誌第百三十六號より、編者の乞はるゝまゝに、及ばずながら、家政欄の一科、茶の湯を擔當せしを以て、爾來、逐號、聊か諸孃の參考にもとて、薄茶、炭、濃茶の三手前を掲げしが、前號にて、既に其の終りをつげたり、然るに、文章は平易を旨とし、つとめて茶禮初學の人に解し易く、親切を第一として、文の巧拙は意に介まず、たゞ手の運ぶまゝに記しゝなれど、或は錯雜繁に失するの節ありしやも保すべからず。讀者その拙劣の罪を、深くとがむるなくんば幸ひなり。

何、茶禮講習の諸孃の參考に、種々の心得、作法又は、古人の著し給へる書籍の重要なる點を拔萃して示すべきこと夥多にして、終生本誌に筆を採るも、容易に盡すべきに非ざるべし。されど、是より、其の大體をつぎ〳〵にかゝげんとす。こゝには、先づ客の心得よりいふべし。客の心得にも、亦種々の類別ありて、正式一會の茶の湯濃茶の客には、容易

に往き難く、又招待するにも、其の人を見て心得べきことなり。依りて、薄茶一服の事として約束するも、不意の往きがゝり等にて、釜のかゝり居ることあり。此の時の客の立居振舞、一通り教へよと、編者よりの内意もあれぱ、先づ、薄茶手前釜日に出逢ひたる時の客の心得方を記さん。そは次號にて、

女禮

禮節教授　有住常子

火鉢出し様

三足あるものは、足二つを客の方へ向けておき、角形なる火鉢は出らざるやうにおき、大きなるは、兩人して持出でおくべし。

三足のものは、右の手にて縁をもちて、左の手にて手前の方の足の中程などをもちて、角の物も、左の手にて下をうけ、右の手にてはしをもちて、丸きものは左の手にてうけて、右の手を、右の胴にそへてもちて出るなり。

まづ、右の如く持て、兩足をつまだてゝ、右の膝頭をうかして、右の方に膝を捻り、(此時左膝頭を右の方へずらすべし)ますぐに向ひたちて、ほどよく持て、進みゆきて、客の前、三尺手前にて、左足を右足より半足ひきて、左膝頭をつき、次に右膝頭をつきて、右膝頭を、すこしあとに引て、踵をおろし左膝頭をすこし引て、踵をおろし、次に、右膝頭をすこしひきて、すわりて下におきて、左右の手を膝の前に引て、左右とも、掌をうちの方にして、四指を火鉢の横に、大指を、火鉢の前の方につけて押して進めおくべし。

さて、左右の手を、膝前に引付て、指みな、甲の方へするやうにして、膝頭につけて、右をまづ引て、踵をつまだて、次に、左を引て、踵をつまだて、次に右をすこし引て、右膝頭をうかして、右に膝をひねりて、(此時左膝を右の方にずらすべし)ますぐにたちて、右足を、一足あとに引き、次に左足を、一足引きて、次に右足を、左足のあとに、横ざまにつけ、次に左足を右足のさきに、竪ざまにつけて、踏そろへて、左足よりあゆみいでゝ退くべし。

兩手は、事もなげに、横樣より前の方にたれたるべし。臂を張らず、肩をもやすらかにしたるべし。

同さぐる樣

すゝみいでゝ、さきのあたりに跪きて(跪き樣先のごとし)兩手を、先にずらしすゝめて、右膝をすゝめて、踵を平らにおろし、左膝をすゝめて、踵を平らにおろして、火鉢の手前の方のはしを、そとどりて引て、すこしよせて、また取直して、引寄て、持よくして、もちて、右膝をすこし引て、踵をたてゝ左膝をすこし引て、踵をたてゝ、又右膝をすこし引て、膝頭をうかして、右に捻り、ますぐにたちて、右左と二足引て、三足目に右足を左のあとに、次に左足を、右のさきにつけてめぐり、左足よりあゆみて退くべし。

炭の置樣

炭取に、火箸を、そへてもち出でゝ、まづ火箸にて火を直すべし。

古法は、手にておくことなれども、火箸を用うるも苦しからずかし。



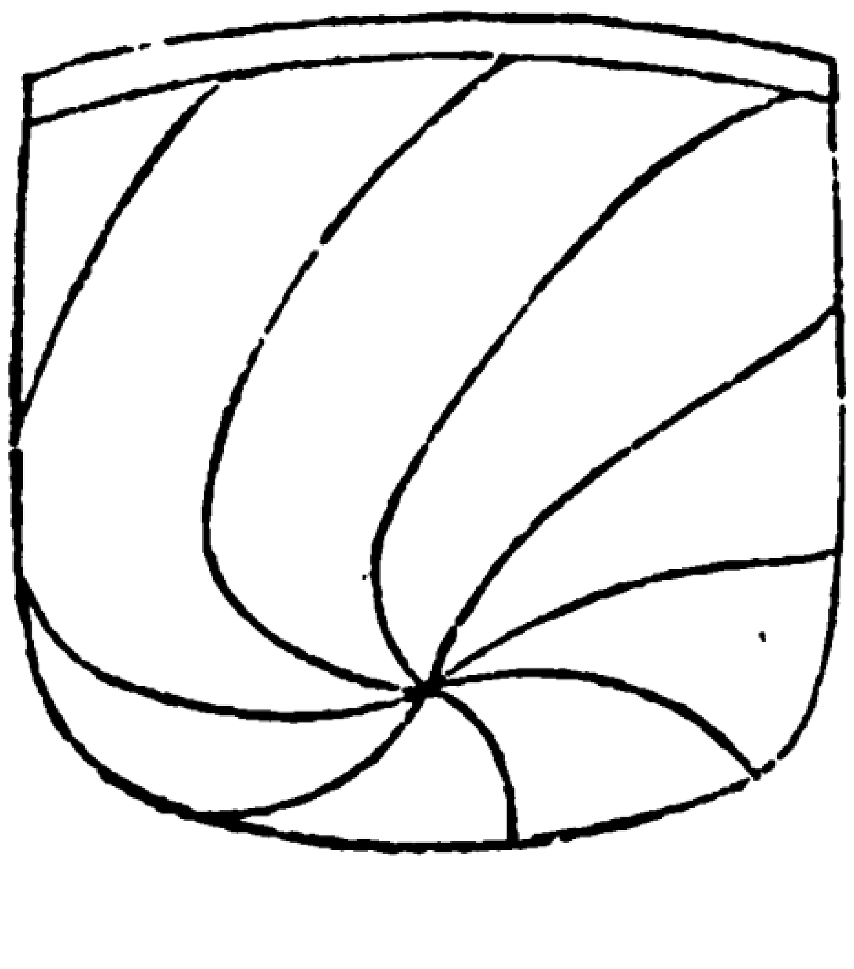
たちぬひ

西山たい子

(八十四) ねぢり袋

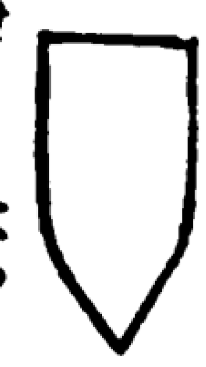
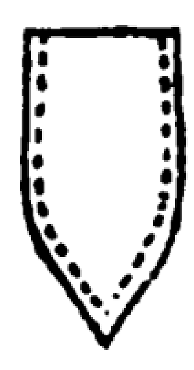
ねぢり袋は、四合せ袋より今少しせまき切れを、五片、或は六片合するにて、また菊袋の如く、縦を短かき切れをはぎてつかふもよし、合せ方も四合袋と同じやうにすべし。

そのぬひ上り

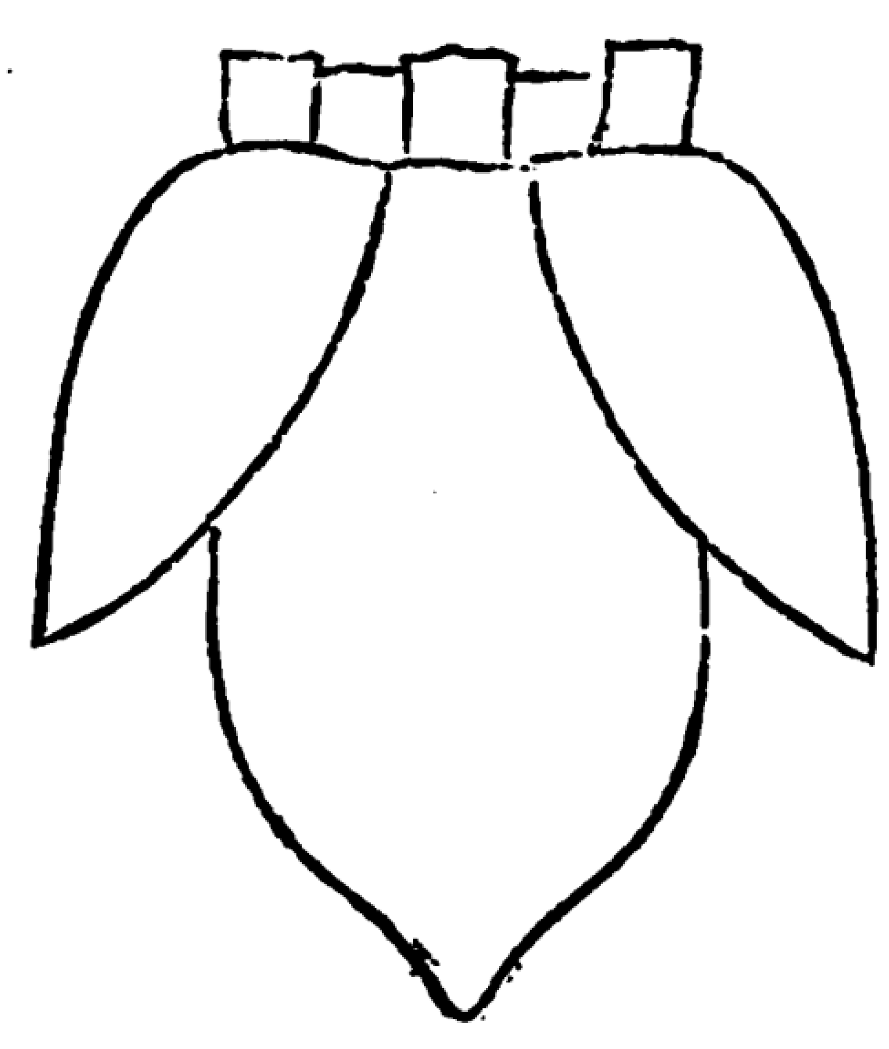


(八十五) 蟬袋

うつせみのからと云ひて、金銭を入れんには、いむ人ありて、こをぬふ人はまれなりと、さるためしもありや、なしや、つくり見んもまた面白かるべし。

まづ  かうやうに紙を切り、蟬の胴とす、胴は、背と腹と二片要するなり、切は同じなるもよし、異にするもよし、例の如く紙にはりつけて、裏の切れをも同じ形に切り、四片合せて、その裏がはを出し、 口をあけれきて、背と腹とをぬひ合せ、ひきかへして、表を出し、そを胴とす、それより  圖の如く羽の形左右二片、及び羽裏二片、同じやうに切り、胴の表の兩傍につけ、口切をつけて縮るべし。

その圖



造花

伏見藤三郎

薔薇

こゝに造らんとする薔薇は、我が國には産せざれども、西洋諸國にては最も稱贊せられ、花瓣も大きくして美はしき花なり。名は何と稱へけん知らず、實物は舶來することも稀なれども、造花は往々見ることあり。各種の薔薇、此の造り方にて、應用すべきもの多し。

滿開花の造り方　花瓣は、白天鵞絨にてつくる。（白天鵞絨は、品稀にして、時によりては品切のことあり。かゝる場合には、色天鵞絨の色を抜きて用ゆべし。此の色抜きの法は、獨り造花の折りにかぎらず、多くの場合にて必要のこと多ければ、特に嬢たちの心得置にもとて示す。固より、如何なる品、如何なる色にも抜き得るなり。先づ、水五合の内へ、阿片末四匁と、臭酸三匁とを入れて、之を火にかけて能く熱し。又別器を採りて、水五合を入れ、内に、マルセル石鹸三匁を入れ、能く溶きて後、醋酸二グラム（五分餘）を入れ、全じく火にかけて熱す。さて、赤にても、黒にても、適宜の色天鵞絨を採りて、初めに拵へたる阿片と臭酸との熱したる液の中に入れ、凡十分間許して鼠色に變じたる時取り上げて、後に拵へたる、マルセル石鹸と醋酸との熱液の中に投じ、暫くすれば白色となるべし。之を引き上げて、清水にて能く濯ぎ洗ふべし）此の白天鵞絨の裏より、薄

第百二十二圖



く姫糊を引きて、乾して後、第百二十二圖の如き三種

の形に、甲、四枚、乙、丙、各五枚を斷ち、色染は種類によりて各異なれども、樺色のもの最も普通なれば、こゝには樺色の染方を示す。先づ「スカレッ」を薄く溶きて天鵞絨の裏に引き、なま乾きのとき、表を「オウラミ」にて全体を黄色に染め、尚其上に「フロクシン」を薄くかけるときは樺色となる。鏝のあて方は、甲、乙、丙三種の花瓣の内、甲は、表より中眞を筋鏝にて引き、(鏝をあつるときは、花瓣は必ず布片を疊みたる上に置き、鏝は總じて燒きて用ゐる)兩端を全じく筋鏝にて縮らす、次に、乙も表より中眞を筋鏝にて引き、又兩端を裏より筋鏝にて幾度も引きて逆れ反る樣にし、丙は花瓣の元を表より丸鏝にて少しく凹ませ、裏より先の方を筋鏝にて外部にそりかへる樣にし、尚縁のあたりを裏より筋鏝にて細かく引きて捻れ反る樣に造る。是より蘂を造るべし。蘂は、先づ二十番のヵタン糸を四五十本採り、薄糊を引きて、長さ一寸許に斷ちおき、別に、米の粉に「オウラミン」(黄色)を混ぜ、薄糊に溶きてどろ／＼にし、之を前に斷ちおきたる糸の先に胡麻粒位の大さにつけ、「マセンダ」にて其の先を少しく赤く焼糊す、是を乾し置きて、又別に、黄色の木綿糸八九十本を、菊の眞を造りし方法にて總子の如き形に細き針金にて絞りて先を短かく斷ち、此の回りに、前の乾し置きたる蘂を參差相交て配り、(前號櫻化の蘂と畧相同じ)後此の回りに花瓣を着くべし。花瓣を着けるには、天鵞絨の表内部に向く樣にして、其の元に壓糊を付け、先づ、甲四枚を配り、其の外部に、乙五枚、丙五枚を順次恰好善く配り着くべし。萼は、第百五十號に示せる天紅薔薇の萼と全じものを造りて付くべし。莖には紐護謨を通すなり。

半開花の造り方　花瓣は、滿開の花瓣乙のみ五枚

を用ゐ、色は滿開と仝じに染め、蘂も同じものを用ゐて、花瓣は滿開と反對に、天鵞絨の表外部になる樣に着くるなり。鏝のあて方も其のつもりにて反對にあつべし。尙、鏝は滿開よりも深くあてゝつぼむ樣につくる。萼滿開と仝じ。

蕾の造り方　は、天紅薔薇に仝じ。

葉の造り方　も、第百五十號天紅薔薇の葉と仝じつくり方なれど、重ねてこゝに記さず、付きて見るべし。尙、大凡の場合にて、葉を造るに注意すべきことは、先づ色染めする前に、寒冷紗を能く洗ひて糊を拔き、後之を色染し、竹簇（しいし）をかけて張りて、之を乾し、後又糊を引くことを忘るべからず、若し、其儘にて色染するときは、或は斑點等を生じて、思ふ樣の色出でざるべし。又染むるとき染料の中に明礬を繪の具の五倍入れて染むることを忘るべからず。若し明礬を入れざるか、又は入るゝも少量なるときは、數日にして色褪すべし。常に心がくべきことなり。

第百二十三圖



造花法の記述につきて解し難き處。又は實地に試行して、花の恰好色合など意に叶はざる點につき說明を望まるゝ諸孃は、往復はがき、若くは返信

用郵券を添へて、國光社女鑑編輯部宛に質問せらるべし。直ちに應答す。

伏見　藤三郎

學園



秀歌集（十七）

盬井正男

○

たらちねはかゝれとてしもうば玉の

我が黒髪をなですや有りけむ。

○これは、後撰集の雜歌の部に在りて、遍照が初めて頭をおろしたりける時、ものにかきつけ侍る歌なり、○たらちね。親のことなり。もと、たらちねとは、乳もて足らし育つるといふ意にて、ねは美稱に添へたるにて、かくて母といふ詞の枕詞に用ひたり、母は乳もて小兒を足らし育つるものなればなり。さて、それより、何時しか、其の枕詞をやがて母といふ意に用ひ、また親といふ意に用ふるやうに成れり。後には、父の事をたらちをといひ、母のことをたらちめなどいふ詞も出でたるも皆、もとは母といふ詞の枕に用ひたるたらちねより起れる詞なり。こゝのたらちねは、親の事なり、或はたらちねの、本の意は、日足らしねといふことにて、小兒を日足し養ふといふ意にて、母の枕詞に用ひたるものなりともいふ。何れか正しきにや、暫く前説に從ふなり。○かゝれとてしも。斯くあれとてマアーといふ意にて、斯くあれとは。出家せんとて頭髮を剃りたるをいふ。○うば玉

の、ぬば玉の訛れるにて、黒髪の黒しといふ詞の枕に置きたるなり。ぬば玉とはからすあふぎといふ草の實にて、かたく玉の如くにて、いたく黒き物なれど、さて黒しの枕詞とせるなり。○なでずやありけむ。撫でなかつただらうといふ意也。やは疑ひをあらはせる詞なり。

○一首の意は、我が親は、かく頭髪を剃りて出家せよとては、幼少の時に我が頭髪を撫で、可愛がり養育せし事には無かつただらう。それを、今かく剃髪するワイといふ意にて、髪をそり出家せんとして、我が子美はしかれど愛したまへる親の事など思ひ出でてよめるなり。よく人情の誠をつくして、あはれ身にしむにこそ。

○

人の親の心は闇にあらねども
子を思ふ道にまよひぬるかな

○これも後撰集の雜歌の部にありて、兼輔朝臣が、人々と子どものうへなど語りあひたる時によめる歌なり。○子を思ふ道。我が子の世に幸福多かれ、我が子の命長かれなど、いろ〳〵我が子の上を思ひきづかふ事なり。○まよひぬるかな。まよふは迷ふに仝じ。

○一首の心は、子を有ちたる親の心といふものは、迷ひ易き闇夜にはあらざれども、我が子の上を思ひきづかひては、とかくに、さま〳〵と迷ふものであるワイといふことにて、一首の意は、明かなるべし。誠に切なる人情の誠をいひ出でて、有り難くも尊くも身にしみて、涙そゞろにこぼるゝ歌なり。人の子たる者、これを讀みて、泣かざるは、人に非ずともいふべし。

○

慰むる言の葉にだにかゝらずぞ
　今もけぬべき露の命を

○これは、後撰集の十四卷にありて、讀人は知れず。獨り思ひ佗びたる折りから、女の許よりいといたくな思ひ佗びぞと慰めおこせたりける時によめるなり。○慰むる。さやうに甚しく思ひ佗ぶるなよと慰めよこせる言葉をいふなり。○言の葉にだに。俗に言葉にでもといふやうなる意なり。○今もけぬべき。今のまに最早消ぬさうなといふことなり。

○一首の意は、さぞかし思ひ嘆くなよと、深切にも貴孃が慰めて下さる言葉にでも、かやうにきくことなかりしならぞ、我が思ひ嘆きて、おぼつかなき命は、今の間にも最早はかなく消ねたであらうものを、さすがに慰めこせたまふ御言葉ゆゑに、僅に命をつなぎとよむるやうに思ひますと、慰めたる人の詞をよろこびたる歌なり。露は草葉に緣あるものなれぞ、言の葉といひ、露の命といひ、さて、慰めの言葉にあひたることを、かゝるとあやなしいへる巧みを見るべし。

○

數しらぬ思ひは君にあるものを
　おき所なきこゝちこそすれ

○これも、仝集の仝卷にありて、讀人は知れず。○數しらぬ。幾何といふ數もわからぬほどの澤山の思ひなり。○思ひは。我が思ひをいふなり。○おきどころなき心地。俗に遣る方なき心地、或は遣るせなき心地といふやうなる意なり。

○一首の意は、我が澤山の思ひは、皆、君の上を

思ひてあるものを、遣る方もなき心地がするワイといふことにて、一首の意は明かなり。やる方なきまでに、切に思ひ思ふ心なり。

○

れき所なき思ひとしき丶つれぞ、
　　我にいくらもあらじとぞ思ふ

○これは、前の歌に女の反したるなり。○れきぞころなき。前の歌にては、其の女を切に思ひ思ひて、やる方なき心地するといへるを、こ丶にては、其のれき所なきといふ詞を、所々方々に思ふ人ありて、それ故に此處にこそと置き所なきといふやうに取りたるなり。○我れにいくらも。我が上には、貴方さまの思ひは、幾何もかけたまはぬといへるなり。○一首の意は、貴方は所々方々に思ふ人數多ありて、こ丶にて慥に思ひかけたまふ所なしときけぞ、さては、我が上には幾何も深くは思ひかけたまはぬ事ぞと思ひますワイと、れき所なきといへる詞を、前述の如く、男の云ひたる意義に取りちかへて、かく恨むやうに反したる歌にて、反へしの手振諴に面白からずや。

ふゞくろ入添

下田義天類評論

原文縣居翁の作

第十五

左の一篇は、翁が、本居宣長翁へ贈られたる書簡の一なり。宣長翁へ贈られたる書簡は、寒暑存問の御答辭まで悉皆保存して、今猶松坂の本居家に秘藏せり。さるを、この一通のみは、いつの頃に

か紛失しけむ。今同家に傳はらず。伊勢、美濃、尾張等にて、これを秘藏せる家二三軒あれども、實物につきてそれを見るに、いづれも皆その眞筆にあらず。傳寫の謄本と見えたり。故に、誤寫甚しくまて、いづれも通讀し難し。若、女鑑愛讀の方々の内に、その原本を持ち傳へたる方もやとて、搜索かてら、先この書簡をとりいでつ。歌論に係らざる所多かれど、全體を其の儘にこゝに掲載することゝしたるは、原書の存否を同好諸君に問はむが爲なり。

新年の慶事申納候ふ。彌御萬福御重歳成さるべく歡喜致し候ふ。小生無事迎年に及び候ふ。御安念下さるべく候ふ。舊冬霜月と十二月との芳束到來。古事記中卷御返下落手致し候ふ。下卷かし申すべきの所、據なき門人の寫し度しと申候に付、かし遣はし候ふ所、其の人據なき多事これあり。いまだ返却せず候へ共、猶當月中には來り候はむ。其の上に一往一覽候て、御かし申す可く候ふ。聊延引ながら、御待成さるべく候ふ。日本紀訓、先年存寄いたし候所、宜からぬ事多く候間、去年神代紀を改め候はむと取かゝれる中、萬事指かゝり、漸く十月、萬葉六卷まで業を終へ候ふ體裁打捨置き候ふ。今春元日より是にかゝり、漸同月廿八日に一訓記了。猶再見候へど、塵を拂ふが如く、改む可き事出來候ふ。此の事は四十年來之願ながら、閑なく、且はいまだしければ、開口せず候ひしをも、はや命旦暮に迫り候へど、古意を以ちて訓むに、元來本文に誤字衍文も多く、又は甚前後錯亂せし文もこれあり候ふを、今度改め候ふ。只今迄神代紀を講讀せし人、此の本文の錯亂等などいかゞよみし物か。只本文を

むよくもよまで、空に理を設けて附添へいふ故に、是を味ふるに到らぬ事と聞えたり。書物は本文をよくよみ、其の文に從ひて意をいふべき事勿論の事なるを、本文を、我が古言もてよみぬべき事を知らず。たゞ文字に泥みて訓む故、自、漢ごゝろにうつりて、皇朝の古意にうつらぬなるべし。古事記を見給ふに、も此の紀をむかへ見るに及ぶものなく、且此の紀を見くらべぬる時、古事記は文意もよく聞ゆる事も知らるゝなり。彼の一書といふは、即古事記の類の數書有りしを、から文に直して紀に添たれど、よろしからず成りし事も多かり。又たまたまは、古事記より紀によき事も無きにあらず。から文字を奴のごとくつかひて訓むほどにあらでは、我が朝の古意をぞ得がたきを、我が朝の人代を讀さて、神代を意得むと嗚呼するをて意のみ世に行はれぬるなり。

一、古事記御覽御案と合ひ候ふ事、又は御按の外に宜きもこれある由、又御案と相違の事も多しとの事、必さもある可きなり。其の相違の事を委しく御示し成さる可く候ふ。度々會讀せしといへど、誤る事も多く、今又見る度に改る事もあれど、其の相違こそ好しき事なれ。必書きて見せ給へ。猶また思ふ事あらばいふべし。

一、萬葉別記に書きしは、たゞ萬葉は、男女の戀情のみ有りて、教てふ事總てなしといふ愚儒之説を破り入り、皇朝には同姓を娶るなどいふ事、近年之儒の口實なり。よりて、それら一二を論ぜしのみなり。總べて皇朝之古は、母を貴みて父を專とせず。故に同母を兄弟とし、異母を兄弟とせざり。是を以て、異母兄弟姉妹等を配とせし事有り。から國も、元はさと見えて、莊子之旨さる事なり。只、周の武王、其

の主を滅して、立て假に私之制を立しより、天下に内心には用ゐずとも、其の言書に殘りしを以ちて、後儒之證と思へり。凡周文武之大惡心、陋くもけがらはしきを、それをも措きて、天地の意に背きて立てし制を守るこそ愚なれ。

近頃見候に、先年太宰純が辨道書といふ物を一冊出せしを、鳥羽義著といふ人惡みて破却し、から國の聖人と稱せる人を、證を擧げて皆罵下せし辨道書といふ一冊これあり。皇朝の大意はよく得たる人と見ゆ。此の書今は判失せしが、古びたる本のみこれ有候ふなり。御許に御らむ候哉。左なくも、書林御尋ね候へ、京大坂には有るも有らむ。必御覽成さるべく候。我が朝の事をいふ人も、其の本、今はから文を證とすれども、明かに辨せしもの也。から國の惡國にて、聖賢なく、仁義禮等の名のみして、實無き事の本を知るには、右の辨々がよく候也。

右萬葉の奧に書きしを見せ候はむを、いかゞ紛れ候ふや。其の小冊見え申さず候ふ。重ねて遣はすべく候ふ。

一、語意の事書くべき草稿一冊これ有り候ふ。此の度遣はし候ふ。御覽候へ。是はいまだ宜からず候ひて、大意をもいまだ記さず候ふまゝながら、先遣はし候ふ。御覽之上見付候ふ事は助言成さるべく候ふ。

一、續紀の宣命の事、よくぞ御心がけ問れ候ふ。一通り見候ふに、尤の事共これあり候ふ。答ふ可き事も多し。去かしながら、宣命集めたる本なけれども、度々本書を取出し、くり出して見候事、甚勞れ候ふ故、延引に及び候ふ。何とぞ其の文ども書集め候ふて、御こし候へ。左候はゞ、早速答申し進ずべく候

ふ。何事も繁多にて勞れ候ふ故也。
一、草庵集の註出來の事仰越され承知致し候ふ。
拙の門にては、源氏までを見せ候ひて、其の外は、諸記録、今昔物語などの類は見せ候ふ。後世の歌書は禁じ候へど、可否の論に及ばず候ふ。元來後世人の歌も學もわろきは、立所の低ければ也。先年或人の乞にて書きし物に、諺に、野邊の高がや、岡べの小草に及ばずといへり。そは及ばぬにあらず。立所の低ければなり。と書きしを、こゝの門人はよく聞得て侍り。已に彫出され候はゞ、とてもかくても有るべし。前に見せられし歌の低きは、立所のひくき事今ぞ志られつ、頓阿など歌才有りといへど、かてみを出るほどの才なし。鎌倉公こそ、古今の秀逸とは聞えたれ。

鈴屋翁の草庵集玉箒を書き賜へるにつきて、縣居翁が深くこれを誡め賜へる物語りは、既く人口に膾炙せるものあり。今、平田篤胤翁の著されたる玉襷を左に引證して、讀者の參考に供すべし。曰はく、

御許に親しく行きかひせる石原正明山下正彦などに聞けることあり。(こゝに御許といへるは、鈴屋翁の御許になり。聞けることありといへるは、平田翁が聞かれたる也)そは明治四年の比に、草菴集玉箒といふをつくり給ひて、縣居大人の許に遣はして批評を乞はれけるに、加茂翁その消息をのみ見て、玉箒を封じたるは披見なく、汝は總に事をなすべき人にてこそと末頼母しく思へるに、草菴集つれの奴となりて、あつたら暇をつひやせるこそいふかひなけれ。斯るつたなき物にかゝづらふ心にては、學の大業なりなむことは覺束なしと叱

り賜ひしかど太く恥ち畏みて侘られたる云々、といへり。本文の敬誡ありしにも關はらず、其の草稿を送りし故に、重ねて此の嚴誡を垂れ賜へるにや。

本文とは聊か其の主意も替りたる所あるに似たれども、かゝることも有りしなるべし。合せ見て、縣居翁の卓識を察すべし。さて、野邊の高かや岡部の小草に及ばず。そは及ばぬにあらず、立所の低ければなり。とは、古今未發の卓論にて、千古に動くまじき格言なるべし。古來歌學に係れる著書は千篇萬章、實に牛に汗し棟木に充ちなむほど多かる可けれど、かく一言にて盡されたる教訓は蓋その類なかるべし。高きにありて低きを見れどその低き事一目の下に瞭然たれども、低きにありて高きを望む時は、たゞ自己立脚の地の低きを知らざるみのならず。他の高きをも見認め難き事あり。立脚地の高低を知ることすら能はざるものは共に我が敷島の道をかたる可きやからにあらず。西行以來世人の詠みくつしたる歌道を、後、普光園、攝政良基公と申し合せて、再度正道にもりかへしたるは、頓阿の力なりと聞けり。彼の愚問賢註のあげつらひを見、また其の歌の口調の程を察するに、實に左もありけむかし。此の道の爲に盡されたるいさをは、千歲に傳ふべし。されど、其の詠歌は吾人の詠歌の模範とすべき口つきにも非らざるべし、況むやこれより下位の人々を學ばむとするものをや、其の立脚地の低きこと憫む可きものなり、今様端歌の燒直しを以ちて、明治聖代の詠歌とするもの、猛省せずして可なる可けむや。

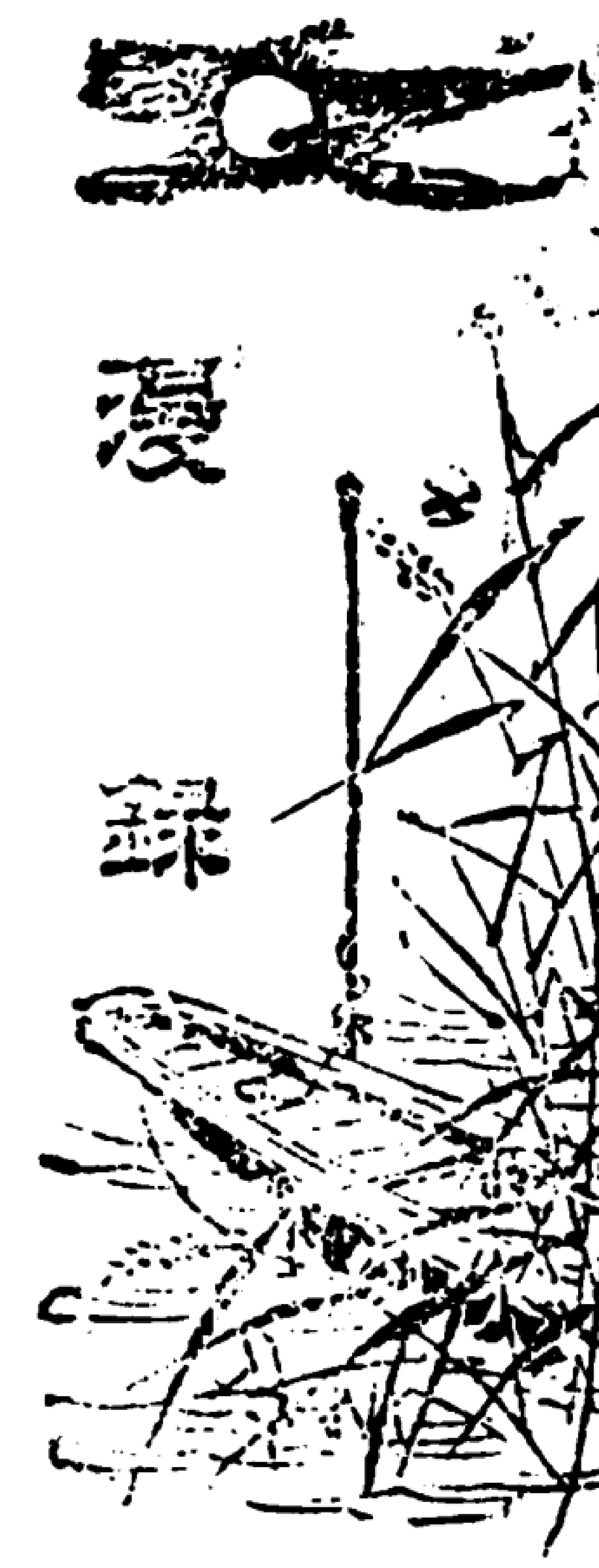
一、かなの一冊出來仕遣し候ふ。代五匁にて候ふ。いつにても遣はさるべく候ふ。此の中にも麁相有りて、追々に改め候ふ事なり。最前短のかなを見ねずといひしを、萬葉十五にみちかき命とある物を見れとしたる也。かゝる事にあやまち多き物に候ふ其の許にても御見當の事あらば、早々御申越成さるべく候ふ。魚彦も同門なれば、助けやられ候ふ御心にて吟味なさるべく候ふ。猶追々申進すべく候ふ。

一、舊冬御祝儀として金百疋御投。相替らず祝受致し候ふ。謹言。

正月廿七日　衛士

本居宣長様

尚々持病癪氣中にて、臥筆故かく亂筆也。御寛恕下さるべく候ふ。世間之俗事は一向許さず候へども、雅事も重り過ぎればさてさて苦敷候ふ也



主從心得草（前編續）

諏訪忠元寄贈

大學に曰、緡蠻たる黃鳥丘隅に止る、子の曰、止るに於て其止る所を知、人を以て鳥にだもしかざるべけんや。といへり。此心はめんばんは鳥のなく聲、黃鳥は此方の鶯のやうなものなり。其小鳥は、何の辨へもないものなれど、丘隅と、險阻なる離れ山に住て、人に取られぬ用心をする。其あぶなげのない所を見立て住む。況や人として、身分相應の所に止まざるは、鳥よりもおとりじや。と孔子も御評判遊ばされた。君としては仁に止まり、臣としては敬に

止まり、子としては孝に止まり、父としては慈にとゞまり、常の行ひは至善に止まるを止まる所を知るといふ。主は主の道、家來は家來のみちを守るべし。是安心の所、我身をいるゝの家なり。

右之事共能合點せざれど、人の恨を受て家を全ふする事かたし。是大ひなる損耻にあらずや。恐々愼々。

主人たる者さへ、我儘にする時は、かやうにあやまりの端ともなり、身心の自由を失ふ事もあるべし。況や家來の身として、愼まざる時は、其あやまりかぞへがたし、易にも、上に逆ふ時は災ひ拾ふが如し。とあり。おそろしきことなり。只主人に忠節を儘し、主命に背かぬやうにすべし。是主家を起し、我身を保つの根本なり。家來たるもの、急度心得べきの第一なり。正直に愼んで勤むべし。餘人の德となるにあらず。皆手前の福分となる、しらずんばあるべからず。此手前の福分となるといふ事をよく志れ。深く心得よ。歌に、

身持よくするは其身の德となる
人もほむれば親もよろこぶ

善取らば主人や親の恩をしれ
我一力で喰ふとおもふな（以下次號）

此の頃父のしめさるゝまに、空翠櫻主人故野村圓平先生の編まれし寫本三餘雜誌外篇廿の卷を繙きしに、加賀侯先代の夫人眞龍院君、初めて金澤城へ移らせられし時の道中の記事あり。聊、温古知新の資けにもとて、我社へ參らせぬ。同好の姉妹たちにも見せまほしうてなん。

金子みどり記

編者申す、文中誤謬脫字等ありて、解し難き所も尠からざれど、暫らく原文の儘を掲ぐ。

眞龍院君御道の記（鷹司公御息女加賀齊廣公御內室）

年頃越路に湯あみせむ事をおもへど、公けの御掟と

やらむあれど、とみにもゆるされまじと、空しく月日を送り侍るに、宰相の卿もみづからの心を汲みて、何くれと公にねぎ申させ賜ひけるに、天保九つの年彌生の末つかた、漸く暫の御暇を賜ふと仰事下り侍りぬ。いともかしこく畏りて、うれしさいふばかりもあらねど、流石に年月馴し東の空、立離れ行んと心細く、且は諸子諸君のしたしみ深く、いといたくしみやかにものし給ひぬるに、今更別れ侍らんもはいなく、又むまご達の生末も見まほしきと、雉子、清子のいとうしたひ留めたまふもいなみがたきものから、とやかくおもへど、梓の弓のうらなく年月籠しねぎ事なれど、心強くも引は返さじと、離面いひ放ちなどしつるに、いつしか春過ぎ、夏はたけ、秋來る風のそよ吹より、こなたかなたと行むかひ、名殘おもふまに、いとはや葉月四日といふになりぬ。けふぞ東の別をしまれて、とみに立出べくもあらず、休らひあへり。宰相の卿を初め、かた〳〵よりうち〳〵見立らるゝおもと人などつどへて、いと細やかなる賑ひうれしさに、いとゞ名殘もそひて言出づべき言の葉もあらねど、

越路にもいそぐとすれど東なる
　かなたこなたの名殘盡せぬ

けふしも秋の空晴渡り、風靜なるに、午の皷の聲に巣鴨の館を立出る。宰相の卿を初めとして、表立見立らるゝ使の人々あまたおもたゞしく、又所々思ひ〳〵に年月の名殘をしたひ來て見送る人も夥しく、かつうは旅立の粧ひ見る族は巷につどへり。

袖はへて旅立けふの賑はひも
　子の情ぞとおもふ嬉しさ

いと心つよく立出ぬれど、かへり見がちにて

住なれし東の空を跡に見て
　別れ行身の袖ぞ露けき

平尾の別莊晝のやすらひ賜り、爰にも宰相の卿をはじめ、送らるゝおもと人などつどひ、心々に見送る人とり〳〵賑はふ、餉たうべて郊園にとそゝのかされ立出ぬれど、何くれと跡の名殘のみおもはれて、たへなき眺にも心の移るとにはなけれど、

花紅葉なれし詠めを思ひ出の
　名殘ぞとまる宿の庭もせ

池の波松の木立も靜なる
　そのゝ眺めは如何わすれ舞

こゝより旅の粧ひもことそきて立出んとするに、相添ふも見送事もいとゞ名殘の盡せねど、

いつかまた逢見む事を契りつゝ
　越路の旅に思ひ立ぬる

未の皷過る頃立出で行まゝに、見送る人あまたつどへり。こゝかしこ見どころあれど顧りみがちにて戸田川の邊に到りぬ。此ごろの雨に水かさ増りぬといへど、波靜に見渡し、いと廣し。

聲〳〵に舟よそひして河つくや
　戸田の渡しにいさむ旅人

申の半のころ蕨の宿りに着ぬ。猶此所までも宰相の卿を始として、所〳〵の使などたうへていと賑へりかゝるにつけても、さらに都の方をおもひ出られて、

かくばかり人の情のかぎりにも
　猶たらちねの恵をぞおもふ

夜もふくれど、ねむし枕によりそひて、

袖の露乾しあへぬまにかり枕
　むすぶ夢路や武藏野の原

五日　空いと心ちよげに晴、後辰の皷遲しと立出で、

村つゞき秋の野遠く分行まゝに、浦和の驛に至りぬ。しばし休らひて猶たどり行に廣野に出れど、右のかたに芙蓉峯いとくまなく、

珍らしや冬もまたきに白雪の
　光りを見する富士の芝山

駿河なる高根は雪の名に晴て
　うつす綠の空ぞくまなき

ひくらぎ村を通るとて、

立ならぶ陰も綠のひひらぎに
　はげしく通ふ秋風の聲

わたちが原といふ所ときゝて、

音にきく陸奥ならで武藏野や
　わたちが原を通ふ遙けさ

大宮に晝の休らひしつゝ、上尾、桶川にしばしやすらひ、野原篠原幾村分行もいとつれ〲におもはれて、

旅衣分行末も夕日影
　さすや野原の秋ふかきころ

夕影になるまゝに、何くれと東のかたのみおもはれて、

別れこし東の空はそなたかと
　むかへしむすぶ袖のしら露

日も西に成りぬれど泊るべき宿さへ見わかねど、

夕日影かたぶくまゝに心のみ
　いそぐとすれど道ぞはるけき

ねぐら求る鳥の飛かふも心からとや哀におもひて、

たくひなや遠山まゆの色匂ふ
　入日の空にからすとふかげ

猶ゆくまゝに、左右曠原の眺め、是や武藏野ならんかと、たどり〲つ、暮近き程に鴻巣の宿りに着侍

りぬ。

六日、晴、卯の半の頃立出で、幾村里を過行に、左右の見渡しいはむかたなし、爰をなん吹上忍の邊りと聞て、

旅衣さらに東を志のぶなる
　名も吹上の野邊のあきかせ

勝龍寺に志ばし休らひて行程に、四方の眺めみごとなり、

うちむかふ足柄箱根峯つゞき
　中にことなるふじの芝やま

熊谷堤上吟

朝來風靜日晴時　堤山行々寄客思
回首數看連岑影　淸輝幽勝十分奇

淺間山をはるかに見て、

たちなびく烟にそれと志るき哉
　淺間の山のくゆるおもひは

古への見やはとかめぬ言の葉も
　猶思出のやまのおもかけ

熊谷の驛に晝の休ひして猶行まゝに、山野の見渡しいと類ひなきに、

むさし鐙なかめも秋の最中なる
　野山にかゝる言の葉ぞなき

なれ〳〵し東の君に見せむやと
　思ふもよしやけふの詠めを

利根川邊にて、

とね川や底ひも淸く澄渡る
　みどりに通ふ水の秋風

筑波山を跡に見て、

東より見なれし影の筑波山
　いつみか跡の名殘かすめる

かこ原にしばし休らひしつゝ、申の半過る頃深谷の驛に宿りせしむ。

七日　けふは道も遠ければとてまた夜をこめて立出る。旅の衣の朝濕り、たゝよふ霧のたえ〳〵霽渡るに、朝日輝き出たる詠め、えもいはれず、

尾上より麓をかけて遠近の
　山見え渡る朝あげのそら

くる毎に見渡す山の姿さへ
　かはる光に移るこゝろは

岡部村なん往昔忠澄住居の跡と人の語るを聞侍りて、

露をのみ岡部の原のいにしへの

本庄に暫し休らひて、横野の萩薄夜浪など打過るを見て、

露ながら靡く横野の萩薄
　真袖にかよふ色もむつまし

東路のかはやかぬまの杜若
　名にたふ色を見するひと花

神名川を打渡るに、是や武藏上野の境と、遠近の山端ことを四方に見て

　かむな河原を打渡りけり

落合新町に晝の休らひしつゝ立出づるに、烏川の渡しとて舟粧して賑ふ、

上野や名のみ流るゝ烏川
　ふなてしづかにわたるもろひと

倉ケ野に休らひ行程に、佐野に到りぬ。舟橋のかゝりたる石碣など殘りたるを見て、

古への佐野の舟橋中たえて
　それとばかりに殘る川水

高崎に休らひて城下を過るに河あり、

打渡る高崎川の橋柱
　なみも靜にかよふあきかせ

猶行まゝに山も近く見ゆれど、

はる／＼と野原篠原分過て
　山近くなるたひの衣手

こゝかしこ打詠めつゝ行程に、申の半に板鼻の宿りに着きぬ。

八日　空よく晴渡れり、辰の刻に立出、驛路を過れど、山のふもとなる河の流れいとすさまじ、橋をこゆるとて、

山高み名に流れたるふもと川
　わやうきながら渡る板ゞし

土の山を鷹巣山といふと聞侍りて、

松檜原緑かさねて名にしれふ
　たかの巣山の奥深き影

安中原市村など行に山田の稻いとよく色つき渡るを見て、

朝またき心もはれて打向ふ
　田つらの稻のゆたかなるかげ

八本木にしばし休らひて松井田に晝の休らひしつゝ

猶末はるかにわけ行は
　村つゝき森の梢も瀧波も
　ひとつにむかふけふの山道

たどり／＼幾山村を分ゆくまゝに、白雲山間近く見ゆ、

影高く空にそびへて山の名の
　白雲かゝるけふの詠めは

他にも似ぬ山の姿いとめでたし、夕つかた横川の關のこなたに休らひぬ。窓の外を見渡せど、白雲山の

岩根つたひ、瀧の落くるも珍らかなるもの、旅の心もすみて、

白雲の山の峯よりいく千筋
糸くり返し落る瀧なみ

關をこゆるとて、

駒もかち行人も袖はへて
易くぞ越る横川のせき

程もなく碓氷川にいたりて、

さしくたす筏やいつこ碓氷川
そのいにしへのことを問はまし

などれもひつゝけ、申の皷かぞふる頃、坂本の宿りに着侍りぬ。

（未完）

今鏡の異本

有住禮節教場にて
某　童　記

○今鏡の一枚とて、をしへ子のもて來れる一枚に、志るせる樣

[ムレバミ]もわらたまりぬれど、□治も□年となりぬ。□の御前には、御婚の御儀式、まちかうならせ給ひぬとて、御調度ども、夜を並め、日をつらねて、つくも所のたくみのてたれめして、さま〴〵に調へさせ給ふ御有様、耳眼をれどろかす、御入輿の御つぎ〳〵の御まうけのいかめしさぞ、かけてもいはんかたなう覺ゆる、□御献の御色目は、雑煮三献とかやうけたまはり侍りぬ。かゝる御前には、さ侍らぬをこそ、とれもひなさるゝは、かたよりたる心

ぐせにや侍らまし、［　　　　］れみのこのいへ〳〵にての、儀式にこそはもちゐにたれ、などれもひまつるに、むねや丶いたうなりて、くちをしき事かぎりなしや、こをけしうもれもひたらで、つくり侍らん者の、世にあるこそ、いと〳〵心得がたう侍れ［　　　　］

こは、續世繼といふ、今鏡にも、見えぬ事なり思ふに、正しき續世繼の御ふみの樣ならねど、正しからぬ今鏡の異本の、はしつかたの、やりのこれるなるべし。ひとひらのみなるがわかぬに、むしどみさへありて、なほよみもてゆくに、書のかきぶりも、つたなう見なさるゝは、いかなる人のすさびにやあらん、とてうちれくに、

をしへ子のいふやう、書の樣はとまれ、出來にし時代の事もよしわらぬやうに思ひたまはん、考はれきたびて、童がとひまつる事をしへてよといふに、こたへたりしことゞ、

此書の文中にはみえざれど、床の上には、「蓬萊の臺とて、只臺に、松竹梅、鶴龜、などのつくりものを眞中にたきなどせずして、蓬萊臺といひて、餅をこめたるもの、又は餅蓬萊とて、三方臺、四方臺、位高き方にて、わきて皇族には、四方などに鏡餅をもりて、若松を心葉にして、まなかにたき、左右に瓶子をみてならべ、鯉、鳥のみにへをそなへたるを、今の世には用ゐさせたまふべきなり。そなへまつりて祝詞まをし奉ることはいふまでもなき事にこそ、床の上には、二柱の神御祖をいはひまつりたれどなり、唐心にえみこり、西洋樣に順ひたる人の、床飾とて、床の上に、御贄も、瓶子もさゝげずて、島臺といふ物などかざりたるはわらぬ事とえるべし。さ

て、みにへ、みきの事は、御食料理人の手によりてつくる物ぞ。起居の方につきて、禮の事敎ふる者の手にてはならぬ事と志るべし。めし料理人の手ならでなす事あらぞ、御御心にうけたまはじとかしこまる丶なり。たとへ作り得たれぞとて、いつはり事のほかは、造り得らる丶物にあらずかし。

雑煮三献とは、近世武家にて、略式に用ゐたりし三献なり、正式には、式の三献とてあるなり。今世には、式三献を調ふる者、れほかたあらずなりて雑煮三献を、くらゐたかき大臣等よりいやしき商人までも用ゐなすこ丶とはなりたり。

用ゐなせるもの丶正しく造りたるは、をり〳〵に見るのみにて、旨を聞ねたる料理人の手にならざるいつはり事、翫弄物のみれほく世にひろごれるなり。正しき物は、君臣の別ちある、この國の食物料理る人の、聞ねある者の外は、調ふる事を得ざるなりと志るべし。

雑煮三献とは、

御献立

敷紙

御長熨斗　白木三方

初献

昆布　尺長御箸

熨斗鮑

勝栗　耳土器

二献

鳥燒　尺長御箸

御雑煮

五種燒　耳土器

三献

田作燒　尺長御箸

御吸物

梅干皿　耳土器

御土器　三方

御長柄銚子

御提

御肴

か丶る献立なるをいへり。こを上もなく造りて、御引替の御膳部に、三汁十一菜などそへとゝのへたらんには、今世にて三位以上の臣等の普通の饗應の時に用ゐ得らるゝ所なり。

宮樣の御前には、さ侍らぬと記せるは、まことにしかり、よくはしりたらねど、近き世までも、武家、即ち臣下の料理風を用ゐさせたまはざりしことはしるかり。されど、武家にての雜煮三献は、近き世までも正しき式には正しう用ゐさせたまはざりけむ、

こゝろみに御献色目を記して、見せまつらん。

蜀山人の一話一言に、

有馬中務大輔と申す男へ豊興宮縁談の義、本意に非ずと雖ども取組候、此段可相達候巳上

京極宮

關東公方へ

など見えたる、時の御献色目

打敷 松重五重

懸盤 蒔絵 面押赤地小紋綾　心葉 糸作松　總角 玉

第一

沈香　煎丁子

飯代白玉　箸二雙七一支 案洲上鶴羽上

爵金　煎丁子

第二

青玉　青玉

追物白玉
青玉　青玉
第　三
黄玉　黄玉
汁物煎丁子
黄玉　黄玉
酒盞
銚子　片口

右は寛保二年の色目にて、是は、有馬殿にて調進を御厨子所預にたのみて、調へしものなり。

こは異様の、三献なり、又近く天保十二年四月、中院家婚儀御臺三本の色目をも見ゐたり。其色目こそ宮様の御儀式に用ゐてうできなき、正しき三献ならめ。

宇仁　酢

第一　御飯　御箸 御匙　臺
海月　鹽
第二　干鮭 押鮎
第三　鯉 鯛
次御汁物蚫　居中盤
次御酒盞　居中盤
次御銚子盛酒片口
次御提　盛酒

又是の色目こそ、宮様の御儀式の色目と定むべかめれ、と思はるゝは、

天保十年三月廿八日、六條有容朝臣御婚儀御臺三本並三日夜餅

宇仁　酢

第一　御飯　御箸二双 御匙一支　居臺
海月　鹽

第二　干鱈　干鮭　蒲鉾　烏賊

第三　松子　干棗　赤粉餅　白粉餅

次御汁物鮎　居中盤

次御酒盞　居中盤

次御銚子　片口

三日夜餅　納筥

餅　銀御箸一双　木御箸一双　居鶴形臺

餅



これの、色目あるをぬきて、雑煮三献など、宮様の御前に出したらんは、まことにさ侍らぬことぞかし。

北の海路

石榑千亦

第五信

十一日伯の君に随ひ、道廰にものして、坂本委員副長及河田委員にあひ、新しく施すべき方針をつけ、さて小樽に救難所ひらくべきことなどかたらひて歸りぬ。河田委員は明日小樽にものして、何くれとつとめくれむ筈にて、宿にも來られ候。

四時發の滊車にて小樽にむかふ。こは一たび實地にわたりて後、何くれとことはかりしたる上にて、札幌に歸り、委員部と打合せむことにしつれむなり。

道々のけしき、海多くしていとおもしろく、五百重波千重波とかいふらむやうに、幾層も〲重なりてよする、其大きさ、いかにしても大洋たることを失はず候。まして、遠く烟霞の如く波の上に山を見る

けしきは、又殊さらに候。此間は室蘭札幌間よりもいたく開けて、耕地なぞさはに見わたされ、船もさはに候。全道みなかゝらましかどとおもはれ候。小樽は東にひらけたる港にして、なほ築港せむには、いとよき港となりぬべし。政府にて着手せむとずる目論見をきくに、なほ小に過ぐるにはあらぬかと思はれ候。さても其盛なることはいふ斗なく、市街をなせる家並、人道車道のわかちある道に沿ひて、電燈の設ある、全道比なきはさるものにて、地價は一坪百五十圓以上なりといふ。さては啻に全道のみならず、全國の一二に位するものかとおもはれ候。夜海岸に逍遙したるに、さすがに東方廣くひらけたることゝて、波のよする音はげしく、遠くくれわたりて、こき翠の色にすめる沙は、何やらむその底に一列にこもりゐて、おしよするが如く、いとのどやかに進みきて、岸邊ちかくなりて、其列の中に、わる一處さとかへるよと見れど、すらすらと全じくはぢきかへる、其時はじめて白き色を見せつゝ、幾段か平らかに、眞白なる照妙をさらせるが如く、さらさらと音して、又後よりおしよする列ちかき處までかへるかと見れど、又其列のかへるごと、幾度も幾度も全じやうに盡くる期なきに、かへる度毎に、しぶきはゝるか道の上までたぎちおよび候。ことにこよひは風にやわらむ、月はまとかに冴えわたりて、空には塵ばかりの雲もなく、右には遙かに振島岬みえて近きてたなには、立岩とかいふ大きなる岩のおもしろうけしきわるに、波のたぎち玉のくだくる、如く打かゝれる、左には高島の鼻また黑き波をつくりて、青き海原につきいでたる、その間三海里もあるべく、灣にはとまれる大船はのかに見えて、檣に

艀にかけたる火は、橋の欄干につけたるやうなる、あら海にむかへる處も、またかゝるのどけき地あるかとおもはるゝばかりに候。

北洲の西岸たゞこの港あるのみなれど、ゆく末なかく要なる地なるべくや。とく巾三海里も沖に、港をつきいでたらむには、いよ〳〵廣く豊かなる港となりて、かの倫敦とやらむの如く、方一尺の地價、幾萬圓にものぼるべき望なきにしもあらず候。かの鷲のこのわたりに翼をはばむと思ふも、宜なることにて、わが國人も一うちにうちおとすべき砲銃の用意、ゆめ〳〵怠るべからぬことかとおもはれ候。

北の海によせくる波の音あらし
　岸のまもりを怠るなゆめ
よる波の磯うつ音したかけれど
　見果てぬ夢の幾結びしつ

第六信

十二日朝　於小樽越中屋旅館

十二日河田委員は札幌より來り、金田郡長清水警部等を伴ひ、山田吉兵衛船樹忠郎渡邊兵四郎等の有志者も訪來て、救難所を設くべきことにつき、くさぐさとかたらふ。そは救難の區域を三にわかち、一は祝津、一は錢函、一は港内におき、各救助船をそなへ、救助夫をおく。祝津には燈臺あれど、見張には最完かるべし。されど其わたりの海は、波いとあらくして、そこにて災にあふ時は、遠く錢函の沖に、舟も人もながさるゝなり。そのおし流さるゝは、多く冬のことなれど、寒さにえ堪へず、船はとまれ角まれ、人は大かたこの世の人ならず、さいつ年も十一艘の船にて、三十七人の命は、うたかたと消えはてしとか申され候。かゝれど港内よりも、中々に祝

津に見張所をおき、そこにつとめて力を盡さねばならず、船の搆造も極めて心を用ゐずては、何の甲斐もなきことに候。

こゝにはドブリ、ホッチ、サンパ、ドフネ、川崎と、船のかたちくさ／＼あり。ドブリといふは、多くアイヌの用ゐるにて、丸木をくり舟となし、柄も取手もなき擢を、諸共に一つづゝ操り、たくみにおしやり、ホッチは三十五尺以下、サンパは三十五尺以上、ドブネは四十尺以上あり。其つくりは皆大かた同じやうに、平たき作にて、船底にはすべりも何もなし。荷物をはこび人をわたすには、多くこれ等を用ゐをり候。川崎といふは舳するどく尖りて、底にはすべりをうち、船脚あるが中に早しとか。こは内地のものとあまり異るふしも見えず、おもふに、内地殊に新潟わたりよりうつり來し漁夫の、わが里に用ゐたりし形を、その儘にうつせるものかとおもわれ候。いづれも櫂を用ゐ、時によりて、四挺ばかりの櫓をそふることもあるよしに候。これらの中にて、救助船にとるべき形は、何ぞといへば、先川崎をとるより外はなく候。そはほかのはあまり平たき故、波をたゝきて、進み難きに、こはよく波をくゞりて、進むことも得ればに候。されば形のみとりて、くさぐさに補はねばならぬは、論なきことに候。

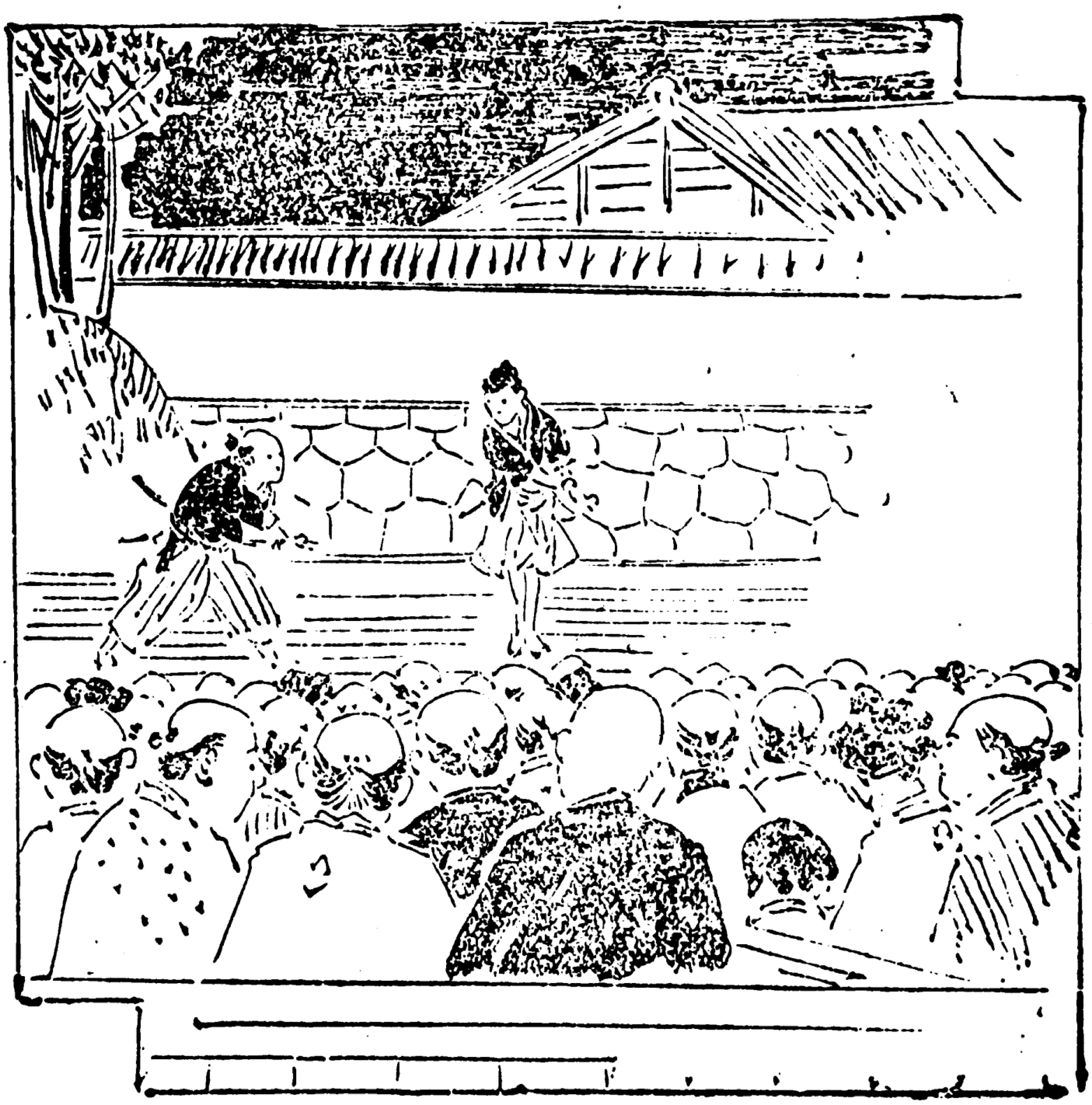
午後二時頃水上警察署の脇より小舟うけて、清水警部の導きにて、會長の君はじめ、祝津の地を見むと漕出つれど、波高く、風もそふべき空合なれば、遂に引かへし候。さて救難事務所を設くべき土地海岸のさまなど見めぐりて歸り、明日は陸よりものすべく契りおきつれば、その上にて、又委しうしらせまつるべく候。十二日夜、小樽にて。

才くらべ（十八）

蓬生屋女史

梅翁が奇才

西山宗園は、もと肥後の國加藤家の臣なり。初め連歌を昌琢に學んで大に宗鑑守民の風流をしたひたり。うまれつき奇才ありて、その道にすゝむ事衆人にこえけるが、寛永中主家事ありて國を去り、ひそかに雅道に心をよせ、一すぢに心を用ゐ、凡そあけくれ、目に入るほどのものは、大方みやびの道にうつし見しかた、遂にいみじき宗匠とたゝへられ宗園と號して都の北野に幽棲し、移りて難波の天満に卜居す、世に梅翁と稱し、齋を忘吾と呼び庵を向榮といひて、いみじく人にうたはれけるが、ある日、市村竹之丞座の芝居見物に行たり。折りふし芭蕉も居合せたりしが梅翁が門人何某



子はまさりけり竹之丞

と句を云ひて、上の五文字を置かね梅翁に窺ひけるに、をや〳〵〳〵とかぶらすべしと敎へける。後に蕉翁此事を弟子に示して、いたくその奇才を稱嘆しけるとなり。

蕉翁が才

芭蕉翁諸國を遊歷して、信州更科に至りけるに、折りしも八月十五日、空いとすみ亘りて、田毎に映ずる月影、今宵こそと思ひ、をばすて山にのぼり見んとせしに、雅人めきたる人々五人六人席をまうけ、宴をひらきて、月を賞しをりしに、蕉翁よき輩と思ひ語らひよりしに、御身はそも何處よりこされしぞ、我が輩たらんには一句を咏せずばとて、盃もさゝぬを、蕉翁さらばとてまづ三ヶ月のと咏み出でしに、みな時にわはずとていたく笑ふを、しばしとをしとゞめ、

三ヶ月の頃よりまちし今宵かな

とよみたりしに、ありし人々いたく感じ、耻ぢて、返句もでざりしとぞ。

笑話　（奇談一笑）

かゝみ

島村蟹

むかし、細川高國といふもの、城を攝州尼が崎に築きて、こゝに居る。麾下に島村貴久とて、武勇ならびなき梟將ありけり。高國敗るゝに及びて、貴久甲を環ながら身を海に投げ入れて、うせにき。これやがて蟹と化れり。故に介上人の面に似て、其の狀獰惡なり。其の種やう〳〵殖ゑひろがりて、今に至れり、人之を名づけて、島村蟹といふ。世俗この殼を門にかけて、厭勝とす。京都の婦女、人の額を蹙

むるを見ては、之を目して、島村蟹とするもとこれよりぞ起れりける。

大黒

れはかた世の禪院の厨房には、大黒天、多門天の像を安置て、香火を手向く。梵嫂の寺院にあること、これに似たり、今俗に、梵嫂を呼びて、大黒といへるは、義をこれにとれりとなむ。

まつの庵（四）

白魚女史

長月の長き夜をまちがてに思ひたる夜も、明けてはあやしう短かく思はれ、何とはなく傍らゆゝしう、去らまほしう思ひたる人も、今はときぬ〴〵になりては、何となう心細う、戀しとも、なつかしともかきわかぬ思ひに、たゞ何となうひかれて、駒の行手を見送れど、そゞろうらがなしうさへなり、さはかとて、立ちかへられては、また身もわなゝくばかりのはづかしさ、よらるゝもゆゝしう、歸らるゝももをしう、げにわりなきものは少女心にこそ。此處此の家は此の郡の大領宮道のいやますとなん云ふものゝ家にて、ありし少女は松が枝とぞ呼びける。

松が枝、まつの心ともなけれど、君がさられてより、あやしう面影にのみたちて、手束の弓のつかのまも忘られず、知らぬ駒のいなゝく音にも、それかと耳留れど、轡虫の鳴き止むにも、とむねわなゝき、わなゝきして、現ならず、夢ならず、あやしき思ひにあかしくらして、昨日とすぎ、今日とくれ、明日も早く流れて、今年もくれ、明春もたち去り、夏もすぎ、早も秋、稻葉の風は去年におくれずおとづれど、人はそよとのおとづれもなく、八月も去り、長



月もくれ、神無月、木の葉も草も枯れはてゝ、雪のみ深う、年をもつみ、やがてまたあらたまの春、岩間の氷りも音たて、鶯も軒に近うきやぞりて、ひと〳〵となけぞも、少女が庭にはおともなく、人めも見ねず、夏も去り、秋はまためぐり來りぬ。數ふれぞ早や三年、年月をへだつるまゝに、少女の身にそひし面影は、去りもやらで、ありしよりいやまさり、まつともなく、またぬともなき思ひは、いつしかまつの心一つになり行き、常盤かきはにしぞり行きて堪へがたく、さては人の必ず忘れぞと仰せられし折りふし、聲たゝで、はか〴〵しう聞ねざりし答へ、人には聞ねで、妾、まつと知るしめさで、かういたづらに過ごし給ふにや、井筒にかけし御言葉にも、丈けのびなぞとも答へ心付かざりしかぞ、我が髮のかたすぎるをも思ひ出で、給はぬにや、よしればばし出で給ふとも、まつの心深きを知り給はぬにや、さらぞ如何にせん、如何にせまし、今の心のあらまさぞ、おしはしたならはせざりしものを、くやしさやと返らぬ思ひにかきくれて、ながむる庭の面に、萩の花づまつゆ重くうち臥しぬるもあはれに身にしみ、そのまゝ庭に下りたち、何をさは思ひ臥すぞ、汝れには男鹿も夜半毎に訪ふを、とかき起せた、はら〳〵と何にかこぼす露、一入に身にしみ亘りて、松が枝はそゝろ身のおき所もなき心地、やう〳〵椽にはひ上りて、すゑたる眞弓の下によりそひ、心もてもるとの給ひし君が御言葉いつはりなくぞ、ひかぬ心を見せ給へ、のう君、君よとぞかり泣きまぞふ折りふし、母親、うしろにたゝずみて、こは我子、何をさはなく、ありてし人は其後おとづれもせず、またちかひしと云ふにもあらねぞ、さやうのゆづるは

うち捨てゝ、幸このごろ、都のよき人、すまゝく思ふありと聞けど、そをむこにはとらん、如何思ふと母の尋ねに、女はおどろき、涙をぬぐひけるが、袖のしがらみ、せけどいよ〳〵涙のたきまさりて聲さへ立つるに、萩の露の思ひ出でられて、

何をさは思ひ臥すぞと起す手に
　　いとゞ露けく庭のいとはぎ

母様、何とはなしの涙も、問はれていよ〳〵露こぼれ侍りてと、まぎらはす心もはづかしきに、母もはゝ笑みて、そは、さる事もありや知らねど、もうさやうに誠なき眞弓、よき程に思ひたちて、誠信ある人をすませては如何に、如何にぞやと子を思ふ心に引かれてや、母の言の葉に、娘はたゞむせびかへりて答へはなく、僅に首をうちふりぬるに、若き心、何事を身にしめしゝぞとむかり云ひすてゝ、強ひてもすゝめず、そのまゝ去りたるあと、娘は眞弓のもとによゝとばかりなきて生体なかりしが、君により思ひならひし我が心、誰にひかれん、ひかるべき、手束のるつの絶るとも、妾は思ひたゝじ、母様のかくの御意も、妾が不束の涙、ひとり過ぐるとかこつとのみ思ばしての迷ひ言も妾が愚痴より、御前にかゝる事をきかしまゐらしたるけがらはしさよ、注ぎ給へと云ひつゝ、涙を拂ひ、床のちりうち拂ひて、眞弓正しく置きかふるもあはれなり。



文林



春雨　　　　徳大寺實則

草をつみ花をたつぬるひまもなく
きのふもけふも春さめのふる

海邊春月　　　　高崎正風

面しろきこゝろのはてもなかり鳧
おほろ月夜にはまつたひして

雨中雉　　　　松浦詮

春雨にさくらかつちるやまはたの
むきふかくれにきゝす鳴なり

暮山春雨　　　　長岡護美

花のさくときちかしとや夕くれの
やまへのとかに雨かすむらん

海邊霞　　　　池田政禮

帆をわけて入來る船もはまゝつも
ひとつにかすむ春のゆふくれ

待春　　　　諏訪忠元

あたらしきとしはたてとも花鳥の
たのしき春そなはまたれける

庭上松　　　　宮地嚴夫

うれしくも庭の小まつは生ひ立て
仰きみるまてなりにけるかな

山家梅　　　　北郷久政

麥生みなかすみわたりて山さとの
かきねはるかに梅の香そする

小野篁　　　　植松有經

わたの原沖のあたなみをまさりて

今はとかへるあまのつりふね

在原業平　内藤存守

山のはもにけよとまてに玄たひ劔
よをてらすへき月のひかりを

月前歸雁　大口鯛二

行かりのこゑそまちかく聞ゆなる
のきはをくらきれはろ月夜に

名所初雪　井上頼文

仰き見ぬ人こそなけれひさかたの
くもの上野のゆきのはつはな

雛祭　大畑弘國

桃の實をむすふ末ころたのしけれ
ひゝな遊びを見るにつけても

中宮彰子　佐々豊水

黒髪のなかくゆふ日のひめかゝみ
千代もくもらてかゝやきに鳬

孝女ぎん　仝

はらからが心つくしゝはゝそ葉は
かげむくさかに年をへにけり

岡稚子　三輪義方

をかのべのすゝなの畠も昨日今日
花みねそめてききすなくなり

古市にやどりて　三浦千春

はまそぎは遠き山田のたひまくら
をみなへしをや折りふせて寝む

谷靜總聞山鳥語　藤井行麿

やま行けはそれかあらぬか呼子鳥
こたまとなりて谷にきこゆる

早春海　草野隆道

高千穂のたかねかすみてにしの海

はるのかけこそ浮ひそめけれ

立春霞　足立正枝

うら／＼とかすむを見れは久方の
おほそらよりや春はたつらむ

松上鶴　木庭芳香

よろつよのみとり重ねし松の上に
殘れるゆきはつるのはごろも

新年鶯　伊東祐賢

言たまのさちはふ國のしらべかな
はつひのかけに歌ふうくひす

朝霞　伊藤純三

たかねより霞のころもかけそめて
はるをよそほふあしからの山

霞中雲雀　近衞貞子

うら／＼とかすみこめたる大空に
何をたよりてあかるひはりそ

橋邊柳　鍋島榮子

行ひとの目にも袖にもかゝりけり
はしのたもとの青やきのいと

春月　前田朗子

おのつから空も長閑にかすみけり
花さくころのはるの夜のつき

和氣滿曆　柳原愛子

君なくはみもすそ川のきよきせの
なかれもつひに濁りはてまし

窓前梅　西四辻茂子

日あたりのみなみの窓のうめの花
やへも一重もみなさきにけり

鏡　諏訪晴子

よしあしのまことをうつす鏡こそ

人のこゝろのたからなりけれ

踐若草　保科節子

むら消の雪まもこめてにほの面の
ところどころに青むわかくさ

夕春雨　岩崎寧子

さくら狩わすとちきりし夕へより
あやにくにふる春のあめかな

春雨夜靜　坂田泰子

軒ちかき花のしつくのそれならて
ほかに音せぬよはのはるさめ

霞める空を雁かへる　原田蒼生子

今はとて雁はくもゐをかへるらん
かすみのうちに聲のきこゆる

早春柳　河村重子

ふく風はまた寒けれと日はるきぬと
柳のいとそゆらきそめたる

待　安東きく子

花をまつこゝろはやがて春の日を
ながしと思ふはしめなりけり

閑居柳　海上壽子

世にうとき我がやどなからさし柳
さすかに見ゆる春のいろかな

河内記行

在大阪　酒井啓雄

梓弓春たちかへり、うらゝかに晴わたりてのどかなる日は、たれこめてのみはあられずなりぬ。されど、梅見るにはいまだはやし、住吉まうでより堺の大濱あたりにあそぶは、人めれはかれぞうるさし、過し日は、湊川、及び四條畷の神社に詣でたれど、こたびは楠公の生れ給ひし赤坂のやしきあとより、千早

金剛山の嶮に據りて數萬のあだどもをうちなやませたるむかしのあとをとはゞやと、河内行を思ひたちぬるは二月の六日の日になんありける。

　たれこめてあられぬ春になりにけり
　　四方の山々かすみわたりて

京橋の停車場より例の汽車にのりてはしる、玉造、眞田山、桃山を右に見て天王寺に至り、奈良行の線路にのり替ふ、住吉郡平野までは津の國にて、八尾驛は河内國若江郡也、志紀郡柏原にて車よりおれり、柏原の驛を西より東にゆき、大和川の橋をわたる。河陽鐵道の工事もやゝ調ひ、鐵橋の築造さかんにて、人夫おほく集ひたり。橋上より川づらを望むけしきいとをかし、

　うらうらとかすみながるゝ大和川
　　水上よりや春きたるらし

川の南を北條村といふ。大山咋の社に楠の一株より七もと八もとの大木おひ立るはめづらし。すこしゆけば右の方に　允恭天皇の陵あり、陵上の松は青々とたち榮え、周圍の堀ふかく、水清らか也。是を惠我長野北原陵といふ又四五町西へゆけば　應神天皇の陵あり御陵の北てに鳥居、及び石の瑞垣をこたび新築せられたり。高札に　應神天皇惠我藻伏山岡陵兆域周圍千八百八十七間。とあり。老松繁茂して廣大なる山陵なり。和泉の　仁徳天皇の大仙陵と並びての大陵也。この西に藤井寺見ゆる。堺へ三里といふ。又東の方へ三町ほど隔て　應神天皇皇后仲姫命陵あり。周圍五百七十九間也。仲津山の陵ともいふ。なほ三四町ゆき、道明寺觀音あり、詣つる人おほし。道明寺糒は名産也。譽田村の譽田八幡宮は大社にて壯麗也。　應神天皇

の陵の南に接けり。さて御陵を南てより拜む所は、古くより鳥居も瑞垣もありたるを廢して、今度さらに御陵の北に別に鳥居を新築せしをれもふに、大學教授粟田寛翁の八幡考にも、八幡宮といふは　應神天皇を祭りたるにあらずといふ說あれど、またく御陵と社を別になしたるものなるべし。古市村に白鳥の陵あり。日本健尊三陵のその一也。壺井村の壺井八幡宮は小社也。石壇の下に大いなる井あり。是を壺井といふ。通法寺村に源の賴信、賴義、義家の墳墓あり。いたくあれはてゝ、通法寺も廢寺となりたり。

この水の末くむ人はれはかれと
　　などみなもとをわらしたるらん

なほゆきゆけど石川郡東山といふ、この近くに用明天皇　推古天皇　孝德天皇　敏達天皇の陵ありといへど、道をいそげど拜みまつらず。大が塚村を過ぎ、水分村に至る。この邊すべて山川の水多きを、堤防を築き、溜池を是方彼方に造り、陸田を水田となす、用意とゝのひたり。河内麥は名產也。又密柑、桃多く、培養もよし。山根よりは炭を出す。こゝにて農夫に金剛山の道をとふに、二里餘あれど今よりのぼれど峯にある坊にとまるなれど、雪まだきえず、いと寒けれど、この下ての森尾村に旅舘あれど、一泊して明朝はやくのぼり給へとねんごろに案內せられたれど、やがて森尾にゆきて見るに、步兵第八聯隊の第二大隊、金剛葛城に狩して、猪鹿數頭を獲て、水分森尾の二村に宿陣なしたれど、家每に兵士のやどゝなり。わがやどるべき家のなきに困じはてたり。やうく森建三郎なるものゝ一室をかりてやどゝす、山川軒どを流れていとそ

かしき家居也。

御軍どおひやどりして山里に
うしろやすくもねつるよはかれ
耳あらふこゝちこそすれ
山川のさやけきおとを枕にはして

つぎの日も心地よく空晴たり。四五町南さまにゆけど、赤坂村也。楠公の生れ給ひしやしきおとは高き所にて、眺望よく、二十間四方石垣にてその中どに楠公誕生地と志るしたる大石建てあり。その片はらにある百日紅の大木は、この公とともに生たちたらんとおぼゆるほどの古木也。この邊すべて山間の僻地にて、里人みな正直也。今もかくの如くなれば、むかしの人々何さら質樸にてありしならん。楠公は君に仕へて忠勇なるはいふまでもなけれど、かゝる所に生たち給ひたれど、正直律義の人なりしもうべなり。而して、尊氏師直等は鎌倉生立の狡猾ものにて、今の歐米人の如くわがまゝのふるまひみにありしならん。やゝのぼりて二河原邊村に至る。絶頂まで七十二町といふ。この村に炭竈あり。是より人家たえてなく、樵夫と狩人をまれに見るのみにて、山にのぼる人はなし。なほゆけどいよ〳〵高きに至り、西に攝津和泉の村落を見おろし、南に紀路の山々を望み、ゑもいはれれぬけしき也。一里あまりのぼりたるあたりより雪ありて、ます〳〵のぼれどます〳〵雪ふかく、つひに脛をうづむに至れり、のぼる人なければ雪にあとなく、道をたがへしならんとおもふに、是より山上へ何町といふ道志るべの石あれど心つよし、いたくつかれたれど志どしいこひてあるに、砲たと近くひゞきわたれるに、まもなく兵士の勢子に出たる狩人の下ざまにはしりゆき、又一發うちな

らせり。しかするうちに、小笹おしわけのぼる、くるはかの狩人にやとおもひしに、大鹿一頭ま近く顯れたり。おのれ小銃もたらば、一發に射とむるなるべし。この鹿谷ぞこへはしりゆくを、狩人おひ矢に打はなちたれど、又も射損じたり。

角しろく五つのいろにあらねども
　命毛おはきかせぎなるらん

河内大和の界はこの邊にて、社のある所は大和の國なり。すべてこの山は杉檜多く、よく立のび、切りたるあとのうゑつぎもとゞきて見ゆ、大かた杉と檜を交せて植る也。のぼりはてゝは大木立こみて晝もをぐらく、雪はいよ〳〵深し、御社に至ればあなかして鳥居も社も皆倒れてあり。かゝるありさまにては、詣でくる人のなきもことわり也。いづこに神はましますならんとなげきたり。

喘ぎ〳〵のぼりて見れど宮柱
　たふれてあるに涙こぼれぬ

宮柱たふれてだにもこの山に
　一言ぬしの神はまします

一町ほど下りたる所にかたばかりのかり宮あり。そのかたはらにふせやたてゝ神職葛城兵純ぬしの夫婦すまひしてあるをとふに、雪深きによくのぼられたりとて焚火してくれたれど、あたゝまりよみがへりたる心地せり。なにくれと物語りするに、五年以前御社は倒れて詣づる人もまれになりぬ。さて、この山は、もと〳〵葛城山にて　雄畧天皇の猪獵せられて、一言主の神にあはせられしもこの峯なり。しかるを、佛法盛りなる世となり、金剛菩薩をいつき、山を金剛山と名づけしも、僧侶のなしたるわざ也。その時今の葛城山に名をのこせし也。又明治の御代と

なり、寺を廢して葛木神社をたてられたるなりといふ。れのれが歌のかへしを眞純ぬしのよめる

あはれとも見る人のなき宮柱
君が涙にあらふうれしさ

葛城氏は神孫なりといへど絶えし。是より千早の城あとをたづね、寺元村の觀心寺にゆき　後村上天皇の陵を拜みまつらんとれもふに、眞純ぬし曰く、千早も、觀心寺も、雪深く道わるけれど今少し暖かなる日を待ちて再びとひ給ふべし、今日は大和へ出で滊車にのり、ひとまづ歸坂し給ふべしといはれたれど、大和へ下りて歸ることゝなしぬ。すこしゆけど、雄略天皇遊獵の地と志るしたる碑あり。一里ばかり下る間だは雪ふかゝりき。眺望はたぐひなく、大和一國を一目に見わたし、右のかたに見ゆる吉野の御嶽はすぐれて高く、雪なほ白し、帶にせる吉野川六田の淀も見ゆ、眞向ひは芦原峠多武の峯の山々なり。左りの方に、畝火、耳梨、香山の三山いと近く見ゆ田園に溜池の多きを望めど、鏡をちらしたるやう也。なほくだりゆくに、一村あり、高天といふ。葛城郡にて農家五六十あり。平地の村里よりは一里余も高き所にて、水清く家豐かに、實に天地の別世界なり。高天彦の社あり。嘗て、高天の原は天上にはあらで大和にある也ときゝたりしが、則ちこの村也。天の香山も二里ばかりの所なれど、香山の金をとりて日矛を造るといふもあたれり。すべて神代の天上のことゝいふは、大和にてのことなり。皇孫命の天降りませるといふは、大和より日向に行幸まし〱しなり。志かして、神武天皇は故國を慕ひまつられて、再び大和へ還幸まし〱、橿原に都し給ひしなりといふは、さもあるべきことなりかし。

葛城の神のしるべもしるくして
　　高天の原をけふ見つるかな

御所驛にゆき、五條より來たる滊車を待ちてのりたるは五時にて、高田にて櫻井より來たるに乗替へ、王子にて奈良より來たるを待ち家にかへりしは八時すぎなりき。

雜錄



●晃親王殿下　山階宮晃親王殿下は、本年八十三歳の御高齢にわたらせられ、平素御健かにおはしまし丶が、近き頃、御風氣の心地にて御床につかせ給ひしより御容体日に惡しく遂に厚きみもりも其甲斐なくて、畏くも、さる二月十七日午前四時四十一分といふに、京都の御宮にかくりましぬ。あな哀しきかも。宮は、故一品伏見宮貞敬親王の第八子におはして、文化十三年二月二日御生誕志津宮と稱へ奉る。文政六年親王宣下、御名は濟深と申し奉る。仝七年落飾し給ひしが、文久四年御還俗あらせられ、山階宮と稱へられ、孝明天皇の御猶子とならせ給ふ。維新の後勳一等より大勳位に叙せられ給ひ、爾來京都におはしまし丶なり。天皇　皇后　兩陛下、並に皇太子殿下よりは祭粢料を賜はり。尙、御尉問使をさしつかはせられたり。御墓所は、京都市下京區今熊野町字泉山雲龍院の境内にして、御葬儀はさる二十六日に行はせられたり。

●歌御會　二月五日　御兼題詠進は左の如し。

立入宗継

大宮のみかはゝにこりはてなまし
　きよすの水を君かひかすは　　正　風

よもしはしやすのわたりさなりにけり
　君かまことをみなもとにして　　建　通

雲井ふくかせのおたひになりぬるも
　たてりしはろのしるしならすや　　豐　穎

よもきふのみたれたるよにすくなるを
　君さりいてゝすゝめあけゝん　　利　嗣

君かためふかくはかりしまこゝろは
　あつたの神もまもりましけん　　承　昭

たてぬきにみたれたるよををさめつる
　おたのいさをは君そたすけし　　詮

まこゝろのつひにさほりてあれはてし
　みかきもゝとにかへりけるかな　　光　尊

よのなかにたつあらなみをしつめつゝ
　きみかみことをつたへけんかも　　通　菩

こゝのへにつくすこゝろのあらはれて
　いさをたてりのなこそかたけれ　　光　昭

ひさをねてみよのみたれをゝさめしは
　やかても君かいさをなりけり　　利　亞

君かためこゝろつくしのいさをさへ
　あふみよりこそなはたちにけれ　　忠　敬

雲きりのみたるゝ中にたち入て
　あさ日のひかりほのめかしけり　　濟

こゝのへのあれたるさまをなけきつゝ
　たてしいさをそよにたくひなき　　通　治

まこゝろをつくしつくしてみことのり
　つたへしことのよにたくひなき　　雅　之

つくしつるそのまこゝろはすへらきの
　大みいつをもかゝやかしけり　　長　延

ますらをかいはらからたちはらふへき
　みちしるへせしいさをたかしも　　治　光

みたれたるよにたち入て君かため
　たてしいさをのたかくもあるかな　　實　師

おさろへしみよをむかしにかへしつる
　君かいさをのたかくもあるかな　　隆　元

みことのり君傳へすは天のした
　おほへる雲のいつかきゆへき　　愛　子

大みことをいたゝきもちてこゝろさし
　あつたのみやによをいのりけん　　任　子

くにのためつくしゝ君かまこゝろは
　あつたのみやの神そしるらん　　文　子

なみならぬこゝろをこめて大君の
　おものゝはまにみをつくしけん　　眞　子

むらすゝきみたれたるよに君ひさり
　おたのはつほをみいでつるかな　　敦　子

よをなけく君かなみたはさそはれて
　きよすのなみもうちいてにけん　　道　子

いすゝかはきよきなかれやかれなまし
　　おたのし水をきみかひかすは　以登子

まこゝろをやまさにしきにつゝみても
　　よにかくしはくなこそかくれれ　伊佐越

あやふかるみちにたち入てゆきかひし
　　こゝろつかひをたれかおもはぬ　眞頼

あふみなるたてりのささのなもたかく
　　君かいさをにあらはれにけり　殿夫

よをなけく君かなみたのつゆうけて
　　おたのさなへもひいてそめけん　正臣

千代かけてみちこそてらせあつたの宮
　　やみにかゝけしみつのさもし火　秋香

しこくさのしけれるみよに君ひさり
　　たてしいさをやよにかなりけん　長育

ふなをかのたかきいさをもひさすちの
　　君かつなてによりてなりけり　桑

君なくはいかてかたゝんふなをかの
　　たけしいさをのかみのいさをも　有經

あれはてしみかきをもさにかへしゝも
　　たてりしまつのみさをなりけり　綱二

君なくはたれか鑑ゐにきこゆあけん
　　さほききよすのあしたつのこゑ　正夫

きみかさるまかちによりてつみあけし
　　いさをもたかしふなをかの山　胤明

あふみなるやすのに生しなさこへし
　　露ゐまてこそうちかなりけれ　英一

まこさをもつみしみくらの大みけの
　　たかきや君かいさをならまし　久子

●立入宗繼朝臣の建碑　朝臣は近江國野州郡立入村の人、永祿元龜の年間宮闕頽廢御料供せず、即位の大禮行はれざること年あり。宗繼私財を以て供御を補給し、一方には公卿の間に斡旋して綸旨を織田信長に下し賜ひ、以て王室を再造せしむ。亂世に居て能く臣分を忘れざるものなり。其身從五位下左京亮を以て元和八年九月二十六日卒す、年九十五、文政六年二月其忠節を表旌して從四位下を贈らる、明治二十四年特旨を以て金五百圓を裔孫操女に賜ふ。然るに今日に至り、全家流離落魄、後人の其墳墓を顧るものなきを遺憾とし、勸修寺伯爵宇田從四位谷正五位河田從五位津田正四位等發起し、旌忠碑建

設の擧あり。官内省にては幾分の御補助ある筈なりと云ふ。

●谷中將の談片　谷干城子は、此の程東京を發して、故郷高知の草廬にかへられしが、其のをり、神戸にて、某新聞社員にかたられたる談に左の一片あり。當れる言なり。

大阪に女子大學校を設立するとて予にも勸めて來たが予は反對說を述べて賛成せなかつた未だ運ぞぬと見ねるな大阪に女子大學校を置くは土地に適せぬ夫のみか日本で大學者の女が出來ても用ひ所がない幾年向ふでも容易に必要は認められまい、女子は幾ら大學士に爲つたとて詰り家政を遣らねばならぬは我日本の習俗であるから中等教育で澤山である今の女子中高等小學校を卒業して居るさへ少いでないか女子は庭訓を基として教育せねばならぬ。

●婦人手藝共進會　嘗ても記しゝ京都博覽協會の催に係る全國婦人手藝共進會は、來る四月十一日より御苑內博覽協會內に開設する由にて、既に其製品募集に着手し、先づ全國各高等女學校、其他女子教育をなしつゝある各學校家塾に宛てゝ出品を奬勵せんことゝし、是等各學校生徒の出品物を基礎とし、尙其他一般婦女子の工藝品、若くは自家職業製品等をも陳列せん筈なり。右に就き、京都府高等女學校にては、來る四月八日同窓會、即ち鴨汀會を催し、同校の卒業生、及生徒の手藝品を集めて出品せん見込なりと。

●孝子善吉への惠　さきに本誌第百五十號雜報欄內にかゝげし孝子善吉のかなしきさまをあはれみて、大和國、山邊郡、丹波市町、字三島に住める、本誌愛讀者、中山まち子より左の書面に添へて、金二

圓を惠まる。いと奇特なることなり。

前略さてすぐる五日御發刊の女鑑雜報欄內を拜見仕候處淺草區元鳥越町三番地根岸善吉氏とて憐なる孝子の有し赴よみをはりてはなみだの外無之候去れど聊かには御座れ共彼の孝子に惠贈致たくとぞんじ候へども直接にれくりて萬一間違等有之ては遺憾の事に候故甚だ御厄介恐入候へども別紙爲替面之通り金貳圓御送り申上候間何卒彼の善吉之許へ御屆け相成候樣幾重にも御ねがひ申上候頓首

二月廿日　中山まち

されど、記者自ら、暇をむすみて、この二品を携へて、かの元鳥越町なる善吉がもとにいきてつぶさに、このよしを語りて、之を與へしに、病父助三郎は重き枕をもたげて、應答をもしねで、たゞ感淚にむせぶばかりなり。（さきに六十一歲と記しゝは、聞きあやまりにて、當年六十三歲になれるよしなり。）兄の倉吉も傍に居て、たゞこれをありがたがり、ひれ伏して淚を拭ふより外なし。記者もおぼえず淚をうかべぬ。やゝありて、助三郎、かゝるありがたく忝なきこともありけるよ。これも一重に善吉が、心がけにこそよりつるなれ。よびよせて、喜ばせ、且は御禮の一言をだにもといふを、倉吉も實にとて、けふ善吉が、近き邊にやとはれて居たるを、よび來たり。見れど、むく〳〵と太りて、たくましげなる童なり。これもしきりに忝じけながり居り、家はもとよりよくもあらねども、しきたる疊の新しきがふさはねば、いぶかりて問ふに、助三郎淚を拂ひて、おのれ老いはゝけたる上に、病にかゝり、杖ともたのむこの長男の倉吉も不幸にして、去年の九月の頃より腸チブスにかゝり、ほど遠き避病院に送られて、今日明日の命もおぼつかなく、あとには、たゞこの幼き善吉ばかりなれど、如何ともせんすべもなく、途方にくれたりしが、近所合壁みなよく心にかけたまひ、殊に家主の栗山新次郎は情ぶかき人にて、朝夕

のものより或時は衣るきものまでも惠まれ、この疊もそれが惠に新しくしたまへるなり。といふ。差配家主などいへど、多くは利をのみ心とすめれど、かゝるものをも追ひ立もすべきに、さりとは感ずべき人よ。さて、この孝子のありこしさまなど。近隣の人の物語るを聞くに、さきに倉吉が流行病にかゝりて、避病院にありしほども、善吉は毎日夜一時頃に雇はれ先より歸り來りて後鎭守の明神の社に詣でゝ父と兄との病の速く全愈せんことを祈り夫より又道の程もいと遠き避病院にいきては、兄の病床を見舞ひて、之をなぐさめなどするさま、誰とても感ぜざるはなかりしとぞ。兄の倉吉は今はやう〳〵快方に向ひ、父を看護しながら、筆の軸を造るを手内職とせり。見れど、實に頭の髮も大方はぬけ落ち顏の色靑ざめて見るかげもなし。なにくれときゝふけりて、いよ〳〵感に堪へず。記者もゆたかならぬ嚢底をたゝき、金子若干を惠みて、今はとて立ち歸りぬ。

◎貞婦賞を受く　德義地を掃ひ、人情紙より薄く、世はなべて澆季なるに、玆に最とも目出度き貞婦の現はれたるこそ喜びしけれ。今左に、賞狀の全文を掲げて其德を頌す。

山形縣西村山郡大谷村白田勝藏妻
渡邊はる

舅姑枕を並べ病蓐に在るや寢食を忘れて看護し且つ夫を扶けて家業を勵げみ貧困の間克く生計を支持し孝貞の道を盡くすこと玆に十有一年洵に奇特とす仍て其賞として金貮圓下賜候事

明治三十一年二月二十三日

山形縣知事正六位勳六等　押川則吉

◎孝貞　駿河國沼津在楊原村上香貫吉田の牛馬

宿、岩崎爲藏の子爲次郎の妻とき女は、夙に孝貞を以て一鄕にきこえしものなるが、さきごろより父爲藏病に罹れるを痛く憂たみ、未だ十九の年盛り、麗しき衣着飾りて、人中にざれあるきたきころなるに、衣服調度一切を賣しろして費用に充て、さて、父を入院せしめたりと。

●孝女　巖手縣に林崎某の長女あさといふ孝女あり。老母永の煩にてゐたゝざるを看護して晝夜を分たず、貧困の中にあれども、甞て母に不自由の思ひをかけず、まめ〳〵しく仕へて孝養いたらざるなし。伺、子供三人あるを、世話行きとゞきてぬかるくまもなし。近隣のものその孝行を賞しあへりといふ。

●又　孝女あり。備中の國、橫畑某の娘きくとて、ことしは、まだ十歳にも滿たざるばかりなるに、父の病氣全快を祈るため、寒中每朝水垢離を取り、二里餘ある道を徒跣參すと。至孝なるかな、此の子や。

●めでたし　遠州濱名郡、櫛村德增といへる人は、子十一人をもてるが、皆壯健にて、孫もあまたあり。產土神の御祭には、子、孫、曾孫七十六人うちそろひて宮參りするといふ。めでたし〳〵。

●奇特　山梨縣甲府市に住める細田いまといふは、ことし六十三歳にして、諸方の洗濯等をして僅に渡世となしけるが、いさゝかづゝの餘裕もあるを、親戚緣者もなき身にて貯金するも何かせんとて。此の程赤十字社に入社の手續をなしたりと。此も亦報國の一端なり。

●師弟の情　かくあらざるべからず。こゝに千葉縣香取郡津の宮村小學校の訓導水越某、眼病に罹りて事を執る能はざるを、生徒等氣の毒に思ひ、金

百餘圓をあつめて、師を帝國大學病院に入院せしめたりといふ。水越氏は、全校に二十年來勤續せる人なり。

●美擧　こも亦感賞に堪へず。鳥取縣花美尋常小學校生徒某の火災にかゝりしを愍み、同學生徒等應分の醵金をなして之に贈りたりと。近頃此等の美擧頗る多し、小學教育の好しきを得たるものか、嬉しきことの限りなり。何全國みな此の風をのぞみて、いよ〳〵我國固有の美德をかゞやかさんことこそのぞましけれ。さるにつけても、頃日中學校師範學校の同盟休校、若しくは女學校等の醜行多きは、如何にもにが〳〵しきことならずや。

●赤十字社山形支部の看護婦募集　同支部に於ては、此度看護婦十名を募集する由にて、志願者は、委員部を經て、三月二十日迄に出願すべしと。而して、在學中は、相當の學費及び服帽を給して、一定の寄宿舍に入らめ、看護學の外產婆學をも教授し、卒業の後は、東京本社外勤部に入り、雇聘に應じて、廣く看護の實務に當らしむるといふ。

●小童の作文　神奈川縣下の、ある小學校にて、教師、作文の題に「楠正成」といふを出せり。一生忽ち草せるは、楠正成は人を以て作り忠義の爲に用ゐるものなり。

●臺灣主要地名の讀方　こは、臺灣總督民政局に照會して回答を得たるなりとて、愛媛縣教育會雜誌に載せたるなり。

臺灣主要地名

基隆、淡水、安平、打狗、大姑陷(大嵙崁を正とす)大肚溪、東勢、三貂大嶺、洩底　草嶺、大里簡(閩は簡の誤、頭圍、宜蘭、加禮遠、蘇澳、臺北、水返脚、

錫口、艋舺、大稻埕、海山口、龜崙、桃仔園、中壢、新竹、尖筆山、後隴港、苗栗、大甲、牛馬頭、大肚街、彰化、八封山、鹿港、六斗門、他里霧（務は多く霧に作る）、大埔林、三塊溪、嘉義、布袋嘴港、急水河、臺南、鳳港尾、鹽水港、瑞仔來、看西、大湖街、半路竹、橋仔頭、南仔坑、加禮頭、鳳山、枋寮港、恒春、社寮港、風港、牡丹社、紅頭島、（島は嶼の誤）、火燒島（仝上）、膨湖島、白沙島、漁翁島、媽正角、

●青森縣地方の方言一つ二つ

○兄　わんこー

○弟　わーじ

○娘　おねーさー

○嫁　わはーさま

○主人の弟　わんちやーま

○子供　わーらーしー

○猫　ちーやッぴー

○牛　べーこ

○馬　まッこ

○鐵瓶　かまーこ

○驚愕　とッてんぶちまけた

○いけません　まーわへん

○傳言を賴む　へんてらてへーてけらさーい

○ください　けーへー

●女性發明家　大坂朝日新聞記して曰く。

●女性發明家　近者の列國工業所有權保護同盟事務局機關雜誌「工業所有權」の記する所に依り米國に於ける特許の情況を觀察するに一は米國女子の氣力を表明し一は米國工業の隆盛を想起せしむる者あり一七九〇年より一八八八年に至る間米國に於て女子に與へたる特許の數を檢するに初め六十八年に於ては僅に五十に過ぎざりしも其後女子發明の精神は著しく發達し後の三十年間に二五〇〇に上れり然れども人或は是等の發明は專ら家事經濟の具に係り或は殊に女性に關する者ならんと思ふならんと雖も全く然ら

ず實に彼の中には機關車或は鐵路上倒木破壞機の改良に對して特許を得たる者あり或は戰鬪艦の改良に對して特許を得たる者もあり顧て我國の發明界を顧みれば今日迄女性の特許發明は三十五種にして特許總數の一分強に當り發明の種類中には織物用機械及び紡績用機械又は製絲用機械等ありと雖ども其多分は家事經濟の具に關するものなり我邦の特許日猶淺く工業未だ幼稚なるも女性の發明前述の如くなれば決して歐米の女子に對し恥づることなし男子も亦考究研磨せざるべけんや

●結婚者の方いのちながし

獨逸のドクトルシユワルフは、伯林にて、四十歲になれる、既婚者百二十五人と、未婚者七十五人とにつきて餘命數を實驗したるに、結婚者の方壽く、即左表の如く、六十歲、七十歲にては二倍、九十歲になりては三倍も多しと。

種別	六十年	七十年	九十年
既婚者	四八	二七	九
未婚者	二三	一一	三

我が國にても斯るべきや。

●男女懷姙自在法の發明

こは、東京藥事新報といふに載せたるなり。

維那大學の教授胎生學會々頭シエンク博士が胎兒の男女を定むることは母の意の儘なりとの說を唱へたるよしはきくところなりしが氏は歐洲の有名なる胎孕學者にして是れ迄に既に此道の著あり胎兒を自由に男にする法につきても數年前より研究を始め爾來專ら試驗中なりしが着々其實證あるを以て遂に今回一篇の論文を學士會院に提出したるなり此法にして若し世に行はるゝに至らば世間男兒を得んことを願ふて能はざる父母夥多なれば氏は其等の人により莫大の報酬を得べくして然る疑なしと人の云ふものありしに氏は頭を掉り予は富を作らんが爲めに之を研究したるにあらず唯だ學術上之を弘めんと欲するのみ故に學士會院の賞讃を得ば即ち足るといひたりとシ氏に曾て六子あり二人は夭折したりと雖も餘は健康なるが此等は皆男兒なり其外親屬緣類に氏の說を行はしめて男を得たるもの十四氏ありと云ふ尙ほ墺國皇族フレデリック大公家に五千萬弗の富を有し八子を設けたれども盡く女にして爲めに産を讓るべき男兒なし曾て數々男を得んことを望みて醫につき其云ふが儘に姙婦の攝養を試みしめたれども更に其驗なし然るに近頃シエンク氏の說に從ひ婚後十九年にして昨年七月始て男兒を得たりと云ふ氏は凡ゝ一時に一兒を孕むものには必ず男を生ましむることを得、一時に多兒を孕む動物には其多數をして牡ならしむることを得と云へり而して氏の法は當時論文提出中にあるを以て氏は之を漏すことを憚る由なれども氏は卵巢中の卵子は始めよりして男女の區別あるものにあらず（ウイルヒヨーの如き

は始めより區別ありとするものなり）とし胎兒の生（男女）を左右する力は男親に存せずして全く女親に存す母にして妊娠中（妊娠前よりあるを更に可とす）心を用ひて其身を處すれば男を生むこと確實なりと稱す氏の說に據れば生活の原動力として酸素を供給する血球男には五百萬個あれども女には四百萬個に過ぎず是れ男女間に智力體力の相違ある原因にして胎兒に適當なる丈の血球を與ふれば即ち男となるべしと云ふにあり要するに母に適當の滋養分を與へて胎兒を男に變ぜしむるに外ならざるべし氏の說は今や各國の大評判となり歐米の諸大家にして評論を試みるもの少からず多くは之を信じ難しとするものなれども蜂など下等動物には其實跡あるを承認するものありといへり

●百歳まで壽命を保つ法　英國「ダミーンハム」といふ處の有名なる醫師、ジエームス、ソーヤーといへる人、左の十九ヶ條を草して、是を守るものは、必ず百歳の壽命を保ち得べしと云へり。

（一）八時間睡眠する事（二）體軀の右側を下にして寢る事（三）終夜寢室を開放し置く事（四）寢室の戶の代りに莚を下ぐる事（五）臥臺を壁に向けざる事（六）朝入浴せざる事但し體軀の工合に依りては此限にあらず（七）朝飯前運動する事（八）肉類を少しづゝ食する事但し調理に注意すべし（九）成人の後牛乳を飲まざる事（十）身體の細胞を養ふ爲め脂肪多き滋養物を充分に食する事（十一）亂醉を避くる事「亂醉は細胞を害するが故に」（十二）毎日戶外に於て運動する事（十三）獸類を室內「居間」に入れざる事「獸類は不健康物を持來すものなるが故に」（十四）成るべくは田舍に住する事（十五）飲用水、濕氣、惡水排泄の三點に注意する事（十六）職業を轉ずる事（十七）少時づゝ屢々休業する事（十八）功名心を制する事（十九）虛心平氣にして怒らざる事

●郵便發受の心得　去る十七日、遞信省より告示されたるは、『郵便電信發受に付ては發信者受信者の注意は頗る交通の敏活を助くる所あるべきを以て成るべく左記心得書の趣旨を守るべし、追て此心

得は新聞雑誌其他公衆の用に供する印刷物類に廣く且つ屢々轉載し或は學校にて適宜取捨して學生生徒に教示する等成るべく公衆の周知を謀り以て公益を助けんことを期望す」と。心得書は左の如し。

郵便の部

一　郵便物の屆書は國郡市町村番地を記すべし府縣名は一國にして數府縣に分屬する地方の外記載するに及ばす

二　郵便物の表書は國郡市町村等の屆書を成るべく大きく鮮明に記すべし番地氏名は小さく書して差支なし

三　差出人受取人とも雅號變名等を用ふべからす

四　郵便物の羅馬字の表書には成るべく日本字をも併書すべし

五　郵便物受取人居住地の所轄郵便局名の知れ居る場合には其表書に「何國何郵便局區何町村」と記するを可とす

六　郵便切手は封筒表面の左上隅に貼附すべし

七　郵便物の表面には郵便日附印を押捺するに足るべき餘白を存すべし

八　急を要する郵便物は郵便函に投入せす郵便局に持參すべし

九　鐵道停車場附近に住するもの其鐵道に依り遞送すべき郵便物を差出し速達を欲するときは停車場に設けたる郵便函に投入するを可とす

十　小包郵便物は其物品の性質形體に應じ適當なる材料を用ゐて包裝すべし

十一　小包郵便物に信書を包入するの嚴禁たることに留意するを要す

十二　成るべく郵便受取所を設け置くべし



◎女鑑月並兼題

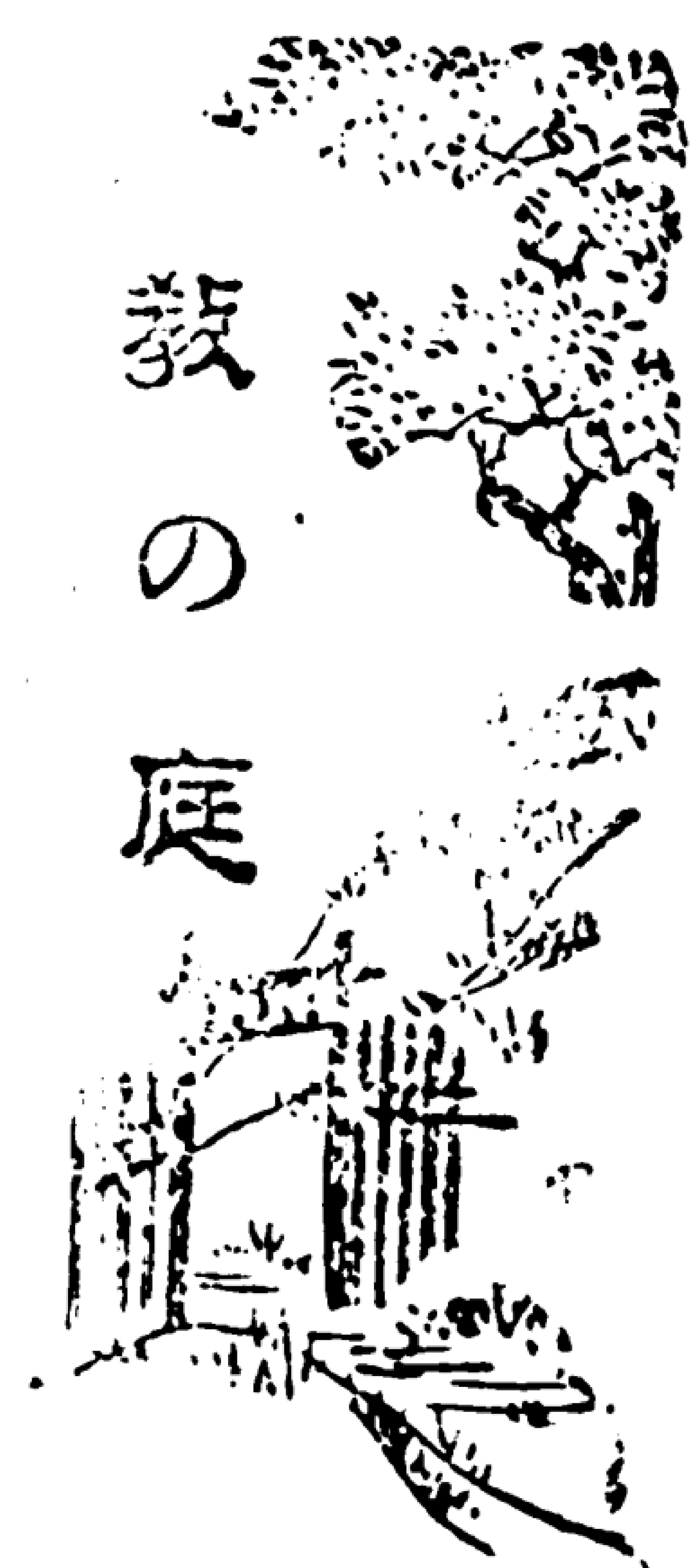
三月廿日 歌……蛙　文……海人　三月十日〆切

四月五日 歌……机　文……古戰場　三月廿五日〆切

四月廿日 歌……蝶戯花　文……試驗及第を祝す　四月十日〆切

五月廿日 歌……朝顔　文……汐干狩の記　四月廿五日〆切

歌文原稿〆切期日迄に本社に到着せざるものは、すべて沒書とす。



三月五日兼題　雛祭

天

うつり行く世にも忘れす少女子か
むかしをしたふひなまつり哉　甲府市山田町　名取よ志子

地

少女子が飾るてふりもうれとなく
ゆかしさ見ゆるひなまつり哉　長野縣下高井郡豐郷村　池田みさを子

人

生ひ立の末かくわれとうなゐ子か
まつるいもせのかみひゝな哉　近江國大津市字四ノ宮　榊原みさを子

秀逸（十五首）

浦井豊子

少女子がまつるひゝなに大みやの
むかしのさまもしのはるゝ哉

羽田三緒子

少女子かひゝな遊ひにこゝの重の
むかしのさまをしのふけふ哉

井田みさ子

大君につかふるみちををさなこに
をしへはしめのひなまつり哉

大内つき子

みる毎に奈良のみやゐの忍はれて
むかしゆかしきひなまつり哉

三彩操子

人皆のこゝろ／＼にむすめ子の
身のさちいのるひなまつり哉

小松好子

ゆかしくもたのしくもあり古への
みくにふりなるひゝな祭は

近藤服子

手折りきていさや雛にたむけまし
にほひそめたるもゝのはつ花

穂積穏子

妹とせのちきりもふかき宮のうちの
むかしを志のふひなまつり哉

星野榮香子

なにはづも知らぬ中より君を思ふ
こゝろつくしのひなまつり哉

高島壽子

飯そなへさけすゝめつゝ少女子か
あるじふりなる雛まつりかな

笹子脩子

三千歳になるてふ桃をさしそへて
きみをことほくひなまつり哉

雛まつる今日そ嬉れしき目のあたり
たまの宮居をみるこゝちして　武田桑子

睦ましく祭れるけふのひなあそひ
やかていもせのかゝみなりき　山根久子

まとゐして今日は樂しく遊ひてん
ひゝなまつりの花のむしろに　靜川千歳子

うまさけを雛にそなへて君か代を
うたひて遊ふけふそたのしき　岡田陽子

（以下原稿到着順）

さり〳〵に我か子かゝれさおひ先を
よそへてかざるひなまつりかな　田部里子

雲の上のすかたなからにむつましき
はなのにほひのなつかしきかな　佐々小琴子

神なからつたへつたへしひなまつり
のりにくも居のすかたみゐけり　佐々有鄰子

ひなまつり仕へまつれは久かたの
くも居のにはのここちこそすれ　酒井小谷子

いはふ子に似たる笑顔もうち見ゐて
ひなのまさゐそたのしかりける　沼澤みね子

桃のはなたをりそなへておさめこか
ひゝなまつる今日のたのしさ　浦井清子

一つの女かこゝろはかりに桃やなき
ひなにさゝけてまつるけふかな　田代艶子

たちならふ雛の御まへにもゝやなき
たむけていはふけふのたのしさ　田代綾子

おのつから都ひにけりおさめ子か
ひなあそひするたちゐこさはも　河田いし子

もゝのはなかさして祝ふなさめこの
こゝろたのしきひなあそひかな　中山さみ子

思ふさちもゝのさかつきめくらして
ひなまつりするけふのたのしさ　稲原菫子

いつの世にいつき初めけむ九の重の
むかしゆかしきひなまつりかな　坂田きみ子

いもさせの神なかしこみなさめ子か
いつきまつりてあそふけふかな　名取正代子

少女子かかしつく今日のひゝなこそ
むかしおほゆるすさひなりけり　横山柳子

君かよはしはかあしつかさゝまても
みやこめきたるひなまつりかな　住山哉子

三千年のもゝのはななはさかつきに
うかべてもくむひなまつりかな　住山靜子

桃のはなみきにさしそへなさ女子か
ひゝなまつりないはふけふかな　工藤仁子

桃のはなけふはなしましいさなさめ
さけるかきりなひなにさゝけよ　西艶子

うらうらさやよひの空のひなまつり
こゝろつくしの今日ののどけさ　澤田春子

ひめもゝの花もけふそさゑみそめつ
　いさやかさゝんひなのうてなに　河野文子

世の中のはなは散るとも散らさらん
　御代のはななるひなのまつりは　松原不二尾子

ちゝはゝに数へられけるひなまつり
　わたにはのましげふのもゝさけ　松原文子

わかやさのもゝの花さへゑみそめて
　ひなのまつりさなりにけるかな　井川すみ子

雲の上にすかたうつしてやまさとも
　みやこもおなじひなまつりかな　徳永萬壽子

いつのよにたか始めけんひなまつり
　やまさとみなのやまさとこころに　清水すみ子

ひなまつりあそびはやして少女子の
　うれしかほ見るけふのたのしさ　土肥仙子

ちはやふる神代のこともおもひ出て
　ひなまつりするけふにもある哉　織田きみ子

少女子かけふもつどひてあそふかな
　かさるいもせのひなまつりして　美奈川芳子

少女子か手折れるはなのもゝ千よに
　たのしきはるのひなまつりかな　鳥飼千重子

少女らかまつるひひなにうつりゆく
　よよのすかたそしのはれにける　城田もむ子

我か宿のもものはつはなをりそへて
　ひなまつりする今日にもあるかな　遠藤賀子

三千年になるてふもゝのはつはなを
　かさしていはふひなあそひかな　遠藤らく子

むかしよりひなのまつりそ少女子か
　よろこひつさふ今日はきにけり　迫水信子

もゝのはな百代かけたるひなまつり
　いも脊ひさしきためしなるらん　太田すみ子

うごきなき君か御代こそしられけれ
　いくよかはらぬひなのすかたに　吉川三千代子

たのしけになさめのまつる雛こそは
　いへをなさむるはじめなりけれ　林文子

おのかしゝ桃のはつはなかさしつゝ
　ひゝなまつりのけふそうれしき　小澤ゑん子

いやしきもたかきも同しまさゐして
　ひなまつる子のむつましきかな　能登くめ子

さゝけものはゝにならひて少女子か
　こゝろをつくすひなまつりかな　淺谷いく子

少女らかひゝなまつりのあそひにも
　まつおほきみをあふく御代かな　谷口ふき子

おほ君のかはらぬかけさあふきつゝ
　まつるひなこそたふとかりけれ　高橋ひさ子

こもさちさひゝなまつりて遊ふ日は
　はるののやまもたもはさりけり　高橋ちん子

をさめかゞ子さしの花のもゝちゞに
　つきせぬはるのひなまつりかな　野口さん子

むかしより今にたゆせぬひなまつり　かはらぬみ代のてふりなりけり　仲田みい子

少女子がそてにつゝみのたのしみは　ひなをまつりのまさぬなりけり　竹村竹里子

桃のはながるしにさしてをさめこが　たのしくいはふひなまつりかな　春永巳己子

大みよのてふりをみせてひなまつり　ひらけゆくよそめてたかりける　佐久間八重子

ひなまつり少女こゝろに身のさちを　いのりて御酒をさゝけつるかな　春山清子

少女子がこゝろこゝろに身のさちを　ひなのみまへにいのる今日かな　石神良子

少女子はおのがこころもさくらへつゝ　今日のあそひにまつるかみひな　河村君子

桃のみかやなきさくらをこきませて　のさけきけふのひなまつりかな　堀内愛子

日長きをおもひなくさむをさめ子が　ひなかさりする今日そうれしき　武藤いれ子

少女子がかほにてりそふもゝのはな　かさすもよしやひなのまつりに　武藤しけ子

宿ごさにひゝながさりてふるき代の　いもせをまつる今日そたのしき　高砂き代子

をさめらがよろこひいはふひなまつり　をさまる御代のすがたなるらむ　駒井一女

桃さくら折りてたむけつをさめ子が　ひゝなまつりの今日のいはひに　白石楳子

いそのかみ古きてふりもおもしろし　ひなまつりしていはふをさめこ　田中發子

折ち染ひひなもてあそひおもしろく　うきこさをたにおもはさりけり　無名

くさぐさのみけをさゝけて少女らが　ひなまつりするけふのたのしさ　堀いさむ子

をさめらが時をねがほにさきにほふ　桃をりそへてまつるひなかな　佐藤慈代子

咲きそめし桃のはつはな手折りきて　さすがをさめがひゝなあそひに　磯部しう子

まな子らに似たる笑面のかずありて　ひなのまつりそうれしかりける　高橋きむ子

少女子がゝきれにうゑしもゝのはな　今日のあそひのひなにさゝけん　高松貞子

ここのはの花をらそへてをさめ子が　いもせのひなをまつる今日かな　濱口貞子

かりそめのかたしろながら妹させの　もゝよろこひのいろそこほるゝ　久間春子

子のためにけふひなまつるしろ酒の　あまきはおやのこゝろなりけり　小川愛子

ひさゝせにあらむ限りのうれしさは　ひなまつりする今日にもある哉　須磨純子

いそのかみふるきなこりさ思ひ出て
おいそふ身にもひなまつるかな　田中ゑん子

いにしへにかはらぬけふの雛まつり
あそふなさめなみるもゆかしや　熊田鶴子

こさしきにひゝなまつれる少女子は
よそのみるめもたのしかりけり　絹川ますゑ子

いさこさも土雛摘みこよまちしくし
ひゝなまつりはけふさなりけり　日吉あさ子

少女子かいつくしのつくしくし
ひなにさゝけていはふけふかな　星野千春子

なさめ子かひなのかさりもこまかにて
もゝざけくめるけふのたのしさ　賀屋蕗子

おふきみる雲井のさまないへこさに
うつしてまつるひなあそひかな　吾妻ちか子

ゆたかなる君か代しるくなさめ子か
ひひなまつりのけふそたのしき　館脇ます子

上つ代のすかたなかしき紙ひなな
いまにつたへてまつるけふかな　諸井久良子

桃さくらよもきのもち飯さりそへて
けふそやよひのひなまつりする　池谷富子

なさめ子かむつみ遊ひていにしへの
ためしかはらぬひなまつりかな　戸塚鐵子

こゝのへの雲井ゆかしくなさめ子か
よそへてまつひなあそひかな　中　杏子

少女子かいはふひゝなのあそひにも
ゆたけきみよのはるそ知らるゝ　失名

こゝのへのうてなの桃もゑみそめて
けふいへこさにひなまつりする　仁保しま子

なさめこはひなまつりしてさく桃の
はななりかさしあそふけふかな　失名

三千歳になるてふもものはななりて
まつるひゝなにたむけつるかな　失名

お任君の御代なこさほくしるしさて
はなさくはるにひなまつるなり　荻原章子

もゝさくら小瓶にさしてなさめ子の
にほひくらふるひなまつりかな　下元もさ子

少女子かまちしやよひのひなまつり
うれしきこさのきはみなるらむ　野中あさ子

待ちつけて雛まつりするなさめ子の
こゝろのうちやいかにたのしき　重松たか子

なさめ子はこゝろ長閑にまつるらむ
もゝにさくらにひなにそなへて　近藤よし子

もゝさくら手折りてもてる賤の女は
ひなまつりするこゝろなるらむ　仲田しげ子

およひなり少女の待ちしいやよひの
ひなのまつりやいかにたのしき　由井澄子

なさめ子か雛なまつるさよりつさひ
あそふなみるもたのしかりけり　由井浪子

をとめ子がよろこぶ聲もにぎはしく
いとたのしげのひなまつりかな　森こと子

をとめ子が春のやよひのひなまつり
たのしきものゝきはみなるらん　宇高まつ子

賑はしくわらひとよめくひなまつり
さすがにいへのむつましきかな　石川四子

をとめ子が家ををさむるしるへにと
まつるひゝなのいもとせのかみ　富士村毅子

うなゐ子のよそへるきぬも色そへて
めてたさまさるひなまつりかな　所佐以子

をとめ子が桃にさくらをさしそへて
かしづきいはふひなまつりかな　背木たま子

おしなへてまつるひゝなに少め子が
さかもりしつゝあそぶけふかな　磯野こと子

をさな子が睦ひつとひてひなまつる
けふのこゝろそたのしかりける　岡部のぶ子

をとめ子が雛まつりする手すさびに
をりはやしけりもゝのひとゑた　岡澤倫子

つとむへき道ならひつゝをとめ子が
ひゝなあそびにけふもくらしつ　增田丹眞子

來ん年もたまこむとしもいく千代も
かはらぬみよをいはふひなかな　山内諾子

いつしかと雛あそびはちかづきぬ
そのふのもゝもいまやさくらむ　酒井ぎん子

いにしへの人のすがたのおもはれて
みるもゆかしきひなまつりかな　金森俊子

春されはやよひのけふのひなまつり
こゝろもふかき小簾のうちかな　成瀬あさ子

手折り來ていざやひゝなに手向まし
ち子がうゑにしもゝのはつはな　高橋かれ子

今日まつるひひなの前にむつれゐて
くもゐにあそぶこゝちこそすれ　田中みつ子

ひらけたる今もむかしにかはらぬは
はるのやよひのひなまつりなり　北村左枝子

長閑なり千世のみそぎのかたしろと
ひゝなまつれる子らがあそびは　外川益子

ゐやまなぶ初めなるらんうなゐめが
うちつとひてぞひなまつりする　山鹿虎子

朝なゆふな積にしとがをみそぎして
千代やすかれとまつるひなかな　山崎さく子

うち向ふこゝろもゆかし雛まつり
もゝとさくらとまじへたむけて　村越れん子

とり〳〵に物をたむけてひなまつり
生ひさきいはふ今日にもある哉　松浦とせ子

おのづから賤がをとめもみやぶりぬ
あなおむかしのひゝなまつりや　永井さい子

こゝのへにちかくかしづく心地して
しつもひなひぬひなまつりかな　春園櫻子

くむからにいさゝ樂しきゆふへかな
ひゝなまつりのもゝのしろざゝ
香澄梅代子

少女子かちさせのははるなきろさや
もゝのさかつきくみかはすなり
中村うた子

なし島のつかひはなれぬいもさせな
いつきまつれるひなまつりかな
石原庫子

今もなほもゝよろこひのさかつきの
なかれをくみしひなまつりかな
嶋田さめ子

こゝのへの雲井なこゝにうつしつゝ
むかしなしのふひなまつりかな
足立千代子

山ざさのくるやの間居のせまきまて
かさりたてたるひなまつりかな
鈴木高子

なさめこかひなのまつりに大うちの
つかへのみさをまなふけふかな
坂田てつ子

今もなほむかしのさまのしのはれて
いさゝゆかしきひなまつりかな
島山千代子

こゝのへの昔のさまもしのはれて
いまもかはらぬひなまつりかな
島山百合子

うれしさもつゝみ繁てははらからの
そでさへかさすひなまつりかな
藤島英子

敷しまのやまさおみなのかゝみにさ
たかはじめけんひゝなまつりを
尾澤知世子

桃のはなほゝゑみそめしあしたより
はやもまたるゝひなまつりかな
渡部千代子

桃のはなもゝ代もかくてあれかしさ
いのるもゆかしひなのまつりは
松江操子

おもふさち里のおさめもつさひきて
ひゝなまりに日をくらしつゝ
楢野龍子

大内やまむかしのさまらしのばれて
ゆかしかりけるひなまつりかな
木川里子

もゝしきの宮居のさまをひなさりて
まつるやたみのつさめなるらん
赤羽若枝子

少女子かをさなこゝろにもゝのはな
おりてまゐくるひなまつりかな
小野あき子

いそのかみ古きむかしのをしへにて
いまもかはらぬひなまつりかな
小松みつ子

三月五日兼題　深山櫻

天

千葉縣安房郡豐田村交見　三幣みさを子

けふは隅田の八重櫻を、あすは上野の一重を、と、めてはやさるゝも、さすかに都の花なれはなるべし昔、玉敷く平安の宮の、み盛なりしころは、交野嵐山の春にこそ、卿相雲客もゑひたれ。今は、ふりはへて、とふ人もなく、空しく咲きちる世とはなりにけり。あはれ、同じく敷島のやまとの花にして、あ

またの人のかざしとなりて、散るををしまるゝもあり、あるは、むなしく山の嵐とちりゆきて、唯色こき若葉に、花の名殘をとゞむるもあり。移れは變る浮世のさまこそ、いとも〳〵あさましけれ。されとかく朝な夕なに、めてはやさるゝ都の花よりも、いとゆかしうなつかしく見わたさるゝは、深山かくれの花にそありける。春の日影の、うら〳〵とさしそふまゝに、こゝかしこ、松のひまより、梢高く咲きいてゝ浮世のちりもかゝらす。いはゝ、さるやむことなき女房の、よききぬまとはぬが、おのつから光りてりそふが如く、いと淸らかに、うるはしともうるはし。近く之をのぞめは、淡雪のふりかゝりたるかと、あやしまれ、遠くながむれと、白雲のたなひくかと、うたがはる。都ちかき所ならましかと、日ねもす、男女のけぢめなく、高きも卑きも、ゑひあくかれ、いといふせき花かげと、なりなましを。世はなれし、この深山の櫻よ。ふりはへて、駒をつなかむ人もなく、手をりてかざゝむ人もなし。たゝきこゆるものは、百鳥のさへつる聲と、木たまにひゞく斧の音と、のみなり。さはれ、都の花とさきいてゝ、たはれめ、さてはにせみやひをの、かざしとなりて、あたし風に、ちらむよりは、深山かくれに咲きちりて、時に、山かつのつま木にそへられて、花や山路の重荷なるらむ、とうたはれむこそ、なか〳〵にうれしからましか、あはれ、色香ゆかしき花は、天さかるひなの、深山におほかるを、世の人の都の花をのみ、めで興するは、いかにそや。

地

備前國和氣郡閑谷　西　艶子

同じ色香に咲きぬとも、吉野嵐山に生ひたらましかそ、花も憐れも一しほなるべきを、人跡絶えしかゝる深山に、そも誰に見よとの盛りなるらん。せめて里近き山ならましかなど白雲とのみ、よそに見るべきかは、遥かながらも、みはやす人の數多なるべきものを。花の色香のめでたきにつけて、戀あたらしういとほしき心地ぞする。さりながら、深山の櫻はさるあだなる心は、なからんかし。そは、いかばかり、谷深く山嶮しとて、春日の光、くまなき限りは、咲き匂ふなるべし。いかで、うつせみの世の人に媚びて、いたづらに、憐れを求むる花ならんや。古人の「深山木のその梢ともみえざりしさくらは花

にあらはれにけり」とうたひ給ひし如く、いかに山深く、霞の奥にかくるゝとも、いつかは世にあらはるゝ時の、無かるべき。實に、床しく潔さ、隱君子にもたとへつべきものは、深山の櫻になん。

人　越前敦賀町 久間有隣女　久間春子

たまたま、小原女が、重荷に折りそへられ、都の春にいでゝ、聲なき詩に畫かれ、聲ある畫にうたはるゝは、彼の奥山の花の心か、はた心にはあらざるかすべて、花やかにのみなり行く世のならひとて、嵯峨や御室の春の朝は更なり、祇園平野の夜の花にも上戸は酒なくてとうたひ、下戸は花より團子と、口賤しくもねがひ、花はたゞ、この媒ちの樣になり行くも、うたての事よ。たまたま、歌に、唐詩に、色をも香をも、知りがほに、ほこりかなる人もあめれど、世の花心には、猶そまりぬべし、かゝる世にはおく深き山ふところに咲きいでゝ、吹く風の恨もしらず、よの人のすさめぬをもなけかず、天眞の色を恣し、おのれと咲き、おのれと散る、心はへのゆかしさよ。されど、心ある小原女がなさけの、手ふさにふれて、都のつとゝなりたらんも、み山の花のま心には、あらじかし。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

さくらの花に、糸櫻のなよびかなる、しほがま櫻のふさやかなる、あさぎ櫻のあはあはしき、ひざくらのなまめける、など、くさぐさあれども、朝日影にほひのどかに、足引の山より山にてりかはせる露のおくふかく、白妙の雲にまがひ、立田姫の衣袖に似て、春風のゆるらかに、ふきわたる。み山櫻は、げにげにうるはしく、敷島の大和男の心にもかよひ、外國人の月を欺かす姿は立ちつつ居つつ見のおもしろきながめになん。

福原菫子

春雨もいつしかやみて、空いさうらゝかに、晴れやりければ、いざこれより山邊の霞わけて、花にあくがれん、君はいかにさ、親しき友にそゝのかさるゝまゝ、家を立ち出でぬ。こゝは一の谷さ呼ぶ、いさも嶮しき山になんある、されど、友は、厭ふ氣色もなく、まめしく、導かせ給ふに任せ遙か山中をわけ入りぬ。かなたに見ゆる白きは何ぞ、まだ消ねぬ雪ならんか、いなさよ、吹きくる風のかくもあやしく匂ふは、うれしき花ならんさ、からうじて至り見ればうべなりや、げに櫻にぞありける。浮世の塵をのがれ咲く、花の色香は、しかすがに、あはれに飽かぬものかな、裝飾を施しし園の花などより、むしろ、われは、清き深山櫻を、こよなき床しき花さ思ふになん。實にしく。われ等もいざ、このやんごさなき、深山の花にまれび、うるはしきやまさの花におひ立たん。あなゆかし、あな

たのしやさ、眺め入るもなかし。さらぬだに山中の、木暗くなりまさるに驚き、暮れぬ間にかへらんさ、家つさに枝折り持ち、いそぎ、心のこして山を出でぬ。

小田中靜子

我が學びの道は、進まれど、せきもりなき。月日の駒は、さかく足かき早く、先つ頃まで、色も香も、なかりし、深山の櫻、こゝかしこ、ほころびそめて、雲かさまがひ、かすみかさ見ゆれば、道ははるかに、へだゝれど、我れをまねくの風情あり、凡そ花のうつくしからぬは、なけれども、深山の櫻は、一入ゆかしく、思はるゝるなり、時節柄さは云ひながら、百千々の草々、松もみどりをます中に香もかぐはしく匂ふこさ、げに、清くさやかなれば、そが、心を、歌にも、詩にも、文讃にも、ものするなり、あはれ、かゝる、うつくしき、よそほひの、操花さへ、ほこり顔なく、たにかはへだて、深山にあるものを、學淺く、才識さても、足らざるに、我が身をほこり人をのゝしり、などするは、深山に、ゑめる、花にも、をさり、いみじう、見にくき事になん。

鳥飼千重子

馬に鞍おきても、まつかひなければ、七重八重霞へたてし、深山よりの、花の便さて、なく鶯の聲にひかれて、へだてぬ友垣一人ふたり、そのゝかして、いでや櫻狩せむさて、山また山のおくまでもくがれ入りぬ。さ見れば、松のみどりの、色まさりたる枝葉のしげみに、打まじりて、いまをさかりさ、咲きそろひたる、老木若木の櫻に、うら〳〵さ、朝日てりわたりて、露もにほはむばかりなるに、あやしき鳥の、木傳ふかたより、三ひら四片ちるさま、ねらい

はれず、花こそ山の姿なりれさよみけん人の心さへもおも、ほいて、あなうまし、あなうまし、あなうるはしなど、あかぬ眺に、木の下陰に立よれば、世のちりのかゝらぬほどの、色も香も一入うるはしく、たはれ男の影もみはず、うかれ女の姿もあられば、花に眠れる胡蝶の夢も、いさやすらかに見ゆるもゆかしや。げに、春はたゞ、此あたりに咲しめまほしう、花に心ひかれにけり。あはれ空蟬の世の人々はたゞしら雲さのみ見まがへつべきこの山のおくにもなほ春はありて、かゝる尊き花の色には、心なき賤山がづも、あなさぞ足をさゝめつべく、あるは、宵さへぐもろこし人もこま人も誰かはしきしまの大和心に、そまざらでやは、など思ひて、かしこ人の言の葉など、しぬびいでつゝ、

朝ぼらけ霞ににほふやま櫻
　やまご心さうへもいひけり

綿野りき子

見る人もなくてちりぬる奥山の紅葉は、夜の錦なりけりさ、古への人うたひしさかや、實に宜なるかな。こは秋の詠めなれど、何れ劣らぬ春の花、しづけきみやまに生ひたちて、咲き匂ふ櫻花は、如何にきよらかにうるはしきかゝあな見まほし。されど、人里遠きみやまの奥、何處に花の匂ふらん、知るべさへあらされば、かよわきをみなの身さして、つゞらをりなる山路を、やみにふみわけん事、いさもしく覺束なし。哀れながむる人なく徒うやみの錦さちり行く花ぞ多かりなん。

西村しやう子

今日しも、春雨のあさ名殘なく晴れて、いさ長閑なる景色に、そゝ

のかされて、家を出づるに、野山にかゝるうす霞はた百千鳥のさへづるなど、日々籠り居る身には、いつれ珍らしからぬかは、心浮きたつまゝにそこはかとなくありきつゝ、山路にさしかゝりぬ。今しも萌え出てし路の邊の小草、つみもて行くに、いと大なる古寺あり、床しと思へば、わたりの風の何となくにほふ心地するに、やをら見上くれば、垣ごしに出てし櫻の枝もたわゝに花の咲ける。花や今の主なるらんと見れば、一しほ美しくて、住みなししいにし人もなつかしく思ひやらるゝにいつしか遠寺のかねかすかにひゞきて、さと吹き來る風に花の一ひら二ひら散りぬ、あはれ、かゝる御寺の庭も、猶常なきものかと、そゞろにあはれを催してたちさりがてなるを、夕風にさそはれて、かへさにつきぬ。

名取正代子

春がすみ立ちそめしより、まつまたるゝ櫻花、心いそぎに、なり〳〵は、白雲をまへ、それと見まがふばかり、人々のひたまちにまちつけて、めでいつくしむこそ、實に此花の榮にはありけれ。されど、名にしおふ都の花は、ことさらに、木ぶりをつくりて、こゝの枝、かしこの梢を、とやせん、かくやせと、さま〴〵に姿ひたてゝ、ひたすらにみるめをのみ、取りつくろふは、いかにあらん、それとかはりて、深山木の、獨りのどけく咲きにほひたるは、おのづから優にやさしき姿のあらはれて、らうがはしからぬぞ、こよなうゆかしき心地せらるる。かくいはば、大方の世にそむくべけれど、さく花のにほひばかりは、深山とて、いかで都におとるべきかは。人の身の上もしかなり、花の都にすまひつゝ、綾錦もて、うはべをのみよそほひ、こゝろねじけたらんより、むしろ深山そだちのつゞれをまとふとも、心すなほならんにはしかじと、おもふになん。

坂田きみ子

長閑なる春の心に誘はれて、行きかふ人のしげきにも、花の盛はしらるべし。いでや、けふはしも、櫻狩のふるごとになぞらへ、長き春日を、花の下にて、ひねもすくらさまほしと、まづ何がし山のふもとの方よりぞたづね入る。やがて、見わたる一村の雲は、これなん朝日に匂ふ山櫻花にはありける。實に、花の王とたゝへらるゝもしるく、色に匂に、とりならべて、いはんかたなし。やう〳〵あくがれ入る程に、八重にかさなる花の雲なるが、こゝかしこに匂ひみちたり。猶あかぬまゝに、まだ見ぬ方の花もやあると、たどりゆけば、思ひきや、かゝる奥山に、このめでたき花あらんとは、只一本ながら、幹の太さ一尋ばかりありて、其枝の四方にひろごりたるさま、めでたしともめでたし。かくて、こゝにいこひつゝ、おもひのまゝに、こたひさだめきつるほどに、はやあかれさす日の西にかたぶきたれば、いざ一枝を家づとにとてなん。

奥深くけふふみわけつ山櫻
あかぬ心に身をばまかせて

河村君子

奈良の都、志賀の古里と花の言葉は世に匂へれど、その面影はなし。今は名にたかき吉野の山、隅田の堤、こや紅紫千丈の花、一文字も知らぬものしか、足は十文字に踏みてぞ遊ぶなど、花にはなか〳〵に、うしろめたくおもほゆるよ。されば、遠く見る人を厭ひて、山深く咲ける花こそ、又なくあはれなれ。

八重一重げに九重の都も、花盛る[illegible]庄の頃にしなれば、大宮人の

見車のゆきかひしげきにひきかへて、見る人もなき谷間がくれ、さては峰遠くさきて、むなしく雪とふりて、かげなさゞめず、まれにめづる人ありとは云へ、世をさけて色即是空の尼が、佛壇に手向くるにあらでは、薪こる杣人のぬるさも花の陰にさてかくるゝのみ。あかれさす朝日に匂ふあしたも、入日さす嶺は白雲に色そふ夕も、眺めむ人とてはすくなく、都の花は綺羅をよそほへる少女子にもたとへつべけれど、深山の櫻ぞ賤の女の姿にさも似たりける。浮世の嵐の濁ひがたく、娑羅雙樹の理にもるゝなむど、實に都の花にもまさりて、

奥山のさかりの花に杣人は
のさけき春の色をしるらむ

河原よし子

山深み、ゆき來ふ道のけはしきあたり、さわがしき、浮世のちりを遠けて、一もと二もと、木の葉がくれに咲きいでたる櫻こそ、色香をきそふ花の都の櫻より、いやまさりて、なかなかにめでたく、うるはしけれ。

峰の八重霞ふきはらひ、のぼる旭のあしたに匂ひ、嶺けに雲たなびく夕に、色そへて、咲ける姿は、都には見ゆべくもあらず。

されば、都にさきつる花は、こちたくよそほひこらし遊女にたとへつべく、たづれ來る路ある深山路にさける櫻は、よしある人の、あちきなきを厭ひて、みさりの黑髮そり落し、都はなれし山里に、さゝやかなる庵むすびて、誦住居せるがごとく、あるは、都にもね見ぬほどのたをやめが、其花の如きがんばせ、みどり色こき黑髮を、あかつきたる手拭もて、つゝみしさへあるに見ぐるしき衣はふりしか、鍬持ちて、畑たがへし、明け暮れあやしき賤が伏家に起き臥せるが如く、いともあはれに、見ゆめり。げに、はなは都にもまさりて、うるはしく咲きつれど、しづが樵夫が薪こるわざに通ふ道すがら、ながめゆく外、この類くうるはしき花を、見に來む人のなきぞあはれなる。

朝な夕なながめんものと杣人が
きりもつくさぬ山さくら花

高砂き代子

名にしおふ大和の吉野、山城の嵐山、武藏の隅田堤などの、櫻の如き、咲くをまたれ、ちるをなしまれつゝ、世の人にめではやさるゝ花こそ、花のほまれなれ。それにひきかへ同し香同し色なる花ながら、あはれ深山の櫻、昨日今日吹く春風ののさけさに、やうやう咲き出て、白き面影、村里にあらはしつゝ、いさゝか人にめでられはやさ思へば、あなにくや、春霞、香をさへつゝみもらじとて、たわゝにも立ちかくしつゝ、さまで問ひ來る人とてはなく、唯蝶鷄をつれづれに、なしきさかりを打過さて、さすが人目にもかゝらず、むなしくもさに散りはてんこそ、げにあはれなれ。深山の櫻よ、人も此の世にかくあるへし、たとひ才學深き人とても、をりよきふしに出てずば、唯いたつらに一生を、すごしはてん。

松岡濱子

君子は其獨をつゝしむとか。人しれぬ深山の奥のさくら花、ひとり靜かにさきに匂ふこそ、めでたくもまたゆかしけれ。なべて、櫻は散るきはの、いさいさいさきよきに、たけきものゝふのさまにたとへられ、みこゝになしまれて散りゆくめり。こゝかしこ名所のさくらは

いふもさらなり、まがきに匂ふもの、あるに、ゆき〻のまたにさけるものは、めづる人もをしむ人も多かるを、深山の奥の櫻花は、たはてこふ人もあらぬに、時くれはうるはしくさき匂ひ、ちりてはおちくる谷川に、花ひら流してくれは、實にゆかしさの一しほまさりきて、そ〻ろおのれの花におよはぬなくいぬ。

東野さく子

春は、日影も、うららかに、なよ風若葉を渡り來て、氣も浮き立ち、こ〻ちもすがしきに、田畑少し隔てて、程遠からぬ、小山の、ふもとには、霞さへ棚引き、景氣はならす。覺はたりければ、彼の霞の奥はさ。いへる、古歌など唱しつ〻、思ふさち二人三人誘ひ、小路をたさりて分け行けは、何時としもなく霞の内に込められて、右よ左よさ行くへき方も定めなく、さがらいひつ〻、されこさなさして、山の端を出てけるよさ思ふ間に、ふさ見れは、雲さも雪さも見まがふさ云ひ、古したりける山櫻の、いまを盛りさ咲き乱れ、ちり初めたりしにはあらねさ、一ひら二ひら、風のまに〳〵ゆるやかにまひつ〻落ち行くさまはいはれす、實に遊めには、夫れをもかすみさは見たりけん、やかて柴折布き、打やすらひて、花の色香のなかしきに、彼是打語らひつ〻、且つめでかつ興じうれしさいはんかたなく、かへさの道きなも打忘れぬ。

岸田はつ子

四方に霞たなびきて、垣根の梅の、ほころび初めし頃より、人の心もおのづから春めきて、花さしいへは、心さく野にあこがるも、わりなしや。今日は、空のけしきも、いさのごかなれば、いでや、まだ見ぬ方の花をたづれんさ、こぞの栞のみちかへて、里ばなれたる山路へさ物しつ。山口わけ入れば、老松若松、なみたてるひまごさに、今ぞ盛ならんさおぼゆる花の、白砂にさきみちたる、たさへんやうなし。かたへに清き流あり、千代のためしならねども、おのく手にむすびつ〻、谷川づたひ登りゆくに、花の多きこさ數をしらす、風すこし吹きおろるに、雪かさばかり乱るる花の、見るが中に、ふりつもりたるなど、實に此の世のものさしも、思はれすなん。物ふりたる木立、いさ茂き中を分けつつ、なほも尋ぬるるに、途に道なき所に入りぬ。きこりも通はぬにやさ、いさあやし。麓の方を見れは、白雲立ちこめて。わけこしあささへ、おぼつかなし。一人の友の、しらぬ山路にまよひぬるかなさ、打ちすしたる、折からをかし。しばしいこはんさて、草のむしろにおりゐて、ながむるほどに、木上より、ちりし櫻の、流れくるに、さては、この奥にも、なほあめりさ、いみじうゆかしくて。

きこりたに通はぬ山のおくさへも
春のひかりはみちわたりけり

屋野榮香子

都の花ははや散りはて〻、見所なき折柄、深山の櫻は、きのふけふこそ盛りならめさ、きこりのいふにまかせつ〻、思ふさち三人四人して、いさ〻かの調度さ〻のひ、朝まだきよりいでたちぬ。此日は、一きはのさかに打ち霞みて、心も空にあこがれぬべうなりにしかば、道すから打ち語り、或るは小草なさ摘みつ〻、かの嶺この嶺さたさりつ〻、名も知らぬ山路にわけ入れば、霞みてそれさ見はれさも、いつしか來にけむ、ふさめてたき香のしければ、皆々よろこび、心たのもしく、風を便りにゆく程に、今を盛りさききそろひ、何れな

先きをも見わからず、浮世の外の心地して、皆々花の下にやすらひつゝ、打ち眺めやる樣に、けふの花はいかにかなといふもあれば、いとをかしく口すさびつゝめではやし、己れ忘れし思ひせられぬ。げにかゝる山こそ、都にまさるなれ、誰つくらふともなく、木がくれにおのがしじ咲きにほひたるぞいみじき。己れ獨りながめんは、いと惜し。手折りて家つとにせむ、或るは亡き母にたむけむなどいひもてさわぎ、春の永き日も、花にあくがれ、歸るさ打ちわすれゐたるに、いつしかけふの日あしもいとすくなく、鳥のねぐら求むとて、鳴きさわぐに、驚き、立ち去り難けれど、せん方なく、家路へといそぎぬ。

小川愛子

不老門には、日月長しとかや。世ばなれたる、み山の奥に、よその梢の若葉さす頃、やうやうさかりにて、人まちがほなるもあはれなり。すだの堤上野の岡に、咲きいでしよりも、おのが心のまゝに、生ひたちたる、一しほ、花のあはれも深き心地す。長安の紅塵に交はらんよりも、ひなの界の桃源の春、のどやかに生ひ[illegible]んが、なかなかにまされるかと、おもひ出でらるるも、おく山の花みるをりの、おもひになん。されど、日に月に進み行く、大み代の春にありながら、春秋猶とむ吾らがごち、世にれたる、奥山の花に、ならひてのみあるべきかは、

須磨純子

なべて、世の人情の薄くなりゆくまゝに、よろづのもの皆しかなり行くも、うべなりけり。色香を爭ひ、時を競ひなどして、あだし人のなさけをうけんとつとむるよ、とはいへ、なほ誠の道を守り、情深き人もありぬべし。されど、さる人は大方の世にあはずとて用ゐられず、空しく草の庵にのみ籠りて過すもわりなしや。花も又然なり。奥深きみ山木などに立ちまじりて、世には知られぬものから、人もすさめぬとて、わびしげなるけしきも無く、己を守りて、色香も深く、いと尊き大徳などに、朝夕愛でられ、わらはやみにわづらひおはしし光の君の御心をも慰めまつりけむ古おぼゐて、咲き出でたるこそいとゆかしけれ。かの世に媚びへつらひ、己を忘れたらむにくらべて、たふときことは、かの大徳にもたとへつべく、雄々しきことは、げに敷島の大和心にたゞふべくなむ。

笹子脩子

外國の人に見せばや、比ひなき山はふじの根花は櫻なと、古人の言はれしも、實にこそ。敷島の大和の國に、春たてば、霞棚引くひま〳〵に、をちの山こちの岡の邊、おしなべて、雲か雪かと匂ふなる花の、さきみだれ、得もいはれぬけしきなり。清原の少納言の、嵐にかき劣りすといはれしも、さこそ。西の空には、みよし野、小倉、嵐山、昔しながらの志賀の里。東の隅田、小金井や、さては、上野、飛鳥山、いづら紅の花ならぬはなく、長閑けき空に、明日はいかに風の立つらん、今宵は雨もやと、のゝしりありき、なが〳〵に、人の心も長閑ならぬぞをかしき。おのれ、人多きを好まねば、山の櫻探らんものと、獨り、峰をさまよふに、溪深く、松杉生ひ茂るかひより、白雲の見ゆるを、いぶかしみて、出で見れば、一本の櫻なりけり。木大きやかに、枝ひろく、花しげく、常盤の木々に色はゐて、得もいはれぬ風情に、水は玉を碎きて流れ、砂明に苔青く、花と匂ひ合ひたる樣、此世のものとも思はれず、百鳥は、日すがら聲を爭

びて、花に戯れ、人來といとふとにはあらで、歌など促すにや、馴れ近きぬれば、腰折を短冊にのべて、結付けなどして、心やりけり、あはれ、此花、都にうつしてしかなといへば、美しき鳥のあざけり笑ふがごとし、さなり〱、あはれ、此花、此深山にありてこそ尊けれ。うるさき塵をのがれ、かまびすしき噂をさけ、世にしらせまほしさにはあらず、人に見せまほしさにはあらず、時來ればさき、時去れば散り、天のさづくる位に安んじ、天命をたのしみて、獨り綠と萬代の齢を契る、あはれ、深山の一木、吉野隅田の櫻にもまさる心、眞に櫻の中の聖とこそいはめ。仙人とこそ見め。此清き心、誰かくみてん。此高き操、誰か學びてん。

唯知らぬ深山の櫻折りかざし
　清き心の友とこそ見め

世に名を貪り、譽を買はんと、私の欲にほだされ、自ら心の煩を求むるもの、或は、人見ればとて、玉鉾の直なる道をふまで、ゆがめる業を行ひ、なか〱に身を苦しむるもの、此花に耻ぢざらめや。外國の人に見せばやといはれしも、此心ならんか。

人は武士花は櫻の言の葉も
　赤き心のあればなりけり

林　やす子

四方　景色のどやかに、人の翔心も浮き立つ今日、かしこの花も咲き初めぬかしこの花も見ごろと聞し、あはれ嵐のに四吹き散さぬなど、高きも卑きも、打群れつゝ、終日花にあくがるゝを、さるにぎはしき事とも好まぬ身には、ただあれたる庭に咲ける花を、こよなきながめと、たのしみ暮し居りぬ。さるほどに、山里なるやからが許に、さりがたき用のありて、朝まだきより、車をかりて出で立つ、ゆき〱て、ふと見れば、向ひに高くそびえたる山の、背みわたりたる木木が梢のたゞ中に、いと白う、花の一本ぞ、今を盛りと咲き亂れたる。やう〱近うなるほど、げに浮世の塵にけがれざる、其のうるはしさ、あたりの若綠にかゞやきたる、其のはなやかさ、なか〱言の葉も及ばず、かゝるながめを、春ごとに友とせる人こそ、げに〱心にくけれ。やがて、志す家に至りつき、何くれと物語りし、事共しはてゝ、また〱車に打乘り、見かへり〱家路につきぬ、心は彼の深山の花に殘して、

山手てい子

世の中に、ゆかしきものゝかずはあれど、見る人もなき、深山の奥に、たゞひとり、いともけだかく、いともやさしく、優に、艶に、咲きいでたる櫻こそ、たぐひもなう、ゆかしけれ。あはれ、こを名ある庭に、うつしうゑなばいかならん。見る人多き、公園などに、あらましかば、など、思ふも、世の人の常にこそ。されど、あらはなる場所に、咲きいでゝ、あまたの人に、もてはやさるゝ花は、なかなかに、ゆかしきふしは、すくなきものにて、人しらぬ、山路に匂ふ櫻にこそ、なつかしさは、こもるなれ。そは、よろづすぐれたるをみなごとても、あからさまに、われはがほに、うちふるまひたるは、ゆかしきふし、すくなくて、よろづ、ひかへめに、つゝましげに、もてなすが、かへりて、なつかしき、心地のせらるゝと、おなじことにこそ

賀屋齋子

春霞、日影のどかに、なりぬれば、櫻はいと、らうたげに、ほゝゑ

みて、世はいつしか、花さそなりにける。人の心も、そらに、うかれて、知らず、花かげに來ぬるも、いとをかし。世の人、たれか、この花を、めではやさゞる者あらん。さるを、山深み、獨さびしく、きぬるは、人に知られん、よすがもなく、あたら、色香を、あだに、すぐすは、口惜しき、かぎりになん。さはいへ、中々に、樂しからん、世にこび、へつらふ、心もなく、のどかに咲きて、一生を、終ふるとは、誠に、たふとく、うらやましき、事なりけり。

岡澤倫子

都近きわたりに咲ける花は、よしや美しくとも、見劣りせらるゝものなり、隅田川の櫻なと。彌生の空の景色、他に比ぶべうもあらさめれど、能く〳〵見入れたらんには、誰ほこりにむせび、花の色さへ、うつろひがちなるやうに見ゆるこそ、口惜けれ。さすがに、みやびたる心もたらん人は、山深き一本櫻をこそは、賞すらめ。清き泉の湧き出でゝ、苔などのしき敷きたらんやうなるに、山櫻の匂ひめでたく、葉色まで、もに立つばかりなるに、めで來ん人もなく、いと靜かなるは、いかでか都の花のくらぶべき。又風のまに〳〵、御誦經の聲なとの、聞ねたらんは、いかばかりものさびて興あらんかし。

岡澤のぶ子

妾が師に、某の君とて、いみじき歌よみおはしますなる、世をうき物にして、山深ういほりしつらひてぞ、いまそかりける。今年彌生の中の六日、久々にて、音つれ侍りしに、時しも櫻の盛にて、庭の面は、さながら三冬の雪かとあやまたれ、しづかに暖けき春風の外には、蜜蜂の群れる、胡蝶の散り行く花びらを、そが友かと追ひ行くのみ。近ほとりには、くたかけの聲とも聞ねず、實にはこゝのやまかと思ふばかりなり。師の君のみやび心もて、此處に庵しつらひ玉ひしも、うべ、理にこそ。

齋藤綾子

大和心を人とはゞ朝日ににほふ山櫻花とは、よくも大和男の氣質をあらはしたる言の葉なるかな。艶なる其姿、氣品ある其の眺めは數ある花の及ぶべくもあらじな。三芳野、御室の花は言ふも更なり人里遠き深山の山櫻こそ、見所多けれ。處女の時めく流行につき、世俗の塵に穢されて、綺羅を裝にも引きかへて、其天眞無垢なる山櫻の、勝りてよきは理りなり。其花の木立然れる峽に時をたがへず咲き出づることの雄々しき、見る人もなきに咲きおくるゝこともせで匂へる樣、さそふ嵐にうらみもせで散る樣は、實に此の世にある人の眞なる鏡にて、大和男子の本分ならん。此の心こそ、我國民の誠意にて、外國人に勝るゝ故ならめ。されば、世にありとある女の子どもこの心していとし子をはぐゝみ育て、散りはてし後も、おほ其名のかほれかし。

稲非敗女

彌生の中頃、或山里の知るべの許にやどりて、そがうしろの山に分け登る事ありしが、かゝる里にも、さすがに春の光りはへだてなく横ほりふせる山際に、うちかすむ木々の梢もめあたらしく、そこはかと聞ゆる谿の聲も、おのづからのしらべゆかしく、げに空の色も物の音も、打ながむるかなたの繁みに、白雲なしてたな引けるものこそあれ、何ならんと、木の間わけつゝ行き見れば、思ひかけきや、今を盛りの山櫻の、日影に匂ひて、まばゆくも咲き亂れたるに

てぞありける。あはれ、此花よ、かく人目なき深山の奧の、誰めではやす人もあらじをそをうらめしとも、かなしも思はで、咲くべき時をあやまらず、匂ひいでたる心のかをり、身にしみてあはれに、ゆかしくこそ覺えしか。

つら〳〵世の樣を見るに、名をしられん爲めに、をこのわざするやからあり、甚しきは、其待遇のほどにつきて、厚薄事に從ふの人もありとかきく。これ等の人、此の花を見ば、如何なる感をかおこすらん、あはれ、人たるもの、此深山の櫻にかへりみて、己が本分を守り、行ふべき道、なすべき業を、うらおもてなく、ふみもつとめもしたらんには、木がくれて朽ちはてぬとも、心はいつも春の如く長閑なるべきに、など、一人つぶやきけるが、かくうるはしき色香を、此まゝ殘しゆかんも心あかれば、花の本意ならぬかは知られど家なる人にも見せまほしさに、一枝をりて山をおりぬ。

山内鳶子

早咲きの、都の花は、名殘なう、散り果て、今は卯月も過ぎなむとす。折しも、深山に、只獨り、取殘されし櫻樹のもと、里さへ遠き奧山の事なれば、松吹く風の其外に音なひ來る友もなけれど、何をたよりに咲きけん、櫻の、美く匂つるあり。されども、今は滿開にて咲き殘らず散りもせで、此の見所を、誰一人、知るものもなし。此花よ命長からば、都の友に知らせむを、あはれはかなき一夜の内に、雨や嵐に散らされて、きのふのおもかげは、いづくともなくきえうせて、木末に殘る只一ひら、是れさても浮世の無情をうらみてか、名殘もをしまで散り果てし、後は、葉櫻に、人にきらはるる毛虫の生ひ立ちて、かり人さへ見向きもせず、只折々あはれになく、せみの聲のみ、木のまより、もれくるをきくこそくるしけれ。

池田みさを子

花といふいと澤なれど、櫻を以て花の王となすとかや。其中にも、深山のばかりいみじきはあらじ。人足たえしのみかは、枝にさへづる小鳥さへ稀なる、山又山の奧にありても、時をたがへず、春來れば淸き心の色に匂ひいで、聊か賞贊を求めず、一夜の嵐には、いさぎよく散りて、名殘を惜まず。之を、今の世の、動もすれば智か才能のほかに知られんことをひたすらに希ひ、身の本分てふ事に、心を置かで、徒に名利をてらふものに比へて、其けぢめいくばくぞや。實にゆかしく慕はしきは、深山の櫻にこそ。あはれ、世の女子たち此の花にたちむかひたらんには、いかに、敷島の大和心を人とはゞ朝日ににほふ山櫻花の口歌も思ひあはせられて、一しほあはれにならん。

郡川ちとせ子

あしたには、うらゝかなる旭に匂ひ、てりもせず、曇りもはてぬおぼろ月の下には、小夜の東風に、いさぎよく、散りはつる山櫻こそ、またなく雅けれ。よしあだし花に、あてやかなる色香は、及ばぬものありとも、淸き操は、いかでか、これに比ぶべき。されば昔の雅人も、しき島の、やまと心に、たぐひつゝ、めでにし事も、ありときゝぬ。げに、山里ふかく、浮世をよそに、咲き亂れたる風情は、なべての花の、いろ香にも、まして、奧床しくば、思はれける。

榊原みさを子

いとのどけき、春のけしきに、そゞろに、心のうきたちぬれは、の

親しき友垣、三人四たりそゝのかして、ちかきわたりの、峰のさ蕨折りにとてたちいつ、路すから、けふのやまふみ、姿こそ此こにはみたしとめ、否姿こそなと、打興しつ、やう／＼、山にさしかゝりて、いてやかた／＼、おくれ給ふなとて、おのも／＼、木切ひさひとり、おひしける雑草、かきわけ。木間かきさくるほとに、いちはやくも、一人の友の、姿こそ先登第一なるよ、はやも得つるは、見給ひねと、ほこりかなるに、いと口惜しうて、皆々まけしたましひふりおこし、かなたこなたあさりありけとも、もとより、山ふみならはねは、なか／＼に得かたうて、はてしもなき山路、そこはかとなく、あこかれありきつ、はては、やう／＼、うみつかれて、やゝら、木の根に、やすらふ折から、一人の友の、これもこうしはてたるか、ちり打はらひつゝ、あまりに口惜しきものから、一本なりとも、得てしかなの、心にまかせて、おもほえす、山深うも、わけいりつるよ、ふもとにさわく、人々の聲もきこえねは、柴人の通ふみちさへもなしと、磁石とりいたしなとしつるに、遙けきかなたに一人の友の聲の、こたまにひゝきて、やよ、かた／＼、いつこに、おはします、はやう來まさすや、とく／＼と、いとせはしう、呼はるるに、さては、深にこそ、見いたしつるよ、うれしやとはかり、またもあへき／＼聲するかたに、たとりゆけは、いとけはしき、谷にのそみてたゝすめる友の、こゝ見給ひねといふに、あやしみて、おそる／＼見おろしつるに、こはいかに、幾世へにけんとも知られぬ一本の櫻の、いまをさかりと咲きみたるゝなんありける、あなやとはかり、青の葉もなき折しも、木の間にさしくる夕日のかけ、まにゆうてりそひて、匂ことなきに、そよ／＼と松ふく風に、二ひら三ひら、ちりかふ花ひらの、岩まもる清きなかれに、うかひぬるまゝ、けに、たとふるものもなくて、憂き世のものともおもほえすな ん。あはれ、一枝をしも、けふの家つとにもかなと、かなたに、まはり。こなたによち、千々こに心なくたきつるも、かよわき女の、なか／＼に、手折るへくもあらす、むなしくたゝすむうしろのかたに、ねたくも、ねくらもむる、群鳥の、かまひすしう、歸路いそかしかほなるに、いとおとろかれて、いまは詮なし、昨もうへりぬるに、いつまて、かくてやるへき、いさまからん、さうなかしらうなかされつ、心のこして家路へこそは、たとりつきぬれ。思へは、いまもなほ、ありつるさまの、面かけにうかひて、わすれかたく、なか／＼に、見さらましかはと、いと口惜しさにかくなん、

あすもまたたとりてゆかんみやま路の
谷まに匂ふ花の木かけに

大村諸賀子

きのふけふ梅のさかりと眺めたりしも、はや、心もとなくうつろひて、いつしか白雲のうきたころとなりぬ。よしのすみ田の名所には花かさすなる宮ひとの、をちこちよりつとひきて、そこはかとなく見はやしありきたる。かゝる所にさきつる花のさちそかし。さるを八重また八重にかさなりて、袖ふりはへてとふ人もなく、たゝしつのおきなが、あさな夕な、木こりのゆききにおとつるゝはかりを友なる深山に、咲き出てたる花や、いかに、春としもたれかつけやりけむ。やよひのそらたかはす、さき初むるそ、いといふかしきや。

東苑　さくら子

花をのせて流れくる谷川の水に、深山の春もゆかしとて、父上の思

立ち給ふに、おのれも従ひて行く。さしゆく方は、七重八重かすみの立ちへだつれど、なり〳〵春風にほころびたるひまより、こゝかしこのみれのおほつかならず見ゆる景色のめでたし。遠くは白雲のたなびけるがごとく、稍近きは、消え残る雪のごとくに見出でられたる、こゝに、嬉しうて足も空にやう〳〵わけ入れば、げに峰にも、尾にも、はた、行く手にも、一本二もさゝ、今を盛りにて、しらぬまに、わけこしかたも、花の白くもいく重さまでかさなりぬ。やすらひてはゆき、行きては見つゝ、父上に、もてなしさけなどすゝめ参らすれば、ふくさしもなき風に、高峰の花の、ひさひらふたひら、かろくちり来て、うけなば、盃にも入りぬべし、あひこゝちに、くれなばなけのさ、ずし給ふに、おのれも、いたくなわびそなざ、わし参らす。しつの男のいづくよりさもなくよろほひ出でて、薪おろして、おなじく、近き花かげにやすらへるは、彼もなほ、心あるべく、その姿桜かはりてなかし。世放れたる所にて、俗人の穢れむさもせず、ちまたの花にまじらひて、砂烟にめもあかれぬわびしさ、公園の小みちにさまよひて、なま男等に、花ならぬわがごちのかほのよしあし評せられむうるさゝもなくて、ねがたき風情をさへそへたる、深山のおくにあくかるゝ長閑さよ、家つさに一枝をれさ、父のの給ふに、

あしびきの山ふところの櫻花
手折るもおくもわがものにして

さて立ちよりて

しかすがにあなさりがたし山櫻
手折らむさおもふ枝はたかくて

このすさびには、つゝむしべき女がみにも、げに、こよひは、花かげにさしのばるゝを、かぎりあればさ、父のかへらむさし給ふも、本意なくてなむ、

谷川の水の瀬に春がすみ
かくす深山の花を見しかな

さ父も詠し給へば、われも、

ちる花のうたかたならで谷川の
そのみなもとによさむわれかな

中村らた子

曙の空のどかに鳥の鳴き渡れば、まだ暁のくらきより起きいて、朝げしきなどめではやさ、裏手の窓の戸おしひらきて打見やるに、遠山のまゆもほのかに霞をふくみて立てるさま、いさ〳〵美くしう、それかあらぬか、白雲の尾上にたなびきて、さかりにに匂ふ山桜にやなさ思ひやるに、まれにだにさふ人もなく、さくらもさこそほいなく思ふらめ、あはれ同じ花ながら、都の内に咲きたらましかば、袖ふりはへて宮人もさはんものをさ、見いるにいつしかあかれます日のまばゆきまでてり渡るに、驚きいそき其日のつとめにかゝりぬ、

廣田さめ子

里近う咲出たる、花の木の本は、あたなる人こそ、おほかめれ、さればしつかなる庭も、かなさ、山深くたつね入りけり、はるかなる木立のひまの白く見ゆるは、だつぬる花ならんさ。いそぎ行きて見れば、古き堂ありて、あたりきよらにはき清めたるは、たふさくて花の香も又なくなん。されば、堂にこし打かけ、ひさりつく〳〵眺めなれさ、さひくる人もなく、いさしつかなり、折〳〵梢を渡る春

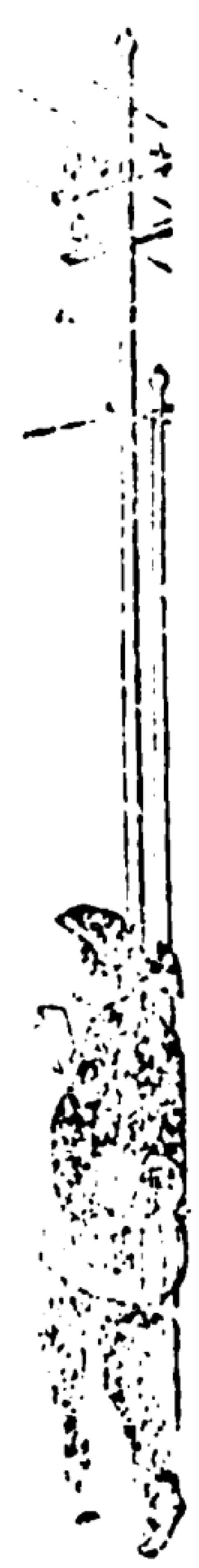
風に二ひら三ひら花のちり行く様は、心ゆくばかりにて、あはれさいはんかたなし、

畠山千代子

四季折々咲きいづる花の数々あるがなかにも、年ごさ春立つ日より、人も我もたのしみまたるゝ我日本の櫻の花におよぶものはあらずかし昔のことわざに、人は武士花は櫻さいひしもことわりなり。此の日出度き美しき花のなかに、又こきもうすきも、八重も一重もありて、いづれおとらぬ色香に咲き出づれど、庭のおもに木ふりをつくり養ひたてゝよき花さかせばやさ人々の盡し櫻木は上流にてよき教を受けおひたち給ひし姫たちの如く美しけれど其れさはこさかはりし深山木のやしなひもなく手入もなきたごろが中に生ひたてご粋もすなほにしてまからず、雑木のうちにたちまぢりて、八重に重なる花もなく、只々一重に色もうすく咲き出でたるぞ、其すがたなにさなくゆかしかりける。此花こそ、ひなにたひたちし賤の女が、をしへを受けず、生れながらの人の道を盡し、後世までも芳しき名をのこす貞女淑女にたさへてもに見まほしけれ。わらはらが友さなす、女鑑其外のふみさもに見ゆる如く、貞女孝子ば、ひなの人こそ多けれ。都そだちの中々におよぶべくもあらずされば、恐あまれき君が代に生れあひて、學の道に入り、宜き教育をうけてそだちゆく姫たちよ。此の深山の櫻花におさらず、やまさにめでたき花なりさ、外國迄もめづるよう、いそしみまなびたまへや。我らも友々まなぶべくなん。

木川里子

里の花はちりぬれど、高ねの櫻はいまだ盛りなるべければ、いでやありかなたづれんさて、おなじ心の友がきそそのかし、山路をさしてたどりけるに、うらうらさ棚引わたる霞にわけゆく袖もいさのどけく、路すがら萌いづるわらびなど手折つ、岩のかげ路ふみならしそこさもしらずまどひあるきて、いつしか人里さほく山がづにあふこさもまれになりゆくまゝ、やや足のつかれも覺ければしばし木かげにやすらひてゆくての方をながむれば、八重に棚引白雲かはた消やらぬ去年の雪かさ見まがふばかりに、今をもなかに遠近に咲つつくみ山のさくらのさかりなるに、うれしさかぎりなく、心もそらに足のつかれを打わすれ、彼方をさしてゆきけるに、雲にわけいる心ちして、ゆきかふ人の引もきらぬ都の花のらうかはしきにひきかへて、そこはかさなく囀る百千鳥のこゑらいさのどけく、谷川の水のながれも音清く、げに仙人のすみかもかくやさおもはれて、そぞろに身にしむをかしさいはんかたなし。老木の蔭にやすらひて、いたくなわびそさ口すさみて、あからめもせず時をうつしけるに、いつしか日影のかたぶきそめしに驚き、家路につけども心はあさにのこりていく度かかへり見つつ、夢の中にも花ぞちる、一夜の旅ねをもせまほしけれなさかたみにかたりあひて、みゆるかぎりはみかへりみかへり、あかぬ名殘にわかれしはいさいさなしききはみにん。



新年雪

ゆたかなるためしさやみん位やま
　さしたつそらにふれるしら雪　出田　香川子

豊葦原さかゆく御代につもりけり
　さしあらたまる今朝のしら雪　萩小野稲慈子

たちかへるさしのあしたの大内山
　よそひて雪のふかゝるなるらん　仁保　正子

ゆたかなる御代のしるしさ新玉の
　さしのはじめに雪ぞつもれる　徳永　萬籌子

ゆたかなる御代のしるしさ新玉の
　さしのはじめにつもるしら雪　吉弘　周子

たちかへる年のはじめにふる雪は
　御代豊かなるしるしなりけしり　小森　輝子

新玉のさしたつ今朝はあしびきの
　やまよりたかくつもるしら雪　澤田　春子

新年の四方のやまやまみわたせば
　はつ日まばゆくつもるしら雪　酒井　小谷子

大御代の年のはじめにふりつみて
　あさ日うららにみゆるしら雪　佐々　小琴子

あたらしく賤がふせやもあら玉の
　さしゆたかなる雪ぞつもれる　佐々　有鄰子

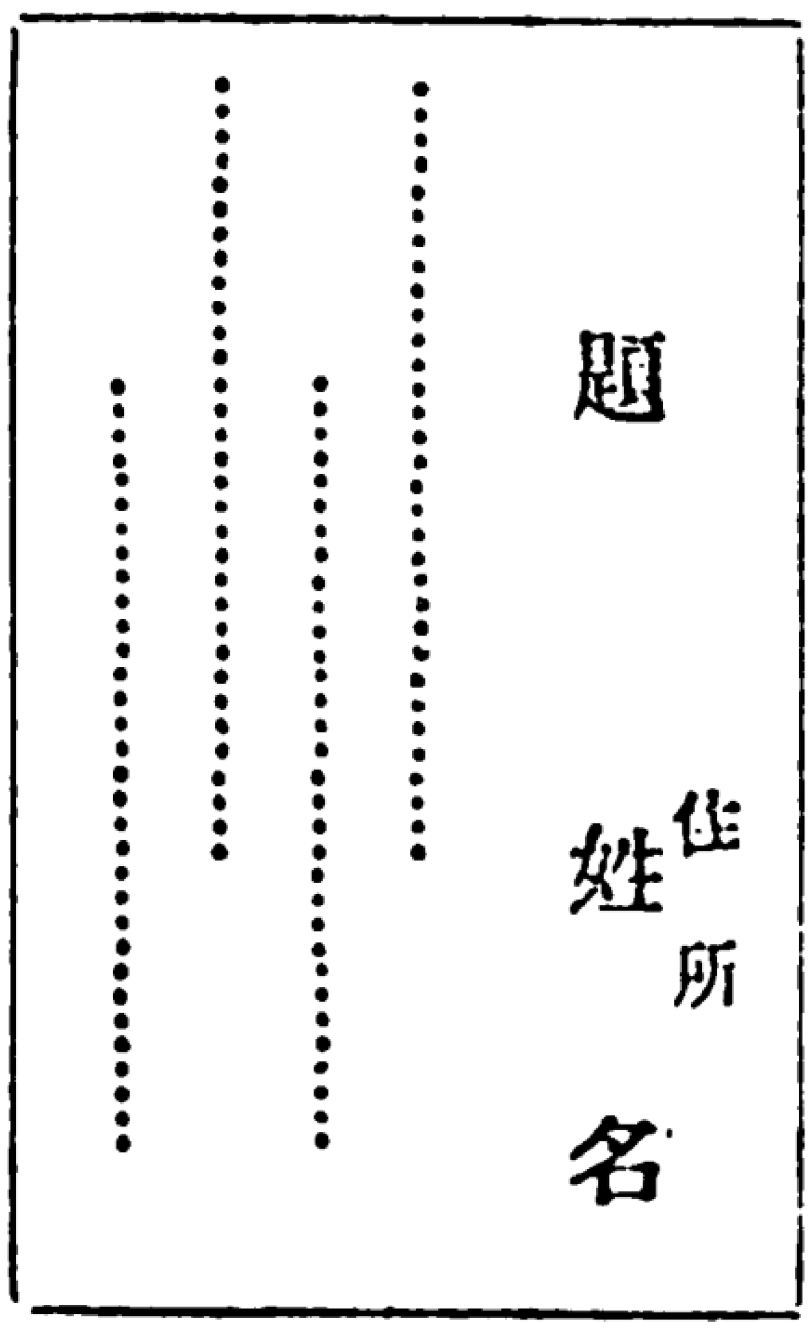
立ちかへるさしのはじめの雪の花
　朝日のかげににほふのごけさ　右田　照子

新玉のさしのたちはのうめのばな
　にほひあらそふ雪のさやけさ　右田　藤子

（以下追出）

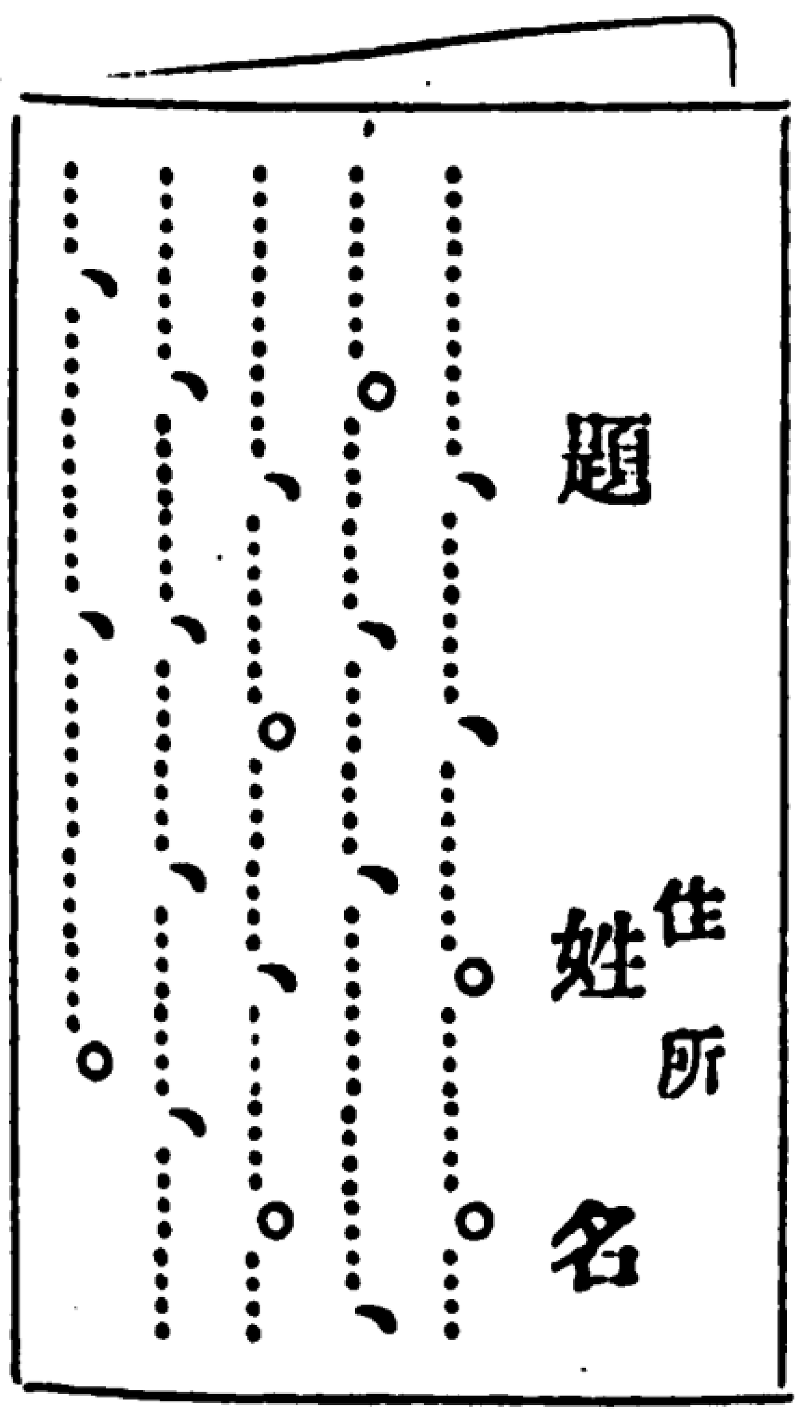
●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式



用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式



用紙は半紙二つ折の事。字體は詳明に記し、句讀點を施すべし。

總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて、個々に離て認むべし。

書式に違ひたるはすべて没書とす。

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すへし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價	一冊 十錢
	六冊前金（三ヶ月分） 五十五錢
	十二冊前金（半年分） 壹圓
	全國無遞送料
廣告料	五號活字廿三字詰一行金二十錢

明治三十一年三月四日印刷
同年三月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 川崎直衞

東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人 並木艮雄

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 （電話番號本局八八） 國光社

時計價格概表

金側

●十八金無双裏三枚蓋廿一形龍頭卷價九十五圓ヨリ百七十圓迄●同中硝子價、十五圓ヨリ百二十圓迄●十四金無双中硝子價九十五圓ヨリ七十五圓迄●同片硝子價四十圓ヨリ六十圓迄●十八金無双裏三枚蓋七曜月日指シ月ノ滿欠十二月及引打付價二百九十圓ヨリ四百五十圓迄⊙米國製十八金廿二形無双中蓋付龍頭卷價百二十圓ヨリ百五十圓迄●同十四金價五十五圓ヨリ九十五圓迄●同十六形價六十圓ヨリ八十五圓迄

銀側

●無双 三枚蓋廿一形龍頭卷價二十三圓ヨリ七十五圓迄●同片硝子價十五圓ヨリ三十五圓迄●同片硝子裏三枚蓋二十圓ヨリ六十五圓迄●同片硝子價廿圓ヨリ卅三圓迄●同片硝子器械シリン價七圓ヨリ八圓五十錢迄●無双裏三枚蓋廿一形引打付價八十圓ヨリ二百五十圓迄同片硝子價七十五圓ヨリ百七十五圓迄●同コロノカラフ付百七十五圓ヨリ二百五十圓迄●同コロノメートル價六十圓ヨリ八十五圓迄⊙米國製廿一形無双中蓋付龍頭卷價十八圓ヨリ三十五圓迄●同片硝子價十六圓ヨリ十七圓五十錢迄

金著側

●米國製廿一形無双中蓋付龍頭卷價二十三圓ヨリ五十五圓迄●同十六形十八圓ヨリ三十五圓迄

銀七寶

●端西國製銀七寶側裏三枚廿一形龍頭卷價廿圓ヨリ卅五圓迄●同四十圓ヨリ五十五圓迄

鐵側

●端西國製片硝子二十一形龍頭卷價五圓ヨリ八圓迄●同九圓ヨリ十二圓迄

白銅側

●端西國製片硝子廿一形龍頭卷價三圓ヨリ七圓五十錢迄●米國製廿一形片硝子價六圓五十錢

時計及寶玉類貴金屬美術品商

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八番地戶

天賞堂

（電話番號本局三百三十三）

東京市神田區小川町十九番地（電話架設中）

天賞堂小川町出張所

大坂市南區心齋橋北詰北ニ入ル

（電話番號七百三十三）

妙技一等賞牌



天賞堂大坂出張所

名古屋市本町通玉屋町二丁目十七番地

天賞堂名古屋出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地

天賞堂廣島出張所

熊本市唐人町通上鍛冶屋町十番地

天賞堂熊本出張所

長崎市萬歲町上野屋方

天賞堂長崎臨時出張所

北海道小樽色內町越中屋方

天賞堂小樽臨時出張所